麻生路郎主宰

川柳雜誌

新春特輯號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十一年一月一日發行　第十三卷第一號（毎月一回一日發行）

一家に一瓶是非必要！

皮膚障害・外用藥

仁丹の靈泉

◎全國到る處の藥店にて販賣す

驚くべき効能！
驚くべき効能！
驚くべき効能！

本劑の主治効能

霜ずれ　霜ヤリマク
たゞれ手足あれ
切り傷吹出もの
打傷にきび
やけどあせも
水虫　蚊
しもやけいんきん
たむし　蚤・蚊・ふと

◎スポーツの外傷に殊効！

東京・森下博藥業所・仁丹本舗

ルービヒサア
ンオニエ
特製
ルービ
清涼飲料
ンロトシンポリ
ーダイサ矢ッ三
水野平矢ッ三
社会式株酒麦本日大 宮内省御用達

川柳雜誌 第十三卷第一號 新春特輯號目次

扉 本社屋上の路郎主幹

文苑

武玉川二篇研究（三十一）……梅本秋の屋
金色蝙蝠……森東魚…（六）
枕草子と川柳味……麻生路郎…（五六）
紫・紅・茜……石崎柳石…（三三）
川柳時評 東京から……西田艸樂…（四六）
川柳の動向と將來……高須啞三味…（二六）
當世不通漫談（完）……山本雨迷…（六八）
承德見物（一）……梅本塵山…（三九）
大島濤明…（五〇）

酒と私

川村花菱　柴谷宰二郎　穎原退藏　岡田三面子
長崎柳秀　池澤樂居　鳥山一歩　長谷川一撒
窪田銀渡樓　長岡半太郎　前田五健　赤井清司

新春特輯ページ…（四九）

大島濤明　蛭子省二　篠原春雨
安川久流美　米村あん馬　小林不浪人　前田雀郎　川上三太郎
田中辰二　森東魚　藤里好古

ア・ラ・カルテ

街に住めば……高橋かほる…(五八)
田舎の話……尼　綠之助…(六〇)
田舎に住めば……竹内機見女…(五八)
イニシャル判斷……不朽洞…(六一)

創作

丙子元旦の句……麻生路郎…(五)
近作柳樽……麻生路郎選…(一〇)
川柳塔……麻生路郎選…(三〇)

日本柳壇百人撰……諸家…(四〇)

粒々集……柳秀・久流美・五健…(二九)

日本名所名物川柳(四國の巻)……前田五健選並繪…(六六)

京阪神支部聯合主催 **忘年川柳大會**……九天記…(七二)

一路集……麻生葭乃選
松の紋付……増位汀柳選…(七〇)

各地柳壇……路郎・艸樂・汀柳整理…(七七)

柳界展望……(九〇)

編輯の窓……汀柳…(九二)
川柳家の戸籍調……綠雨…(七〇)
表紙畫……富本憲吉……
本社關係の人々……(九三)
本社句會案内……(六五)
表紙題字……路郎主幹……

川柳雜誌社屋上に於ける麻生路郎主幹

寢轉ぶ癖の
僕に
海上雲遠し

路郎

武玉川二篇研究（二）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(557) 黒小袖どちらへ出ても口か合

省二＝黒小袖は充分調査をしたが、「口が合」とは……小唄に「春霞、ひくや由縁の黒小袖、これもゆるしの色里へ、根扱して植し江戸櫻松の刷毛先透額、東男子の出立はまふの名取りの草の花」と。

秋の屋＝享保天明の頃の通人等は、黒羽二重の小袖を着たもので、歌舞伎十八番の助六も、此の黒小袖である。これを着て遊里に行けば、煙管の雨が降つて、女達と口がよく合ふであらう。

東魚＝あゝでもないと云ふはてが、黒に落ち付く。前説の如き通人なのであらう。

省二＝賛成。黒小袖に紅絹裏浅黄の無垢、紫の鉢巻は助六の風情だ、

(558) 錢提て大津を歸る山法師

省二＝叡山の法師に對し、「錢提て」は荒つぽさが窺へる。

秋の屋＝托鉢して貰つたもので無く、金銀貨と交換した錢であると思ふ。

東魚＝無造作に錢のさしを引ツ下げた處が、山法師の風貌を描き得てゐる。

(559) 親孝行の蓑を着て泣く

省二＝孟宗、王祥等の話は有名。「雪降に出るは和漢の孝不孝。で、蓑着て泣かぬやうなのは、「笑はせに蓑着

て雪の仲の町」の親不孝者だ。

秋の屋＝不孝者は蓑を着て親を泣かせる。

東　魚＝云ひ廻はしが練達されてゐる。

(560)　**有し世の一ツ殘りし釘隱し**

省　二＝一つ殘つて居る釘隱しにより、昔の榮華の程を偲ぶ。「一つでも昔ゆかしき釘隱し」（武四）

秋の屋＝昔の大名の御殿などには、往々精巧を彫刻した釘隱が有つたと聽いてゐる。

東　魚＝「有し世の」と云ふには適切でないが、今日でも桂御所の釘隱などは有名な名作である。

(561)　**面白い人と言れて草の庵**

省　二＝風流人だらう、世捨人だらう。

秋の屋＝吉田兼好なども、此類の人であらう。

東　魚＝良寛和尚の如きか。

(562)　**筵帆の恥を思はす岸を行**

省　二＝むしろ帆を、恥しくもなく、れい〳〵しく上げて、岸近くを漕ぎゆく一艘が、人目につくのである。此句「岸」に趣興を得んとしたもの。

秋の屋＝筵帆でも恥づべき理由は無いのに、何故に斯く言つたもの歟。

東　魚＝貧弱な帆のくせにと云ふ心持だけであらう。

(563)　**駕に乘たは弔のまゝ**

省　二＝裃につく駕舁はたけたやつ、デ其實つけられたのは、内心の目論見通りなのであらう。弔歸りをその儘乘込む吉原、イヤ人間は複雜な動物だ。

秋の屋＝裃姿では大門を潜れぬ故、辻駕に乘つて繰込む大一座の頭分である。

東　魚＝大門内は駕は乘れない規定であるから、中宿まで乘り付け、其處で裃をとると云ふ段取りになる。

(564)　**友達のひや〳〵おもふ譽詞**

省　二＝此句は拾遺九篇にも出て居る。譽詞には二種あつて、役者が互に譽め合ふもの、觀客が役者を譽め言ふもの、句は後者に屬す。「隣からあぶなくたもふ譽詞」（武、六）＝「川柳江戸歌舞伎」に上記の二句が掲載され說明がしてある。故人の靈を慰むるために御一讀下さるを念望する。

秋の屋＝私は明治五年三月、村山座に於て澤村田之助の一世一代の狂言を出した時、柳橋の藝妓が譽詞に出たのを見物して、今猶それを記憶して居る。此句の譽詞は、單に看客が俳優に對して、日本一とか成田屋とか聲を懸けるまでの事と思ふ。

東　魚＝私も父から其譽詞の事を聞いた。假花道へ柳橋の藝妓連が立ち並んで、「田之助さんをほめやンせう」と云ふだけであつたとか聞いてゐる。秋翁の云はれたのは恐

らく、此の時の事なのだらう。

省　二＝重複氣味あれど、譽詞に就て森律子さんからの通信を記して置く。

「元祿頃から始り「暫」、「助六」、「顔見せ」、花時、登り興行などの時に、役者が花道から舞臺にかかる時見物に向き直り、その時豫め打合せてある土間の見物中の藝者又は幇間が、「市川團十郎さんほめやんしよう」と云つて花道へ立つてほめる、役者の紋づくしなどの即席ほめことばを喋る。それから芝居になるといふこと、そのほめ詞の記錄は見當らず、最近に於て十四五年前、段四郎、中車、高麗屋などで五人男を演つた時に、この譽め詞をやつた。それは見物中からでなく、一座の女形が藝者になつて、五人男を花道へ並べて、その女形が舞臺から五人の紋づくし譽め詞をやつた。昔は見物の中から花道へ立つたのを、座中の女形の舞臺からやつた。その時の詞の記錄はない。」

(565)　**冬からのうそか溜て鯛を買**

省　二＝冬からの嘘が溜りに溜つて、どうしても櫻鯛でも買ひ、御馳走せねばならなくなつたのであらう。

秋の屋＝此れは新年の掛軸である。櫻鯛にしては時期が遲過ると思ふ。正月の儀式であるから、たとひ否でも買はねばならぬ。

東　魚＝それでは元が切れますと云ふやうな嘘＝その儲けがたまつて目出度初春の鯛を買ふと云ふのであらうか。＝「冬からの」がどうも充分解らぬ。春に對して「暮からの心持ちか。

(566)　**林間の今燒付と又しくれ**

省　二＝林間に在る燒は窯へ、一時雨降るのか。それとも純然たる風景詩で、林間におちて居るものを集めやく、煙への時雨か。

秋の屋＝「林間暖酒燒紅葉」で、「燒付」はたきつくと訓ませるのである。決して陶磁器の窯ではない。

東　魚＝折りくべた枝が、ひら〳〵と炎を上げかけると又一時雨來たと云ふ光景であらう。

(567)　**獵師の妻の虹に見ゝれる**

省　二＝夫の留守を守つて居る獵師の妻が、虹のたつたのをみて、暫し氣をとられ、獵の無事に安神をするのか。雨で獵に出掛けられなかつたのが、漸くあつて虹がたつたのを、暫し見とれる妻なのか。

秋の屋＝海上の時化が漸く歇んだのを、遠洋に出漁した夫が、無事に歸鄕するであらう、と其妻が天空の虹を望みみて欣ぶさまである。

東　魚＝遠洋出漁の場合でなくとも、單に沖に出てゐた夫に對して、さつきの夕立はさぞ困つたらうと思ひつゝ、ほつと安心した心持ちで、虹を見上げるのであらう。

(568) **四も五もくはぬ下戸の關守**

省二＝下戸の生眞面目な關係は、前事一本調子だ、彼れ是れいふやうな、そんな手はくはぬ。（上戸の關守の句は前出）。

秋の屋＝「神代にもだます手段は酒がいり」で、上戸であるならば、又何とか手段もあるが、下戸であつては始末が悪い。

東魚＝ユーモアがある。

(569) **佃の休み見て髭ぬく**

省二＝江戸の圖へ點をうつた程離れた佃の句に、「佃島とゝでまんまとをくふ所」。漁夫部落であつた。休獵の退屈しのぎに具で髭をぬいて居る。長閑さが描かる。此句多くの人に愛誦さる。

秋の屋＝漁村の光景が能く表現されてゐる。

東魚＝「髭ぬく」と云ふ音調が、のびやかさがないやうと思ふ。面白い着想である。

(570) **いつの間に喰ふ神子の辨當**

省二＝神子は色氣があつたものに、右川柳に詠まれてゐる。だから辨當をくふに暇とるやうな、艶消しではないさ——あの神子は、いつも居るが全くいつ晝飯を食ふのだらう、などと不思議がつてる面々の方がみものだ。

秋の屋＝朝から晩まで、幣と鈴を持つて舞つてるが、何時飯を食ふか、小便をするか、などと見物人は餘計な心配をしてゐる。

東魚＝輕い味が良い。面白い句である。飯などにかゝはりもないやうな、取濟してゐる神子だけに面白い。

(571) **せちからい都で歌をよみ習い**

省二＝生馬の眼をぬくやうな、而て半面頗るせち辛い都に住むで、歌などを習ひよむとは、世は樣々だ。——歌詠みは上流階級か浮世に遠ざかつた人等であつたからだ。

秋の屋＝京都は世智辛い土地であるに、其處に住居して能く優長に、和歌などを詠習ふ、と暗に公家衆を嘲笑した句と思ふ。生馬の眼を拔くとは、油斷のならぬ事で、世智辛いとは其意が大に違ふ。

東魚＝アイロニーに可笑味を誘ふ。

(572) **尻も結ず神無月降**

省二＝神無月は時雨月とも稱し、「晝夜のわかちなく陰晴を論ぜず時々急雨あり」で、降るのか降らぬのか、更に見當がつかぬ中に、降つてきたりする。「尻も結ず」は、だらしなき謂ならむ。

秋の屋＝時雨は陰晴常無けれども、其期間は短いのであるから、此の句は「五月雨」の降るとした方が適切である。

東魚＝降るのかと思ふと忽ち止む、取留めのないのを「尻も結ず」と表現したのであらう。時雨でふさはしいと思ふ。

近作柳樽

路郎選

敢て冒險をなすにあらず硝子拭き　大阪　大門

惡友の苦手にされてうちの母　同

採用の葉書ともかく齒を磨き　同

伊東ハンニ捕はる

手にとつて見ればお前も人絹か　同

十二月ひよいと歸つて手を借られ　東京　史葉

炭をつぎだして二あ人無口なり　同

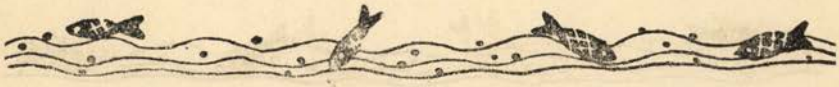
滿員の電車を見てる話ずき　同

物干で妻の聲するいゝ天氣　十三　牧人

觀衆の一部膨れた小ぜり合ひ　同

撒水夫今のは怒るなと思ひ　同

看護婦は俺のはだかに目もくれず　神戸　久米雄



縱からも横からも秋秋の風　同
退院は大安荷物くゝられる　同
雙方に云分のある酒を呑み　十三　鐵心
呑む丈が能ですと妻こきおろし　同
一人づつ事務所で因果ふくめられ　同
ふるさとできつちり坐り母の酌　松江　比呂志
さびしみを癒やすに丸き猪口なりき　同
あきらめてお宮の鳩とたわむれん　同
婦人科へ來ると亭主はかしこまり　今治　松花
夜遊びの秋の深さを知る草屢　同
好轉へ内助の功を認めてゐ　同
信心でない參詣に手間がとれ　文庫
云ひ譯は運の惡さを誇張する　同
佩劍は只善人を嚇す丈け　同
金故につなぐ戀とは淋しいね　松江　登美也
子の爲を思へば後家の淺ましき　同
請求書束ね妾は旦那待ち　同
二十六遂に噂のとこへ嫁き　今治　一風

すねて來た役所へ屆く藥瓶　同
何もかも知つてて女詫を言ひ　同
なんの花かしらねどゆれてこゝろきづ　大阪　故靜太
いしころのわたしのみちをみてるなり　同
秋の汽車いつしよに死なむ夢さめる　同
仲裁に出たのへ二人借りがあり　神戸　吉左右
罐詰を切るに家中持ちあるき　同
鹽辛を出すと淋しい膳であり　同
あめつちのあかるさあつめこく稻ぞ　長野　有爲郎
山と空その隙間から冬迫る　同
サタンは炬燵となり農夫等を待てり　同
逆境へ父の寫眞は笑ひかけ　大阪　木圭
仕事着を包む風呂數惡びれず　同
議論する若さを笑ふ古本屋　同
十二月鍬の心もとんがつた　松江　柳大佐
演習の疲れへ風呂があふれたり　同
大禮服へおとなしさうな馬の息　同
大阪で賴りは貴方一人きり　大阪　利生

ハイキングコースは電車撰つてくれ　同　彩泡
開通の一番乘りは夜を徹し　同　今治　小樓
投錢がまだ〳〵足らぬ猿廻し　同　松江　讓二
コスモスが伸び切つて居る療養所　同　大阪　正一
さようなら其の手も冬のものなりき　同　ト居
髭のびて淋し右の手左の手　同　水客
お茶挽ひて布團に丸うくに疲れ切る　同　愛媛　九紫
燈を消さば潤一郎の氣ともなり　同　松江　圭之助
姿勢よく歩く背廣は釦かけ　同　榮之進
首ふれば首ふる影の寂しくて
泥足のまゝなる父は雜魚を煮き
ハイキング蜜蜂の箱ならんでる
遺骨白し、プラットの長き
初戀が僕の頭を分けさせた
しもやけの足が滿洲諦める
猥談がはづめば過ぎた燗となり
爪みがく女に輕い意地があり
星がまたゝきふるさとのひとを想ふ

目禮へ近眼すこし寄つて行き　同　廣島　都子

ウインドにまで自惚れを寫すなり　同

谷底へ飛ばされさうにカーブする　芳泉

ひまと見え床屋の主人イスに居る　同

皆ひまな顔で見て居るロケーション　柳兒　長野

適任にその椅子のまゝ老ひて居る　同

落ついた姿雀の丸く居る　山川兒　松江

犬がおびえた以上におびえ　同

顔洗ふ水へ雲行く休みの日　星水　高知

子の希望親をしばらく捨てる氣か　同

料理法それから先は舌に訊け　天風子　神戸

誓文でたつた一つを買ひそびれ　同

辻電話話の長い女なり

未納を續け納税組合長にされ　章泉　島根

演習地雀の下りる所なし　同

愛するが爲が別れの言葉とは　和夫　松江

嬉しさの二人は蟻を踏みにぢり　同

蓄音機客の一人が止めてくれ　觀月　尼崎

山の上強く生きんと欲したり　同

燈下管制下女知らぬ間に寢てしまひ　堺　板荷

演說が上手になつて選擧濟み　同

鮮人の可愛がられて眞面目なり　金澤　今雨

米の値は知らず早大びいきなり　同

妻不在

鍵かけて秋の眞晝を讀んでゐる　今治　曉童

硝子戸にかへてかしやの札を出し　同

大阪市こんなとこへも五軒建ち　大阪　文衛

昔ならお侍だと露次に居る　同

姉よりも美しかつた不倖せ　駄留里

雨宿り雨を忘れた百貨店　同

急な坂藝者せはしい下駄の音　船富吹　靜戸　陽出男

レコードは店の構えに似ぬリズム　同

灰皿が小さいと思ふ座談會　大阪　歌都路

浮氣する氣持廣告欄を見る　同

たしなめるやうに時計は鳴りおはり　手風琴

正月の寫眞が出來てきた煖爐　同

クロームの眼鏡も少女のまるさなり　松山　靈子

避けがたき自轉車下りて笑ひ合ひ　同

誘惑がなくて淋しい未亡人　宮森　夢一文

十二月豫期せるもののやうに來る　同

ランデブー靴のほこりをみつめてる　大阪　靜霞

女事務野球の賭も弱からず　同

良緣の姉の無音を淋しがり　熊木　宗正

おちぶれた父の行爲に目をつむり　同

頰杖も出來て火鉢が嬉しいね　竹原　馬占山

若後家といふ美しさ腹立たし　同

女房への嘘の始めは金のこと　高知　六絃

盛り場で白痴は無事に日を暮し　同

親も子も廻り幹事のハイキング　大和　翠峯

子を產んだ顏もせないで共稼ぎ　同

風が去る黑い瞳のうるむ月　島根　好郎

なまけものなり女の手で莫喫ふ　同

おごられるメニューも一度讀み返し　今治　伶人

純喫茶畫は鼠が顏を出し　同

たちば〳〵すでにうけみになつてゐる　大阪　靜波
これしきの賞與子が待ち妻が待ち　同
技師長はベルトへ遠く〳〵ゐる　今治　みの助
ハンカチ振つてゐますがなと教へられ　同
そらなみだ生活線を知らばこそ　松江　比呂志
荷を運ぶ仲仕の口が歪んでる　同
一瓩だ一リツトルだ飯がこげ　今治　尼花
モルモツト空の高さを知らぬなり　同
秋晴に船の世帶のあからさま　大阪　享史
老父母のきらいな髪が伸びて來る　同
不覺にも女の前でよろけたり　神戸　朝雨
手仕事を運ぶ乳母車とはなりぬ　同
怒る時怒る嬉しい男なり　東京　佐保蘭
母娘して音羽家に惚れ無事な秋　同
うなづいてどこか皮肉を匂はせる　松江　笑鬼
大暴風救命美談を生んだだけ　同
柘榴の葉吹いた初戀露路の戀　今治　輝親
美は美なり我は人の子迷ひの子　同

アパートに來て廻禮はチト迷ひ　大阪　沐天
十錢の羽子板なれどよく遊び　同
院長の白髪よ此の世無常なる　愛ケ池　浮鬼
腹立てゝしまつて自分さへ視えず　同
サンルーム椅子軋しませる音のする　朝鮮　如空改　恍二
受付へ來るにも苦勞顏に見せ　同
セパートに產れ運動不足なり　大阪　さいち
雜音にしておく夫婦喧嘩ある　同

商工祭

花電車待つてるとこへ靈柩車　大阪　葉光
機嫌よくヒスの妻君襷がけ　同

或人が妻の面前で良緣が出來るとの辻占を得る

良緣の辻占妻に怒られる　高槍　柳夢
あづき粥啜りながらの阿波訛り　同
プチブルの娘晦日をスキー場　大阪　いの助
床拔けてまどへる蜻蛉出してやり　有馬　向治
賑やかに戻つて女房芋をくれ　大阪　紫香
呑んで寶て茶漬の朝が待遠し　神戸　蘇堂

仇枕金があつたらなと思ひ　愛媛　木屋
炬燵など笑つて悴甲種です　松江　ひろし
逢ひたさを臍に秘めてアスフワルト　松江　一平
母一人養ひかねて卷煙草　大阪　菊路
小遣を稼ぐこゝらの娘の太り　　いさむ
乏しさに馴れて浮世も面白し　島根　美紗子
醉へば妻子へ捨鉢な言葉なり　金澤　綠水
善人を疑ふほどに金を貯め　松江　白菊
傑作へモデルは皮膚を疑へり　東京　魔公
次男坊利子で喰ふ身を齒痒がり　奈良　葉魚
傷心へ跋つこの犬がじやれて來る　松江　庄介
金とると云はず何々研究會　愛媛　默紅
末ツ子の無理をなだめて佛間の灯　兵庫　水樓
新妻となつて初傳の菊を活け　大阪　煙柳
きゝてがあつて愚痴も嬉しき　今治　都留逸
正月をどてらで過す官舍なり　東京　肖五
金策の友に捧げるバツト代　大阪　大佛
ぼつちやんの無い奥さんの小犬なり　伯耆　小判

特價品上から下へまぜるとこ　大阪　雨舟
おちつきがどの娘も出來た秋袷　伯耆　秀峰
時化の日の脛の白さよ戀でなく　今治　公美
事務員も同じ女と見る女工　鐵川　樗柿
回春を希ふ一服づつを飲み　盤路　明坊
制服を脱げば看護婦女なり　山口　狂路
踏切は馬力の音へ柵を垂れ　大阪　鳴草
適當に飲む事もまた難きかな　大阪　寒草
カルモチン買ふ顏色を怪しまれ　尼崎　留治
煤煙によごれた現場の顏で會ひ　尼崎　文月
一人旅一人ぼつちの酒が冷へ　大阪　水煙
母の夢伴の嫁が手を揃へ　天満宮　木患子
ぢきねつきうる健康をうらやまれ　石川　義風子
水煮きに四十越過ぎた戀を見せ　神戸　九葉
よく越して來たと去年の話なり　東京　柳之介
新聞の返事小供の物足らず　愛媛　肱南
目覺むれば夢の續きの雨の音　大阪　花鳥
とても良い仲をライトに照り出され　朱椀坊

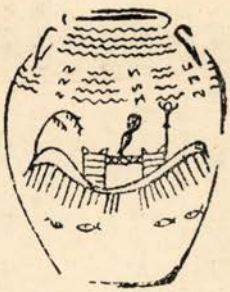
バス嬢の言葉通りにバスに搖れ　春巣（加古川）
糸鋸の手工へ兄は兄の智慧　梢雨

多忙

通勤の朝だけせめて秋を吸ひ　天秋（大阪）
女房の愁の皺も剃りたいなあ　さわだ（名古屋）
旅馴れてゐるトランクは艶がなし　龍鳳（名古屋）
友達が來て二階から柿をとり　心府（今治）
内科外科眼科と命危ふまれ　丁路（京都）
有難く子のボーナスに禮を云ひ　八白（名古屋）
母親のない兒の嘘をきゝのがし　貴代志（京都）
一波瀾ほしい若さを飲みならひ　徳三（大阪）
肴屋の兄弟が逢ふ街は晝　蕪人（名古屋）
染換へて又平常着に惜しくなり　双亭（兵庫）

病床

青春を蝕むベットに陽をみつめ　笑朗（島根）
若輩とたゞそれだけでかたずける　朴泉
大原女の御辭儀は腰へ出してゐる　正柳（尼崎）
信者になつたのかと惡友の言葉　一更（蛍ケ池）



枕草子と川柳味

石崎柳石

平安朝女流作家の手になる文學作品として清紫二女の作品は、永久に我が文學史上、不滅の光りを放つて居る。その中、韻文的で、短い詞章の中に鋭い、女性特有のデリケートなる觀察の閃きを味はせるのは、清少納言の隨筆集「枕草子」であらう。これが我が國隨筆文學上の一高峰として仰がれるのも、そこに汲めど盡せぬ情熱と、永遠の時の流れを貫いて朽ちぬ、正確に把握されたる自然と人生との眞に徹し、その眞相を摘出したに依ることは言及する迄もないことであらう。

「虛にして往き、實にして歸る。」と謂ふが、彼女のこの透徹した觀察も、一つに清女に惠まれた機智の眼のみに賴つて生じたものであらうか。否、そこには、虛心に受け入れるものゝみに映つる實相實體が多分にある。この點にまた清女の自然と人生に對する魂の窓を見たい。紫女に比べて、清女は人物的にはとやかくの批評がある。が、そこには又一千年前の王朝社會を、當時の絢爛たる藤原期の所謂、貴族文化の華を、そこに蠢く女性群を理解せねば、單に現代の道德律を以つてのみ彼女を評し去るのは、肯綮を得たる評ではあるまい。時代と人との關係に、史學者も文學者も、暖い眼が必要だ。春秋の筆法に快しとして終るのみが批眼の全てではなからう。この點、文學の流れは、深く時代の匂ひや色に結付いて居るのであるから、古典坪讀に際しての開け行く鍵も、亦そこら邊からの認識が必要性を帶びて來るのではないか、とさへ考へられるのである。

今茲に、現代の中等學校教科書等にも、多く記載されて居る枕草子の冒頭の一章を揭げて、清女の自然觀と人生觀の中に、江戸の世界は川柳を生み出す機緣、源流及び川柳味との繫りを檢討してゆきたい。

（四　季）

春は曙。やうやく白くなり行く山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃は更なり。闇もなほ螢とびちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まして、雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、いとあはれなり。

冬は朝。雪の降りたるは言ふべきにもあ

らず。霜などのいと白き、又さらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

全文を通讀する時、何と云ふ齒切れのよい無駄のない文であらう。何と云ふ、自然觀照の確實なる把握だらう。すつぱりと切込んでくる冒頭の句、——春は曙、夏は夜、秋は夕暮、冬は朝——川柳は、寸鐵詩と謂はれる、その懷に跳込んで肉をえぐる程の鋭利さと、これは又一脈通ずるものがある。金子元臣氏曰く、長歌は大薙刀、短歌は太刀、俳句は九寸五分、川柳は剃刀と。大きいものよりは、小きいもの、巧緻精密さを喜ぶ日本人が、又敏捷、淡泊を好んだ江戸つ兒が、短い詩型十七文學を生んで、その中に、人事人情社會の觀察をこめて詠じた川柳が生れるのも、遠く溯れば其の淵源は、時代の子としての清女の一面に求められはしないか。

日本國民性の一特色として、小さい、精巧なるものを愛すると云つた。が、別けて女性には、その點が顯著である。この一章の中にも、その現れを拾上げてくると、「すこし、細く、螢、三つ四つ二つ、ちいさく、虫」等が擧げられる。この短文章に於ても、何とそれの現れの多いことだらう。小さい、簡明なるものを愛好する國民の中から、短詩型の川柳がやがて生れて來るのもうべなはれるだらう。

全文の表現を貫く單明さは、複雜を殺して多くを云ふまい、云ふまいとして、終に精選の魂の篩を通して後表現された、所謂金玉の文字なのである。そこに一語一句が、味はへば味ふ程、廣く深い匂ひがひそみ、餘韻餘情の響が傳はつて來るのだ。冬の段に於て、「言ふべきにもあらず」と云ふ邊、言ふべきに非ずして、言ふべく語を用ふ所、清女の胸中がまた偲べるではないか。如何に言ふべきか言ふべきものへの價値を探求して筆を執るところに、表現への一語千金が生れて來るのではないか。

通讀すれば、全文はさらりと描かれて居るが、そのさらりとした味は、その淡泊味の中には、かゝる筆づかひの裡に、深い作者の複雜な魂の動きがひそめられて居るのである。その複雜な、高潮する感情の現れを、此の一章中の「いと」語の中に汲み取りたい。それを拾へば、何んと七つも用ひられて居る。「さへ」が二つ。そこにも亦多く述べたい心を殺した清女の息使ひが、感情の高鳴りが伺はれるのではないか。萬象觀照と表現への一苦心、こゝにも現代柳人の作句の上に、深く味はふべき點があるのではないか。

「春は曙。やうやう…」その切目、棚引きたる。——等の逮體止め、其所にも見えざる

お正月の寫眞は

川柳雜誌社指定　キタムラ寫眞場

大阪市東區谷町四丁目東市民館横

電話東1770番

文字がある。響がある。タイムがある。且つ色彩がある。それは、川柳の原流は前句附の味を偲ばせるものではないか。蕉風では附合に於て、ひゞきとか匂ひとか謂ふが、又それらをも偲ばせる淵源があるではないか。否、そこには我が詩歌の季題感の發生云々とまでも論ぜずとも、俳句の切れ字の發生が、こゝら邊から見出されるのではあるまいか……とさへ思はれて來るのである。

夏の段に、雨を擧げて居るなど特に柳人は味はふべきだ。雨と云へば、えて春雨・時雨が想にのぼる。古來短歌、俳句に於ても此れらに關する名吟は多い。

○芭蕉野分して盥に雨を聽く夜
　かな　芭蕉

○春雨にぬれつゝ屋根の手毬か
　な　蕪村

清女も、「心地よげなるもの」の中に「池のはちすの村雨にあひたる」と、村雨の明るい一面を描寫して居る所があるが、又彼女の性格の一面をこゝにも露出してゐるの觀がある。この夏の雨は、をかしへ結付くのであるこの枕草子全文の冒頭におかれた此の四季自然雜感とも云ふべき章に、雨は只夏のみに取上げられてゐる點、こゝに此の雨のもつをかしが遺憾なく生かされて居るのである。馬の背も分けて降ると云ふ白雨。沛然と來て銀滴を躍らす壯快味、時に雷鳴（神なり――畏怖への神秘感は、それを神の怒と見てゐた時代。枕草子女房ばら、色變へて右往左往する長袖者連――げに降るさへをかしではある。この面白味、爽快味も、古川柳には拾へばその吟も多い。

○夕立の戸はいろ〳〵に立てゝ見る

○雨宿りちよつちよと出ては濡れて見る

○本降に成つて出て行く雨宿り

急かずは濡れざらましをではあるが、氣早やの江戸つ子氣質、長くも待つては居られない。

○俄雨冬の蘇鐵の歩くやう

○俄雨酒屋を出ると犬がほえ

○蟬の鳴くとこ迄行つて蔕を脱ぎ

○二三丁乞食になると空がはれ

さて、夕立の往來、俵を被つて出て行く人勿論米屋でもの借りものでもあらう。中には酒菰を、その紋樣は、

○劍菱の大紋を着る俄雨

でも又よし、だが乞食見立ではぞつとしない風體である。

この古川柳味と一脈通ずる、清女のをかしである。

次に、秋の夕暮――夕べは秋と誰が云ひそめたか、詳しくは堂上歌人に言問はんだが、それに夕陽のはなやかさを配した邊、色彩感のデリケートなる描寫、この全にも、名おそろしきものゝ中に、いかづちは名のみならず、いみじう怖ろしと誌してゐる）も交へて降り來る時、耳ふたぎわなゝく青

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入・振替三十二錢

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である。

定價壹圓　特價八拾六錢　送費壹錢

阪大川柳會編纂・路郎序

川柳句集

大阪

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。（四六版二〇〇頁）木句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。殘本僅少至急申込みあれ！

頒價壹圓　送費六錢

發行所　不朽洞　大阪市西成區玉出　大阪市三丁目六番地

振替大阪三〇二三九　電話下天茶屋二五七九

文中にも拾へば到る所に氣付かれるが、當時の女性の審美眼の、洵に巧緻なるが偲ばれる。短册の色の程度と、墨付の濃淡にも配合に心をくばつた時代が深く偲ばれて來るではないか。又そこに、ねぐら求めて飛びゆく鳥を描き、三つ四つとつゞけて、次に二つと叙す邊、心憎いまでの自然觀照態度ではないか。自然凝視の鋭さ、三つ四つ二つは、單なる音韻上の快い調べにならべられたのでは決して無い。夕暮時、鳥の飛び行くを見よ！二つ三つ四つは、言葉の遊戯に終る。概念的な描寫である。三つ四つ二つに於て、その眞が描き出せてくる味はふべきだ。次いで、雁行の一群への、「いとをかし」の表現は、それが「いと小さく見ゆる」點に於て、ふと浮び來る微笑なので、現代川柳の味が、出てゐるのである。同草子の「鳥は」の段には「雁の聲は、遠くきこえたる、あはれなり」と誌してゐる。之れは聽覺へ訴ふ秋のあはれなのである。短歌の味なのである。

平安朝の文學主潮を、あはれ（情趣）の一語に代表させて說く文學者もある。が、自分は、この時代とても「あはれ」と「をかし」の相對立を主張したい。「あはれ」が、智情意の圓滿なる調和に基づくものならば、「をかし」は、それの稍々不調和をかもす所に用ひられる語ではあるまいか。「あゝ」からの「あはれ」と、「おゝ」からの「をかし」とは、之は同一の精神動律で、全ていき（生氣）の動きから發せられる語なのである。「つきづきし」が、「あはれ」へ到る階梯の一情趣であり、「わろし」は、「をかし」の墮した破綻への評語であらう。そして自分は、この草子に於て、「をかし」の中に、この才女の鼻先のうごめきさへ感ぜられたりするのである。

平安朝文學を一つに貴族文學と呼び、江戸文學を又平民文學と稱する。又、彼は女房の文學、此れは吉原の文學とも謂ふ。階級的に見れば、時代のへだたりは、公卿殿上人の手から文學は、地下人の手へ、いや彼等の賤しげなる者の手へと收められてゐるのである。又、文學の中心創作圈より見れば、寢殿を取卷く緋袴の女房は女流作家群より、江戸は北國、不夜城内の女菩薩樣を取卷く振ごしの一團へと移つて來るのである。が、如何に移り變つたとしても、その文運の流れは續いて居たので、偶然に江戸の町人文學、が恰も雨後の筍のやうに生れ來たつたのではない。それには、それを生來さすべく、脈々と傳來してゐた大小の地下莖があつた事を忘れてはならぬ。江戸の文學が直接は五山の僧侶の中から芽生えたとしても、その山五の文學を溯れば脈は上代へとつながつて居るので、坊主憎い所が、まるつきり之れも可愛くなつて來るのである。その觀點に立脚すると、枕草子も亦川柳の母體たる一細胞を持つと考へられる。

○あてなるもの。薄色に白襲のかさみ。鶯の子。削氷の甘茶蔓に入りて、新しき金椀にいりえる。水晶の數珠。藤の花。梅の花に雪の降りかゝりたる。いみじう美くしき幼兒のいちごくひたる。

○人にあなづらるもの。家の北おもて。あまり心よしと人にしられたる人。又、あはあはしき女。ついぢのくずれ。

○おそろしげなるもの、つるばみの笠。燒けたる所。水蓼。菱。髮おほかる男の子の頭洗ひて乾すほど。栗のいが。

○いみじくきたなきもの。なめくぢ。えせ板敷のはゝき。殿上のがふし。

○たゞすぎにすぐるもの。帆上げたる舟。人の齡。春夏秋冬。

○物のあはれを知らせ顏なるもの。鼻ひまもなくかみて物いふ聲。眉ぬく折りのまみ。

抄錄した短文を味讀して來る時、これらの中にも多い連體止めが、餘韻を傳へて、後世の前句附から獨立した川柳詩を偲ばせ、物全て成るの日に成るに非ずして、その源の遠く遙かなるを思はせられるのである。（終）

川柳時評

東京から

高須啞三味

『名川柳集』の事

この「川柳時評」の最初に、僕は講談社編輯局が、近頃川柳をよく認めてくれる事に感謝の意を表したい。そして、『キング』新年號の附錄として發行された『名川柳集』に、絶大の謝意を表するものである。その『名川柳集』は岡田三面子先生が、委囑を受けて編纂されたもので、古今の川柳約十句（正確にいへば千五十四句）を、日本、新年をはじめとして、春、夏、秋、冬等の二十六項目のもとにあつめたものである。

個人の編纂であるだけに、その句の集め方に偏した所も多少あり、廣く眼の及ばなかつた點も感じられるが、それは止むを得ない事で、誰がしてもその弊を完全に征服する事は出來ないであらう。それに、僕等の第一に編者に同情しなければならない點は、これを附錄として販賣政策に使はうとした講談社の附したであらう、あらゆる條件の下で、これだけの仕事をしたといふ事である。それについては、三面子先生もその序文の中で『何分萬數の中から、いろ〳〵な制限の下に、千句ほど選んだので、見方によつては不徹底な憾みがあらうと思ふ』と、斷つてゐられるのを見ても判る。

殊に、川柳の持つ皮肉、諷刺が『善良な社會風俗に反するものが少くない』やうに思はれてゐる事なども顧慮された點等から、集句が少し所謂「お上品」すぎるきらひもあるが、それについても先生は序文の中で『川柳といふものはたゞ下品なをかしいものだ位に考へてゐる人々に、川柳を見直して頂きたい』ためだと斷つてゐられる。それは、僕等の大いに賛意を表したい所である。

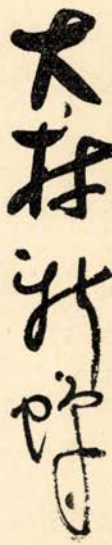
所謂「川柳の素人」を、たゞ一知半解の輩と

輕蔑しさる事は、大いに痛快には相違ないが川柳理解者をふやす傳手には、少しもならない。さういふ點では、たとひそれが多くの面を持つ川柳のたつた一つの面しか示すものでなくても、その門からならば入つて見たいと考へる人が幾人でもあれば、それは川柳のための大事の一つの運動であるといへる。その點で、僕はこの岡田先生の仕事に、感謝の言葉を捧げるわけなのである。

特に、先生が序文の終の所で、「川柳の「深み」と「するどさ」が、他の文學に比して勝るとも劣らぬものあることを認識して貰ひい」と言つてゐられるのは有難い。川柳をやつてゐる人が、とかく川柳を卑下したがる傾向の感じられる中に先生の如き人が、さういふ意識をもつてゐられる事は大いに心強いと思ふ。

そして、この『名川柳集』が、『名俳句集』と同居の一冊で、しかも俳句の後に附いてるのは怪しからんなどと、子供のやうな憤慨をしてゐる人には、『俳句集』と一緒のために、俳句をよく知らないで、俳句を上品な道樂ぐらゐに考へてゐた一部インテリが、岡田先生の希望通り、大いに川柳を見直してゐる事實のある事を報告して、その小兒的義憤を解消して貰ふ事にしよう。

柳人筆蹟（一）



川柳「むさしの」主宰　大村新蟬

『川柳界』の出現

大阪の『番傘』『川柳雜誌』、東京の『まやり』『川柳研究』『川柳倶樂部』、愛知縣の『へちま』等々が、みな川柳的一般雜誌になる事を目的に困難な經營道を歩いてゐる中に、如何なる成算あつてか、この一月一日を創刊號の發行日として突如川柳の營業雜誌『川柳界』が、出現したのに驚いた柳人は僕ばかりではあるまいと思ふ。

僕は、如何なる成算あつてかと書いたが、實際第三者たる僕等には、見當もつかない。僕も、小川柳誌を一つ經營してゐるが、十人以上の同人が、みな少からぬ同人費を月々負擔して、それでやつと印刷してゐる有樣である。上述の大柳誌と雖も、つい先程までさういふ道を辿り、又は現在なほその道を歩きつゝあるものがあるであらうと思ふ。

その苦艱の川柳誌發行の道へ、勇猛果敢に少し講談社の提灯を持ちすぎた形で、氣がさゝないでもないが、率直にいつて六十萬も七十萬も發行する『キング』が、その附錄の一つに川柳を取上げたといふ事に就いては、川柳が今やそれだけの商品價値をもつたのだと自惚れるより前に、川柳の社會進出のために絶大の感謝をなすべきだと考へたので、あへてそれをしたわけなのである。

走り込んで來た人が、如何なる人か僕は知らないが、高木角繼坊氏が相當協力してゐられるし、川上三太郎氏、岡田三面子氏、田村周魚氏等の先輩連をはじめ、現柳界中堅の數人も、その創刊號に顏を揃へてゐる所を見れば全然成算なく始めた仕事とも思はれないから或ひは成功するかも知れない。

そこで、僕等の考へる事は、川柳界にだつて、一つくらゐ營業雜誌があつてもよからう他の文學界には、みな營業雜誌の存在が許容されてゐるのに、川柳界にだけそれがないのは、寧ろ恥ではないかとさへ思つてゐる。從つて、今度の『川柳界』が、見事その役目を果してくれる事を、心から希望してゐるのであるが、さてそれが成立つとすると、今迄の柳誌經營者は一體何をしてゐたのだ、といふ事になる……。

兎に角、雜誌經營は、三號が山であるから三月まで僕等は默つて、靜觀してゐる事にしよう。

東京柳界の事

昨年度の東京柳界の發展は、一寸こゝ近年にない目覺しいものであつた。

大きな吟社に目立つた動きはなかつたが、小さな吟社の簇出した事は驚くばかりで、一寸指を折つて數へて見ても、片では數へきれないほどである。そして、その新吟社が各々幾人かの新人を、川柳界に送り出したとすれば、川柳界のためには、昨年は相當收穫のあたつ年だつたと言へる。

で、きやり例會や、川柳研究例會となるとその連中がどつと集つて來るので、句會の盛大になつた事も、近年もよつと例のない狀態であるが、これが果して何時まで續くか、僕そこに大きな危處を抱くものである。

そして、昨年末の其吟社例會の席上で、隣席の熊澤車山君と、こんなことを話しあつて笑つたのであるが、それは笑話とばかりはいへない或物のある事を、識者には感じて貰ひたいと思ふ。――その話といふのは『今日はこんなに百人近くの來會者があるが、これが來年の今月、或ひは再來年の今月になつて見ると、この席に來て坐るのが、やつぱり君とか僕とか、本當に川柳のトリコになつてゐる者ばかりで、結局昨日までの句會と少しも變らなかつた、といふやうな事ではないだらうか』といふ意味のものであつたが、これが本當に笑話として、思出の種となる事を、僕は切に希望してゐる。

新雜誌一つ

その東京柳界に、今年は一月早々、また雜誌が一つふえるわけであるそれは、まだ僕等の眼には觸れないので、批評は後でさして貰ふ事にするが、東京の有名な名作家竹田花川洞君が、前田雀郎氏を押立てゝ、新運動を始めるのださうである。

然も、雀郎氏も大事をとつて、本當の自分の根城『都吟社』とは別行動でやるのだといふ話も聞くし、同人の一人大野琴莊君の口からは『最初から馬鹿げた期待はかけないで欲しい。僕等だつて、やつぱり梯子段は一段々々登るのだから……』といふ意味の言葉も聞いてゐるので、僕は前述の『川柳界』に對するのとは、全然違ふ期待を、この畏友達の新事業の上に持ち、心からその仕事のよき發展を祈つてゐるわけである。

（昭和十年暮十七日夜）

粒々集

御影　長崎柳秀

おみそれをしたわと鮎の骨を抜き
賣家と知らず蟋蟀啼きつづけ
正月の下駄と寢てゐる女の子
あけすけに近所巡査にものを云ひ
ハンカチをポケツに見せる氣の若さ
ロープウエー無事に着いたと笑はせる
睡むさうなしなをつくるも床柱
花賣の孝行に惚れ聲に惚れ
中折に紅をさしたい〻機嫌
アパートにひとり居りたい父の慾
飯焦げたぐらひと女房口が過ぎ
土地會社風など賞めて蚊を云はず
又食べる話になつた冬の夜
アドバルン俺を雇うの文字は無し
情慾の一歩女給の手を握り
入院の仕事甲斐うれしい人に逢え
どの山も母は危い處にする

松山　前田五健

天地たゞ尊さに滿つ大日の出
初笑ひやつぱり子供から起り
炬燵から初放送へ和してみる
下戸に飲ましてわい〳〵と春

金澤　安川久流美

俎板はエビスに任す寶舟
糟糠の妻に詫びなん松の内
貴婦人のけものの皮に冬はどこ
おかときの水ツ涕から働く氣
初空へ鴉は繪師の好きな鳥

川柳塔

路郎選

西田艸樂

元日のネオンサインへちと捌け
乳母車葱といつしよに乘せられる
新世帶酒なぞ持つて混ぜに行き
雜草名など知つてゐて世にうとし
行違ふバスが掠めた屑屋葺
ケーブルカー愛の言葉が杜絶えたり
寄席へ來てハクキン懷爐の位置をかへ

山本雨迷

春至る日の清閑は人も來ず
冬雨のなさけ山茶花散らしゆく
佗びながら吾が色出でし部屋に來ぬ

橋本綠雨

褒められて着物に變へる女の子
着飾つて出たが千日寒いとこ
畫風呂に女給一人がだまつて居

麻生葭乃

共白髪生えねばすまぬかの如く
煉炭に替へてにぎりをおごる母
季節風儲かる客を追つ拂ひ
進物のいぢましさよ錦紗着て
まけ方は二錢三錢丁稚らし
ダラビアでスキーの姿見たばかり
ものぐさは猫におとらず火を圍む
除夜の鐘旅で聞く身でなかりけり
松の内ダークサイドのない飲み手
時雨ほどかはる氣むらへ腹が立ち

山本丹路

切れにくい鋏がひとつ十二月
憂き朝を黒きオーバーの群にゐる
うつくしいさかなが二匹そんな戀
收入の道へ顚落する女
冬の川ボートが一つ裏返り

春元紀太

おゝ寒むと寒さ袂に抱く女
旗と幕無事にみそかを過しけり
年賀狀他人に書せる出世なり

増位汀柳

伏見宮御殿に伺候
御質素のほどをうかがふ椅子に召し
伏見宮御前卓球試合の審判を拜命
宮様が球を拾つて渡される
伏見大宮妃殿下より卓球ラケットを賜る
御手づからのラケット重し有難し
伏見宮御殿を退出
あやまちはなく紀尾井坂下りてゆき
スキー遭難の二人に（一句）
奥牧野皈らぬシュプールとは寂し
それからは戀の皿には見むきせず
時代めく戀などもしてもう四十
アパートに誇大忘想狂が居て
背後から金を出せとの社會なり

須崎豆秋

門衛のさむさ振り向いてもくれず
葬式で會ひぼろいことおまんへか
魔がさして來たなとわかるほどに醉ひ

大鶴喜由

底冷えをきつかけに嫁寢ごしらへ
客去つてまたゝくうちに菓子が減り
母の眼にあんな男のどこが好き
おのぼりの行こか戻ろか轢かれけり
てれくさく御慶をわかす差向ひ
呑んで病めば妻の介抱他人めき
此處で別れ其處で逢ふべく人をまき
時の渦に乘ればそこにも儲け口
馴染甲斐銚子一本ごまかされ

沒食子令妹を悼む

峠まで來た春を見ず逝きたまひ

奥野禿山

氣の毒な姿に變はる燒リンゴ
氣が合うてお金貯まらぬ夫婦なり
次に來るものはお金が無いのなり
半銚子吳れとは堂に入つた酒
豆腐屋を通りがかりが呼んでやり

西村明珠

成功さした道ばかり讀まされる
あやまられると又女房も可愛そう
博士號書くには書くが派が違ひ
いとしいと女が女見てゐたり
氣が向いた日は息かけて硝子ふき
空想を消すに頭を振つて置き
水枕横目でちよい〳〵見てくれる
滿員車妻もおされて此方を見
襖を破つてから宿題をしてゐる

朝田新水

呑みに來て泣く手を亭主持てあまし
十二月不孝の罪を許される
石鹸を貸した仲さへうたぐられ
無理矢理に歸す心の芝居めき
ひよろ長い伜に職がなさすぎる
とやかくを藝者の耳にまでも知れ

後藤青兒

戀人を待てば撒水車がかける
壹錢を拾つた道は乾ききり
金儲け馬糞を拾ふ氣にもなり
醫者だから殺してもよい事にされ
ドア閉める時は名刺も捨てられる
濱職が官界までもつづく冬
調度品ピアノは人に目立ち過ぎ
死の一歩手前は只の人なりき

吉田水車

羽子板になつてもターキーよく踊り
こゝからがニッポンと言ふ初日の出
手枕のかたちでためす腕時計
宮仕へ戀までゆづりつつがなし
無茶苦茶に砂糖を入れる差し向ひ
儲けることを知らない女つつましく
バス嬢の尻のあたりの守札
寛大に鼠ををどす三ケ日

新見世間音

間の抜けた近火御見舞下駄を履き
サラリーをいきなり許婚に聞かれ
お手の鳴る方へ歩行器向きをかへ
腕くめば達引く程の妓でもなし
頰かむり取られて會釋念が入り
惚氣聽く閑あり社用はかどらず
さもあらんあらんと辭表ひつこめる

岡田某人

そこをなんとかと勸誘氣が強い
何のその灯のつく頃は家に居ず
淋しさを下戸は歩いただけのこと
樂屋裏こゝは働く人ばかり
夜遊びのそれ見ろといふ咳が出る
咳き込んでからの意見は理を外れ

久米雄君令閨の全快を祝つて

全快へ氷の手觸りさへ愉し

水谷鮎美

海上雲遠

雲遠し風はやはらか海の極
心の燈ゆるりと話そ待ち給へ
兒の鼻のたかさこのまゝおぼきなれ
正月の庭短靴がぬげかゝり
兒を抱いて連れて　もひとり先をゆく

市場沒食子

荒仕事して來た父の手を見よや
子を抱いて時雨を醫者へ突走り
公平なとこを貫祿が未だ足らず
剛情は既に白髪が物語り

妹逝く

またひとり齒拔けになつた膳に付き

竹内機見女

繭の價を君知りてしか桑の艶
蕎麥の花赤くなれ〳〵君と行く
愛の鞭はげしきひとの肩の巾

岩崎柳路

おしぼりを渡す女給の黑ダイヤ
ハイヒールギターの門でベルを押し
尋ね人餘り美人でなさそうだ
トースパンとミルクパジヤマに風があり

尼　綠之助

あほくひかつて一升瓶は空
金を借りるにいゝ日の惡い日の

杉隱兄に應ふ

子にかけた幸お互様にて候
夕方のざわめき俺の子も居るな
母娘してもてなし膝を崩させず

江戸みつる

外見を張る女給正月寶ると云ふ
御歳暮嵩ばつかりの品を吳れ
醜さを心得サービスの極端さ

姫田夕鐘

お元日損した顏と思はれず
子の寢顏羽二重餅に似て嬉し
杉間から覗く太陽も冬のもの
常食の芋とは知らずけなしたり

平井春光

產婆への拂ひは月賦ともいへず
馳足の產婆のすがた鴨に似る
口で割る箸へかゝつた牡丹雪
寶石屋咳する客の眼を凝視め

喜多春秋

廣ッぱの裸電氣も十二月
古い町古い電車が走つてゐ
交際をせぬ金持の防火壁
耳たぶに甘い言葉がまだ殘り
代書屋の食ひついて書く近視眼

中澤濁水

釣糸に浮世を捨てた眼が坐り
大漁の帆に風もよし博多節
いばつてた一人茶店で傘を借り
秋空を兩手に揭ぐマスゲーム

明石柳次

増築の陽のある窓を開けて見る
たしなめていつそ淋しい蜜柑むく
二十九歳使ひ込まなんだだけのこと
草を焼く匂ひ女は草疲れて

關本雅幽

退職

丹前の日は美しい街に見え

病弱（二句）

厚司着たり羽織着たりして疲れ
とう〳〵醫者も安心立命を説き

青木史呂

或る通夜

御愁傷様でと酒を呑みにくる
成金の冬は毛皮に包まれて
十二月招待券を反古にする

妹尾變人

階級をはつきり知つた膝がしら
處女か非處女か心ブラとある
トラツクに捨てる命と誰が知る
病弱の子に家賃など言ふとれず

西いわを

條件のよい就職を見直さん
初七日を過しラヂオをかけてみる
死ぬ程に好きなら父も只默り
就職の甥は二階で晝寢する
商大を出てから習ふアコージョン

曾我部宵明

ビクターが里子の許へ屆けられ
母の足袋踵が見えて母らしき
母すでに内緒話が聽きとれず
山は紅葉女は矢張り洗ひ物

大西八歩

自分だけ降りる停留所もありて
圍はれて菊見かゞさずお伴する
堤防のそれから酒井雲となり
まづしさをのぞき込むよにへちまのび

宮岡白峯

退職金賣藥も買ひ土地も買ひ
寄宿舍で金の話しを笑ひ合ひ
階級も主義も違つた元日だ
病床で働く身をば見送つて

廣原都會人

年の暮金は何處にも落ちて居ず
見つめられて書く書初の字がゆがみ

松下小柳子

冬の我街路樹よりは仕合せか
忙しく無いので惱む年の暮

米田まさる

犧牲的精神が看護婦にさせた
馘が飛ぶ覺悟で喋るはたち代

慰安の催し九里丸の來院

むねを病むわたしの臍がうろたへた

三鴨美笑

親のない子が秋の夕陽見てゐたり
殘業に母の事などかんがへる

荒井英賀夫

すがりつくことも一ツの戰法さ
催促のない借金がとどこうり

後藤大朗

愛をもちぐさらして母は死に
智慧もなければ黃菊の花も亂れ咲き

町田承春

誘惑に勝ち味氣なき床の冷

清き幸朝の體操始まれり　石崎柳石

倦怠期ハイフェッツにも欠伸が出
日本刀匂ひと言へば鼻を寄せ　國澤春水

繼はお預けさても師走の忙しき
十二月好い友達と思つたり
散髪の鏡出世をせぬ鏡　平井與三郎

安心をしたのがさゞえの壺の中
象牙の塔流れてあとに子がひとり
いさぎよく散つて落葉の景となり　植山九天

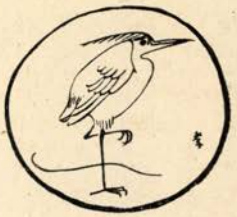
上役によばれ仁丹呑みそこね
百貨店にてレエーションの衿を選つてる妻を待ち

東洋一のスケート場

賀正

大阪歌舞伎座スケート場

電話戎(76)2826 3507 3533 3925 2827 2828番



當世不通漫談（五）

梅本塵山

□　蒟蒻屋の六兵衛
○　田舍寺通樂和尙
△　三途河の奪衣婆

○夫れから後に、娘義太夫が流行して、東京の寄席は大いに繁昌した。これも技藝が優秀な者よりも、面の美しいのに人氣が集まる、そのファンは地方出の學生達で、最負の太夫が床に上つて話を始めると、「どうする〳〵」と聲を懸るので、世間ではこれを、どうする連を呼んだ。そのどうする連等は、太夫の宿所から寄席へ往復する、人力車の前後に數人が附隨して、遠路をも厭はずに駈走つた。今から思ふと莫迦〳〵しい話だ。

□其の後、源氏節といふものが流行した。これは下町よりも、山の手の寄席に多く懸つたが、これも學生達に歡迎されたらしい。

○源氏節は、演劇が一幕と淨瑠璃が一段と、交替に演じたのであるが、看客は淨瑠璃よりも、演劇の方を歡んだ。それには大いに理由有りで、女優等が舞臺に登ると、演劇の筋には全く關係の無い、猥褻な擧動をして看せた故である。

□俺も世間の評判が餘り高いから、一夕某所の寄所へ行つて看たが、其夜の狂言の外題は何であつたか、能く記憶しないが、舞臺の幕が明くと、若い女優が、遊び人風の男に扮して、着流しに三尺帶を締め、尻を高く端折つて草履をはき、下手からすた〳〵出ると、上手の方から、宗十郎頭巾を被つた武士が出て、互に行合ふと看るうちに、急に大刀を引拔いて、前の男の面前に閃めかすと、男はぶる〳〵と顫へながら、後の方へ轉倒するのだが、其の瞬間に、故意に醜態を顯はすので、看客は一同に大喝采した。女に扮する女優は、餘り醜態を顯はさないが、男に扮する女優は、褌といふものを締めてゐないのだ。此の外の場でも、前のやうな事を爲て、看客の歡心を買ふ所が多く有つた。

○女優等の醜態が、餘りに目に餘るやうに成つたので、あの源氏節一派は、東京市内の寄席に、出演することを禁止されたが、近頃それが解禁された。

□源氏節の猥褻劇は、全く論外のものであるけれども、あの淨瑠璃の三味線の手には、平家琵琶の手と似た所が有つて、あれは古風で面白いと俺は思つたよ。

○寄席といふものも、京阪地方のは知らないが、東京の方のは、今と昔とでは多大の相違で、出演者に名人上手が無くて、所謂いんちき藝人が多く、また聽衆の方も、輩や聲ばかりのやうだね。

△江戸の末期には、まだ落語家にも講釋師にも、上手や名人が多く居た。妾は女だから講釋の席へは行かないが、落語の席へはよく聽きに行つた。當時人氣の有つたのは、

日本柳壇百人撰

1935年の金字塔 自選一句

ABC順

大阪 麻生路郎
凡聖一如元旦のこころ知る

同 福田山雨
櫻の下の前後不覺を美まれ

同 麻生葭乃
住吉の馬と生れず馬力曳く

同 古谷盈光
凡人の燒香いつか濟んで居る

同 朝田新水
屈託を救ふ心に子をあやし

同 富士野鞍馬
軍艦旗皇威を見せて搖れてゐる

鳥根 尼 綠之助
デーばかり多くつかれた五月の陽

青森 後藤蝶五郎
大の字に寢て滿足な胃が一つ

靜岡 榎田珍竹林
鼠の子殺すに惜しい瞳が二つ

京都 後藤千枝
眞すぐな道につまづく石もあり

京都 藤本福造
樂しみを先んぜられた嘘をし

大阪 堀口塊人
金の力を否定してみたものゝ

尻取文句にも謳はれた、桂文治と三遊亭圓朝とであつた。

□桂文治は、明治の末年まで生きてゐたが、晩年には甚振はなかつたが、圓朝の方には上手な弟子が多く居たので、自然に師匠の名が高くなつたのだ。明治年間の落語界は圓朝の三遊派と、柳亭燕枝の柳派と、二派に分れて居て、互に競爭したけれども、三遊派の方が優勢であつた。

○圓朝を落語の名人だと、今も世間で云つてゐるけれども、あの人は人情話といふものを創始して、從來の落語と異なる道を拓き遂に名人の稱を贏ち得たので、落語は餘り上手でなかつた。俺は某所で、圓朝の「空笑」といふ落語を聽いたが、平々凡々たるもので、面白くも可笑しくも無かつた。然し人情話をさせては、名人と稱する價値は有つた。

△今の落語家の高座で口演する、人情話といふものは、番茶の出し殼のやうなものだ。

□圓朝の人情話といふものは、其藍に山々亭有人といふ戲作者がゐて、多くの種本を作つて與へたもので、夫れを圓朝が潤色して高座で口演したものだ。有人といふ戲作者は、明治初年に、東京日々新聞社の一員、

京都　平岩司郎
なづまない子が親の言葉見てゐる

大阪　橋本綠雨
村の子を美しく見る秋の空

同　岩崎蟬古
醉うといふ弱き心にならんかな

横濱　礒部天邪鬼
これが生活かと今日の疲勞を默る

山口　礒部孔雀
おいらにはかゝはりのない一機飛ぶ

仁川　池田可青
惡友のその男氣を忘れかね

東京　井上信子
水引きの冷たい姿暮を行く

大阪　生田翠夢
ちろり並べて立春大吉

松本　石曾根民郎
さかづきはかわくともせず世をうつし

長野　金井有爲郎
枕ひえ〳〵あかつきの白さより

大阪　岸本水府
散髪の時に氣づいた金儲

京都　紀二山
順々に子が寢てもとの春の雨

東京　川上三太郎
松の花陽は屋根からも刎ね返り

同　河柳雨吉
自働車の扉の音一つ雪に更け

神戸　觀田鶴太郎
たゝけば炭俵のはら〳〵と枯葉

同　喜多春秋
子に死なれて
死んだ子に夫婦あやまることばかり

なり、また小說を著作した、東籬園採菊すなはち條野傳平といふ人だ。先年某書肆から「圓朝全集」といふものを出版し、最近「圓朝怪談集」といふのが出版されたが、是等は「有人全集」とか「採菊怪談集」とでもいふのが至當だと思ふ。尤も其中には、西洋の小說を飜案したものも有るが、これは採菊に無關係のものであらう。

○圓朝の衣鉢を傳へた者は、後に二世圓朝となつた、高弟の圓喬であつて、此人は高慢な面をしてゐたけれども、頗る上手であつた。同じ弟子の圓右は下手では無いが、故人の團藏や今の歌右衛門の聲色を遣ひ、それを得意として居たけれども否味であつた。圓左は第二流で、其藝は枯淡で俗受はしなかつたが、「大佛餅」のやうな落語は、甚巧みで外に眞似手は無かつた。

□後年に大師匠と呼ばれた圓遊は、すてゝこ踊といふ、愚劣な踊で名を賣つたものであるが、落語は下手であつた。圓遊のすてゝこ踊と相前後して、万橘のへら〳〵踊といふ、非藝術的の踊が一時流行した。夫れから高坐で嘸叭を吹いた圓太郎は、今でも地方の馬車の名に呼ばれてゐる。これは孰れも明治十一二年頃の事だ。

青森　小林不浪人
サフランは二月と知つてぽちり咲き

大連　兒玉凡稚
セパードは留守を預る面がまへ

東京　三浦太郎丸
秋風は小波立てゝ遡り

同　村田周魚
一も二も追はれ勝ちなる松が立ち

京城　正木柳建寺
啌佛酒には別なコツクリコ

岡山　三村叱咤郎
乳の出ぬ粗食に母の名の暗し

松山　前田五健
國寶の城松山の臍あたり

大阪　增位汀柳
裏町へ漁色の人の足はやし

同　森東魚
うとましく可笑しく吾が子聲變り

同　森雞牛子
年の瀬を乞食呑氣な歩きやう

同　水谷鮎美
月の出をまてば笛さへなるものを

同　松丘町二
肺弱ければ髪くるぐると秋の子よ

同　松盛琴人
光りはほのか合はす掌のひら

同　道田葉平
秋陽白く孤りなる日の果つるなく

東京　前田雀郎
銀屏風二月は古き家の中

同　森井荷十
帆に走る船よ若さのねたましや

○柳派の首領談洲樓燕枝は、其襲が餘り冴えず、三遊派の首領圓朝の敵ではなかつた。而して門弟にも優秀な者が尠く、明治の中葉より最近まで、三世柳家小さんが、只一人光つて居た而已だ。小さんは落語家に似合はぬ訥辯で、ぽつり〳〵と話を進めて行くうちに、自然の滑稽味が湧き出て、聽衆はそれに引込まれて笑つたものだ。彼れは名人とは云へないかも知れないが、確に上手と稱する價値はあつた。

□吉井勇氏の小說に書かれた、蝶花樓馬樂といふ男は、一風變つた落語家で、高坐に登つて屢々警句を叶くので、有名になつたけれども、落語は上手でなかつた。今の三升家小勝も、警句を吐くので有名であるが、あれは老人に有勝の癖で、昔の事物のみを尊重して、現代の事物を蔑視する惡口で、馬樂の警句とは少し性質が違ふと思はれる

○劇評家の三宅周太郎氏は、大阪の落語家を推賞して居られるけれども、俺は贊成する事が出來ない。それを何故と之ふに、大阪の落語には、話の筋の面白いのが有つてもそれを口演する者に、訛言と片言とが多くて、東京人は了解に苦む而已でなく、甚耳

大阪　長崎柳秀
轉寢をどこの阿呆か茶屋でする

信濃　中島紫痴部
何になる何にしやうと子等を見る

高石　中澤濁水
魂に染む春雨の夢ごころ

神戸　西村明珠
孝行をしたい或日のてれくさゝ

横濱　中野懷窓
かさ〳〵と木の葉明日の音で散る

大阪　西田艸樂
大空の下行く鼻の乾きかな

福島　大谷五花村
宿命を人に敎へて桐一葉

大連　大島濤明
眞つ直ぐな線路に立ちて身繕ろい

京都　大島黃子朗
おとむらひ春の石屋は手を休め

大阪　大石文久
物指へ拗ねてる影の憎しめず

同　小田夢路
我智惠の思ひ直せば皆若し

同　近江砂人
晝の床虹を見るとはおもしろし

同　小川百雷
妻病む日物質主義にならんとす

同　小川舟人
戎橋わが生活とかけはなれ

東京　岡本嘘夢
觀んずれば一切空の水の色

同　大村新禪
最後まで秋を見守る澁柿

障りであるからだ、其一例であるが、京都をきやうとう、酢をすう、團子をだんごうと伸ばして云ふかと思ふと、その反對に、東京をとうきよ、楠公をなんこ、太郎をたろと縮めて云ひ、その伸縮自在なることは飴細工と同じやうだ。笑福亭松鶴とかいふ大阪の落語家は、自分の名をしよかくと云つてゐる程だから、他は推して知る可しだ。

□イヤ東京の落語界にも、無學文盲の奴が多く居るから、大阪の落語家ばかり擯斥する事は出來ない。東京の落語家は、近頃、漫才といふ田舍藝人に壓倒されて、氣息奄々としてゐるのだ。

○今日の講談界は、落語界と同樣に、甚不振のやうだね。昔の講釋師といふ者には、學問に長じた者が居たと聞くが、今の講談師には無學が多いやうだ。

□昔の講釋といふものは、主として「太閤記」「三河後風土記」等の如き、戰記を讀んだものであるが、江戸の末期に至つて、「加賀騷動」「仙臺騷動」「黑田騷動」のやうな、大名の御家騷動を讀むことが流行し、夫れに續いて「大岡政談」だの、「俠客物」と稱す

魚崎　住田亂耽

春あさく芦屋夫人の御光來

大阪　闘本雅幽

風景に枯木と石とあるばかり

同　須崎豆秋

老夫婦お經の文句行きつまり

神戸　椙元紋太

金慾しいなど人相に出て呉れな

東京　清水米花

靴ぬげば靴も疲れた姿する

神戸　三條東洋鬼

戴いて借りる姿が俺なのか

名古屋　鈴木可香

叱られた子供の手から梅が落ち

京都　齋藤松窓

世の中のことは淋しや雨の空

東京　品川陣居

華奢な脚女人一生を支ふるや

同　高木角繼坊

渡舟花屋は蝶をつれてのり

同　高須啞三味

夢の中母と父とがゐて嬉し

長野　高峰柳兒

金の世を嗤つて淋しさにひたり

青森　田澤有石

日本に春雨がある妓の素足

大阪　塚越正光

白い眼を向けた世間に敗かされる

同　寺井紅太郎

奪はれる若さの中に子は育ち

同　高橋かほる

合の手をおしへてやつて眉を引き

る、博徒の紛爭を題材としたものが、多く流行し始めたのだ。

○明治の初年までは、修羅場讀とて、戰記を得意として讀んだ者もあつたが、近頃はそれを讀む者が殆ど無いやうだ。此れも明治初年の事だが、松林伯圓といふ講談師が、開化講談と稱して、新作の講談を口演した。此の伯圓は、羽織に袴を着けて高坐に登り、卓を前にして立ちながら口演した。其の以前の講釋師等は、多く羽織も着ず、甚しきに至つては、白地の浴衣に三尺帶を締め、高坐に登つて尻を捲り、而して口演した奴さへ有つた。

□昔の講釋師といふものは、落語家よりも下級のものと、世間から見做されてゐた。その理由は、落語家は必ず寄席に出演したものだが、講釋師は寄席に出演するけれども大道講釋とて、兩國の廣小路、淺草の奥山、上野の山下等に於て、路傍に床几を併べて、その周圍を葭簀にてかこひ、其處で口演をしたから、大道藝人だと云ふのだ。

△あの伯圓の開化講談といふものは、講釋と人情話の混血兒だが、當時は新しいとて、世間の評判になつた。

高知　竹内機見女
空青くふるさとの味水の味

東京　高島玉兎朗
旅立に母は丸寐をしてくれる

同　田中不倒人
債務者と出張先の雲を踏み

京城　津田麗月冠
日本に振袖がある高島田

東京　植本鬼佛
脈々として警察の午前二時

同　海野夢一佛
事足りる一家靜かな陽に浸り

八幡　上野十七八
青空の下に咲出たマスゲーム

名古屋　吉田水車
銀狐君も表情忘れたネ

京都　山川紫明
一年の計を元旦から醉わし

金澤　安川久流美
大陸を踏んで色彩など忘れ

東京　八十島杜若
若き日の雄圖をかしく鼻毛ぬく

同　柳三門
いゝとこをほめて親友異見する

同　山川花戀坊
秋の朝市電大きな音ですぎ

横濱　山本斗酒
娘とふたり忿り忘れた暮し

大阪　山本丹路
ドンキホーテの傾向がある朝をゆく

同　山本雨迷
エンヂンの律動となる汗落ちる

○今でも猶昔の儘の口吻で、講談をする老人が居るけれども、それは現代人の耳に異樣に聞えて、少しも感興が起らないから、一束にして棚に上げて置く方が可い。

□金城齋典山は上手であつたが、腦溢血に罹つて又起たず、一龍齋貞山は、典山の眞似を爲てゐるけれども、今一歩二歩といふ處だ。最近の流行兒は、大島伯鶴であるが、あの男のは本格的講談ではなく、講談に落語を混合したもので、聽衆を笑はせる事に而已腐心してゐるのは、邪道に陷つたのだ。あれを面白い講談であると、げら〳〵笑つて聞いてゐる人の多のは情無い。

○神田ろ山は、二流か三流であるけれども、其の講談は本格的で、讀み口に寸分の透も無いが、何時も博徒の事蹟ばかり讀み、甚下品であるのは惜む可きだ。

□ラヂオの放送で聞いたのだが、大阪の講談といふものは、講談本を朗讀してゐるやうで、面白くも可笑しくも無く、何とも評すき辭が無いね。

△六兵衛さんも和尚さんも、惡口が過るやうだから、漫談を一時中止しやうではない歟。異議が無ければ中止々々　（完）

紫・紅・茜

西田艸樂

紅は玉座紫御膝元

京紅と江戸紫は、共に有名で獨り柳界に喧傳されるのみではない。が、古川柳では甚く江戸紫を稱用して、紅の京を貶したものがあり、茜に到つては全く鄙女の代名詞になつてしまつた。なる程茜が田舍びた色である事には他の文藝に見られるが、紫は、必ずしも江戸の專賣特許でない謂れがあるが、古句に就て學問的の考證などに力みかへつて居れば、馬鹿氣切つた背負投を食ふから、その邊はいゝ加減にあしらつて置くとして、此の紫・紅・茜の三つの色に就て、少しく語つて見たいと思ふ。

紫は男の國の水で染め
江戸自慢これ此糸の色のよさ

紫は御屋敷越の水で染め

紫は男の國で染めるといつて江戸を高潮し、此糸の色のよさといつては江戸自慢の一にも數へ、勿體ぶつた、水道の水で染めると味噌を並べる處であるが、何ぞ知らん、紫染の元祖は矢張り關西地方だらうと思ふ。

紫の殼は行儀よく捨てる
强飯のようにあけるは紫屋
うつちやつて看板にする紫屋
江戸自慢門に四角な煎じ殼

なる程江戸には紫染屋が多くあつた。川柳風俗志、川柳江戸名物などに中橋上槇町、石町、元濱町、芝片門前等に數十軒あつた事が記されある。

紫草の根を煎じ出して、粕を蒸籠樣の四角な箱で、搾つて門口などにぶちあけて、そのまゝ紫屋の看板となつた事が、句に現はれてゐる。併し紫草で紫を染める事は、既に上代の文化に始まつてゐる。

上代染色の事を語れば、甚だ長くなつて當底限りある紙面に盡せないが、要約すれば、飛鳥・藤原の時代既に、紫染は紫草の根を煎出して灰汁を媒染劑とし、布帛を染めた事は多くの例證を上ぐる事が出來る。從つて此の染色法は奈良朝、平安朝を經て、德川時代に及び、現今のタール色素の輸入される迄、續けられたもので、但だ其染色工程などは多少の進化を見たであらうが、要するに紫根の汁にアルカリ媒染をした事に原理に變りはない。にも不拘

殿や野にあれど染まらぬ口惜さ

と言つて、京都には、紫宸殿や紫野の紫の名を冠する處があつても染まらぬ口惜さとは、謂れなき事で、勿論前述する如く、古川柳なんて其時の興であるものを議論すべきでもないが、寧ろ紫染の師匠は京都だつただらう。

只紫草Lithospermum officinale, L. Var. erythrorhizom, maxim. なる植物は、關係から奥羽にかけて自生する草本で、武藏野に多かつた關東から、江戸に紫染が發達した譯で、德川時代には染色用として栽培されたものである。

江戸の川柳家はよほど有難かつたと見えて

江戸の水あかりをたてる紫屋
京淡をむごく見てゐる紫屋
紫屋隣の紅屋越して行き
紫を見ては京でもあきれべい
紫も喧嘩も合はぬ京の水
紫は飯鹿の子は粥で染め（京の粥腹）
京では右門江戸では式部也（赤染衛門）
玉川の水に鴨川うばはれる

などゝ詠んでゐる。而もひどく京の紅を見くびつた心意氣が見える句がある。而も、檢校になると、はる〳〵江戸から京へ上つて、紫衣を授かつた事など皮肉である。

紫屋これも同じくうそつつき
紫屋ゆる〳〵染める女物

の句も擧げて置かう。甲は紺屋の明後日式に見た處、乙は如何にせつかちな江戸でも女物の紫はゆる〳〵染めると云つたものである。

次に紅であるが、これは句の上にも、くれないと讀む場合とべにと讀む場合があるが、前掲の句にある通り京都の紅は有名なものである。化粧用の紅も、染物の材料にも紅は使用された。今は口紅などは燕脂蟲（コヘニル）から採るが、昔は紅花が用ひられた。

口紅の製法や紅染の方法などは略すが、紅花を以て布を染めたり摺衣にした事は、矢張上代から行はれ、口紅は紅花の栽培地で花を摘み搗き碎いて紅餅として京都に送り、こゝで精製せられたから、京紅は古來有名である。

紅花は菊科のCarthamus tinctrius なる植物の花である。

茜に就て例句を擧げれば、これも相當にあるが、その多くは鄙の女の代名詞になつてゐる。二三の句を引いて見る

輕井澤太夫茜の三ッ布團
輕井澤燃立やうな茜裏
麥秋に茜布團をねだる也
茜裏碓氷の山へ野掛に出
田舍道あかねと淺黄××合ひ　（末摘）

といつたもので、淺黃裏が田舍侍を意味する如く茜裏は田舍女を表はす例が多い。

萬葉には

茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

の一首を記憶してゐるが、此の短歌は、後の天武天皇、大海人皇子に相思の間であつた額田王女が奉つた歌であるしかし此の場合の茜さすは、歌枕で、日、晝などを現する文字に過ぎないが、既に此の頃に茜染が行はれてゐたから彼樣な枕詞が使はれたものであらう。他の詩歌にも「茜さはす」の言葉はよく見る處で、茜染の色から來てゐる事論ない。一々例を擧げぬが茜の色には何となく、純な田舍びた思ひがする樣で、前掲の飯盛女の布團や田舍女の着物裏地といつたものは、その事實なり、はつきりした謂を知らないが川柳に詠まれる處も解せる氣がする、尤も紫緋等は高位の人の衣の色で、茜色などは少し下位である點はしば〳〵見る處である。

因に茜染は茜草科茜Rubia Cordifolia L.の根の煎汁に布帛を浸し灰汁のアルカリ處理をなすものである。

酒量樂屋落

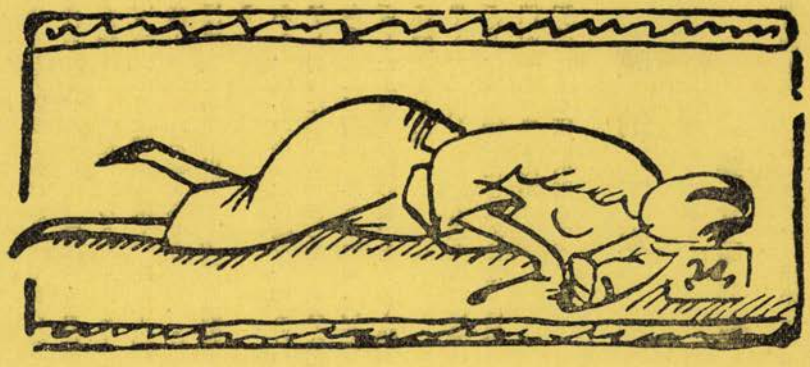
（作戯柳汀）

緣雨　チョッピリはいけるが矢張り默々と
艸樂　甘黨と云つてもちびり呑む手附
葭乃　酌ぎ役がつい先生の量を越し
亂耽　魚崎の生れ酒緣があり過ぎて
翠夢　お座敷の酒よしネオンの酒嬉し
かほる　サイナアと踊つて呑んで底知れず
里十九　親分は太三味線が欲しくなり
禿山　懷爐をば入れて陽氣な酒を呑み
豆秋　はしご酒顏の利いてる新世界

おめでたう！

大阪南海本線玉出驛西
喫茶
洋酒　キング喫茶室
麻生葭乃
純子
奈那

電話天下茶屋2579番



酒と私

新春の特別ものとして「酒と私」を、本社賛助員、客員の諸家に執筆を煩しました。（編輯部）

―順序不同―

坂本龍馬飄簞自畫賛　除夕の日飲む可し。花月の時飲む可し。山水の遊飲む可し。喜怒の至り飲む可し。盛衰の處飲む可し。富貴飲む可し。中の上剛飲む可し。三百六十日飲む可からざるの日なし。夫れ酒を以て誠さなす者は情を解せざるの人。宜しく敵して遠ざく可し。敢て酒を勧むるにあらず。只元氣溌剌意氣天を衝くの概あるを貴すべしとなす。

猫に小判

劇作家　**川村花菱**

酒をのむのまないに拘はらず、何か書けと云ふ事は、口を割つてのまされたと同じ事ぢやありませんか。飲めばのめるんだと云ふ氣持で書きませう。

私は生れてから、酒をのんだと云ふ經驗もなし從つて醉つたと云ふ事も知りません、然し非常に歩きつかれた時なんか、言葉通りいゝお酒を一杯丈のむのはとてもいゝ心持です。

癇にさわる時、やり切れない時、こんな時に已れが酒でものめたらなアと云ふ事を家内に云ふと家内も淋しさうな顔をして居ます。

それで居て、家に酒をたやした事のないと云ふ氣持は分るんです。いつ誰れが來ても必ずお酒はあります。

何年前かな、大阪の宿屋で夜遅くまで、路郎君に酒を献じた事がありますが、その時は自分の家でないので大に弱りました。丁度何年もつきあつて居る係の女中さんが、一晩實

家へかへつた晩で、あくる日そりやさぞ困つたでせうと大阪辯で云はれるまで私の氣ぜつなさは取れませんでした。路郎君もさだめて下手な相手でいやだつたらうと思ひます。

川上三太郎君は朝から來て、晩の十二時頃まで飲んで行かれる事もありますが、こんな時には平氣で相手が出來ます。三太郎君も愉快さうです。

いつか、何かの事で、白鷹を一樽もらつてほと〳〵弱つた事がありました。來る人毎にビンづめにして持つてかへつてもらつたり何かしましたが何ヶ月かの後、とう〳〵味が變つて仕舞ひました。

「早く云へばいゝのに」と三太郎君に云はれましたが、味が變つたと云ふはなしは早く云へないぢやありませんか。

私と酒は全く猫に小判です。

晩酌一本

畫家　柴谷宰二郎

踊る酒も良し、女にタックル出來る酒も又いゝ。だが私の酒はそうだな・晩の食卓に無いと一寸淋しいくらゐの酒。

盃を相手に

京都帝大　穎原退藏

酒は好きな方ではあるが、昨年病氣して以來會などでは最初からことわつて、あまり飲まない事にして居る。うちでは過ごすおそれが無いから多少はやる。酒中の眞の趣はやはり微醺に得られるのであらう。そしてそれが分つて來るのは、やはり年の功を經ねばならぬものらしい。この頃いくらか人を相手にせず盃そのものを相手にして飲む妙味が解せられるやうな氣がする。看は濃厚なものでさへなければ何でも宜い。（十二月十八日）

承・德・見・物・・・

（1）

大島濤明

八大寺離宮街のいろ〳〵

×承德ホテル

赤峰から自動車で二百六十六粁を十一時間ぶつ通し、午後七時やつと承德の街に入る。街燈の電氣がキラ〳〵光るが街は至つて巾狹まで自動車が走るのにそこゝに突き當りそう裏通りみたいな所を通つてやつと承德ホテルに着いた。

裏通りばかり承德市街なり

ホテルと言つても支那家屋を利用したもの

羊羹を肴に

醫學博士
長崎柳秀

酒は飲むにつれ段々手が上るやうに聞いて居りますが、狹い體驗では酒には眞の意味に於ける…「慣習」…は無いうやに思ひます。

私の父は下戸でありましたが酒に對しては比較的寛大でした。私が二十三歳のある日「どれ程飲めるか飲んでみよ」……とのお許しが出たので羊羹を「さかな」に小さい茶碗でコツクリ〳〵やがて一滴も殘さず一升德利をあけた事を記憶してゐます。最も飲み終へた迄はよかつたが二階へ上ると氣のゆるみか一ときに醉が出て横になつたぎり翌朝まで前後不覺。

三十七歳の暮歐洲から歸つて以來此の歳になる迄約二十年殆んど晩酌を缺かしたことは無いのですが、一向上達もしなければ昔日の如く一升も飲めたためしもなく又飲んでみる元氣も有りません。

こんなことを思うと酒に對する强さ…「所謂絶對量」…と云ふものは人それ〴〵に生れつき備はつたもので稽古したからとてふだん飲むからとて又常用しないからとて決して增したり減つたりするものとは信じません。

川柳マツチ **十二ケ月（一）**

凡聖一如元旦のこゝろ知る

大阪　麻生路郎

書齋で獨酌

法學博士
岡田三面子

毎晩七時半頃から獨酌、眞に獨酌、傍に何人も置かず、チビリ〳〵とやりながら、或は堅いもの、或は和かいものを讀むか、書くかして、九時半の時報を聞き就眠、量は二合半か三合。

中庭を取り卷いていくつもの客室が出來てゐる。扉を開けるとすぐ中庭になつてゐるといふ構造である。それでもこんな地方には過分なタイル張りの風呂へ這入る。松尾君といふ三助が背中を流して、呉れていろ〳〵の話をしたり聞いたりする。滿洲まで來て日本人の癖に三助をするなんて思ひながら話してゐるうちに、ハテ是れは朝鮮人だなと氣がつく。

同胞の一種に鮮人アイヌ人

日本語のうまい何處かにアクセント

夕食をする間女中のおみよさんの產れ故郷など聞く「妾しは廣島ですけれど大連で小學校にも行きました」「幾才だい」ときくと、「十七です」といふ。それにしては身體も大きく、ませてゐると思つた。此の邊では別に料理屋だの、待合だのといふのがないので宴會でも何でもホテルを利用し藝者なども這入るそうで、大廣間では十時過ぎまでドンヂヤン騷ぎをしてゐたので「うるさい宿だなと」思ひつゝ何時か眠つてしまつた。承德には同鄕でしかも同年の野田君がゐた。久し振りと言ふので自動車を持つて來て、街見物の案内をして呉れるといふ、友人はほんに有難いものである。

川柳マツチ　十二ケ月(二)

梅林を距て分家と仲がよく

東京　福田山雨楼

酒盗人

南滿電鐵營業部長　池澤樂居

私はいける方ですがあまり顏に出ないので酒盗人だと云はれます。さりとて晩酌に必ずやるかといふにそうでもありません。家庭では滅多に飲まぬ癖に外では飲む機會が多いので抵抗力ができたのでせう。しかし近來は節酒してゐます。

生命安全法

庭球家　鳥山一歩

妻が御影の或る漢流醫の處へ僕を連れて行つて診察させると「君は毎日三合五勺は酒を飲むだがいゝ」と老先生がご宣託された。僕の酒は一部老醫から承つた、生命安全法から來てゐる。

醫學博士片瀬淡先生と或る夜痛飲したことがある。酒はマグネシュームで僕は之れを類脂肪と稱つてゐる。これを多くやると類脂肪が蓄積して老人性變化を起すからいけない。

しかし、スポーツをやるとマグネシュームが排除されて、カルシュームが殘るから、身體は達者になる。少し位飲んだところで運動すればよいが、晩酌を餘りやつたらいけない淡先生、斯く口述しながら茶碗でぐい〳〵やる。その時或る卓球人が「先生、講演は結構ですが、そんなに飲んでは……」と抗議を申込むと、先生すかさず、「酒は人生觀で別ぢや」と更にぐいと飲み干した。僕大いに快哉を叫んだことであつた。

×八大廟

承德で名高い八大廟、それは喇嘛廟・園亭子・伊黎廟・大佛寺・行宮・布達拉・殊像寺及び羅漢堂である。最初の見ものは、大佛のある普寧寺だと言つて野田君はそこへ走らせた。或程大佛は大きい、高二十二米突、臺座三米突の木像千手佛で、二體の脇侍は高九米突餘である。

樓内は三階の廻廊で大佛を下からも二階からも三階からも見ることが出來る、四壁の内側には一萬餘の佛像を安置せられ大佛寺ともいふ。

見下ろして又も驚く千手佛

×羅漢堂

それから五百羅漢の佛像がある羅漢堂に行く、乾隆三十九年建立で江南安國寺の制に倣つたのである。回廊に五百羅漢の像を安置してあるが孰れも高さ二米餘。立像、座像、腰掛像等皆完全であるが堂宇は半ば破損してゐる。

一と廻り五百羅漢に草臥れる

×普陀宗乘廟

曰く、私の酒は老醫の命に從ひ、醫博の人生觀に生く。また無理有ること無し。…だ。

チヨツピリ酒

醫學博士
長谷川一徹

酒ほど味のよい好ましき飲物はない。しかしながら二十一貫餘の體重をやうやく支えて居る私の心臓に酒を灌ぐと直ぐ持ち耐えられなくなつて派手な苦しみ方を初めるので、下戸と云ふ事になり、周圍も飲まさない。

醉ひ心と云ふお酒があるやうですから、このお正月にはそれを買ひませうと云つてゐるから一年一度のチョッピリ酒で一年中の醉ひ心を持たせるつもりらしい。

妻の三味線で

北國新聞社
窪田銀波樓

まだ若かつた時、蒲柳の質の私は主治醫が晩酌を勸められたのが二度目から本物となつて、酒は今の私になくてならぬものとなりました。

東京へ出ると、いつも旗洗莊に川村花菱さんのお宅を訪ねるのが、例ですが奥さん共々必らずお酒を勸められます。下戸の花菱さんが撓まずによくお相手をされるので恐縮します。

先年私が糖尿の氣味で一時酒を絶ち、代りにウエスキーをやつてゐた時など、奥さんとお嬢さんと御一所に明治座見物の途次、花菱さんに御贔負の天兼のお座敷天ぷらを看に、店のカフエー（これも花菱さんの後援で故村

十二ケ月（三）

川柳マッチ
大阪　麻生茂乃

出語りがあるかと思ふ櫻の灯

通稱布達拉と言ひ、西城西藏悉く歸順せるを記念し西藏都綱式に倣つて建立されたもので、乾隆二十二年三月より三十六年八月に至る年月を費したといふ。外觀は宛然城廓のやうで、各所に洞門を設け、房室は悉く內部に向ひ各殿の結構廣大にして莊麗を極めてゐる。殿內に安置された幾多の佛像は毀損して見るに足らないが、往時此の廟に參詣する札薩克正公は紅臺上に登ることを許すが、臺吉以下琉璃牌より遙拜する制札がある。

布達拉に只大規模を見て歸り

× 殊像寺その他

この寺は山西省の五臺山殊像寺を模倣したもので乾隆四十年に竣功したのだといふ。布達拉とこの寺とは衣服の色が紅と黃に區別され、昔時大いに西朝を爭つたといふことである。

殊像寺に紅衣の僧のわけをきゝ

どの寺に這入つても支那人の僧が直く線香を持つて來て火をつける。仕方なく、否兎に角その線香を受け取つて佛前に立つて拜まねばならぬ。

線香を焚き草臥れる八大廟

川柳マッチ　十二ヶ月（四）

踊りからをどりへあるくあいまんと

賣屋・食滿南北

田正雄の人間座にゐた女優の經營）から各種のウヰスキーを出されてヘト〳〵に醉拂つたことも忘れ得ぬ酒の話の一つです。

二三年前上京の時も、花菱さんから電話で川上三太郎君が晝頃から見えてゐるから是非來いとの事、歌舞伎座の歸りを直ぐ夜の十時頃タクシーを飛せば、久しぶりの三太郎君がもうよい機嫌でヤアとばかり堅い握手を交しながら、又酒の座が改まつた時のことなども思ひ出されます。

も一つ「川柳雜誌」の麻生路郎主幹が金澤の川柳大會に見えられた時、歡迎會の歸りを宅へお連れして朝の三四時頃まで酌み交し、妻の三味線で路郎さんの長唄など出たことも酒なればこそと微笑まれます。

何んにしても酒はよいものです。

禁酒論者

理學博士　長岡半太郎

青酸と酒の醫學が解りかね

罰盃も受ける

伊豫電鐵會社　前田五健

「あんたは、呑まん〳〵と云ふが、綺麗なのが居ると呑む、ケシカラン」

「さう云ふ譯ではないが、さうかも知れん」

「一體酒は好きか嫌ひか」

「困る、そらあつた方がイ、が、無くても差支へない、酒のエー悪い位は判る」

「つまり酒と添へ物の花が」

「降參ッ要するに陽氣なのが好きだ」

「それ見い、罰杯だ」、默つてうける……

新座敷御披露

あけましてお芽出度う存じます。

皆々様のお奬めによりまして新座敷を増築中のところ、この程ようやく竣工いたしまして御宴會にも御利用して頂ける樣に萬端の設備が出來上りました。何卒倍舊のごひいきを伏してお願ひ申上ます。

まん朝の味覺に醉ふた春心地

即席料理・ちり鍋　まん朝

大阪千日前芦邊劇場東裏

電話戎一五三一番

此の程度です。

地酒は困る

東京朝日新聞社
赤井清司

私が東京で仕事をし出してからマル〳〵六年になりますが、來てから今日まで別に大阪だから東京だからといつて困つたことはありませんが、たゞ一ッ東京のお酒には困つてゐます、この酒も今日の東京には灘の生一本と稱へられるのがドン〳〵入つてはゐますが、どうしたものか大阪生れの私にはこの灘ものが別の味がしてたまりません。そこで大阪の義兄にたのんで毎年秋口から翌年初夏の頃までは必ず大阪の酒を送つて貰つてゐます。といふと私は酒のみのやうに聞へますが私はお酒のみではないのです。お酒が好きなのですこの頃ならカラスミかコノワタで、春さきならばフキ味噌さては菜種の蕾の漬けたので、秋ならば蝗のつけ燒きでといつたもので飲ましてくれゝばいゝのです。社の休み日なんかには何はなくとも箱根越しの樽から出された一合のお酒をなめながらジッと暮れて行く時を見つめて暮らすのが、この上なくうれしいのです。

川柳マッチ

十二ケ月（五）

金魚屋に舞妓袂ををしえられ

兵庫　長崎柳秀

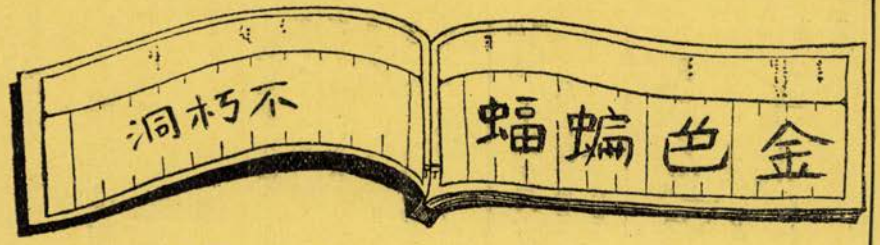
酒即川柳

滿洲土木協會
大島濤明

×

私の酒は晩酌一本である。燗瓶の半分位ゐまでが何とも言へない美味しさで、それから先きは隋力で呑むに過ぎない。しかし呑んでゐて嫌な氣持ちがする譯ではない。（58頁へ）

雪・雪・雪・
スキー用具は
白熊印スキー
TY卓球ボール
元賣發
八木松運動具店
大阪市南區大和町一九
電話南4117番・振替大阪61128番



I

春は春らしくフレッシュな感觸のセンリウ・マガジンをつくる。そんな事を考へぬでもなかつたがふかふかとしたクッションに葉巻でもくわえ、マニキュアの身だしなみを誇るような時代でも來ない限り「川柳雜誌」らしくもない事だと思ひ、せめては來るべき丙子柳壇への我が社の抱負だけでも書きたいと思つてゐたが、これも雜用に追ひまくられ發表を見合せてしまつた。發表は見合せたが實行には移るつもりである。

この「金色蝙蝠」は自他の事を手當り次第に書いて行く頁として拵らえてもらつた。私が何か云つてることも必要であると思つてゐる方は是非この頁の愛讀者になつて欲しい。

そんな譯で、この頁には順序がない。時には世間のことを書く。時には人間そのものゝことを書く。が多くは身邊雜話となるだらう勿論柳友のこともかく、川柳論の片鱗も描くことゝ思ふ。一九三五の年は私にとつて、かなり多難な刺戟の強い年であつた。先づ最近の私の心境を知つてもらうためにそれから書こう。

三月の中旬に私の四男、洋の急病を紀州から電話で知らされた。「川柳雜誌」を出來るだけよくするためには私自身が清貧に甘んじて川柳のために少しでも餘計の時間をつくるのが一番いゝと信じてゐる私としては、こどもの病氣ぐらゐ私の神經をなやませるものはない。先きだつものが要るからである。それが無いためにこどもを喪くしたとあつては、諦らめきれないからである。と云つてそんな時に向うから察してくれる人には猶更迷惑をかけたくない。私は洋の病氣が永びくものとして、妻を紀州に遣り、私は紀州と大阪を毎日飛脚のように往復してゐながらも就職の決心をした。一時迷惑をかけるとしても、あてのある迷惑をかけたいと思つたからであつた。しかし洋は私の覺悟を必要としない短い日數を病んで亡くなつた。ところが一方就職の心配をしてもらつた方の話がズン〳〵進んで、私は幾年振りかに又サラリーマン生活をはじめた。これは「川柳雜誌」のためには困つた話であるが、私一家にとつては誠に有難い話で、殊に愛兒を喪つた悲しみを忘れるためにも、あとに遺つたこども達の將來のためにも愁眉をひらく一つの出來事であつたのである

私は新に入社した社からの報酬などは目當てにせず、セッセと働いた。尤も新らしい仕事、殊に難しい仕事であつたが一生懸命に働いた。私を副部長にしてくれた部長M氏は私よりも十も年下の人であつたが其の道の苦勞をして來た人であり定評ある働き手であつたので、私も仕事に張合ひをもつて職尾に附して走り廻つた。私を知るほどの人は私の危ぶ

なかしい仕事を心配して「あんたにそんな事が出來ますか」と云はれたもである。

ところが、そこへ私に、その仕事よりも、もつと適切なことの話が持ちあがつた。私としては、その人の親切にうたれたが、現在の部長の知遇に對して、自分に都合がいゝからとて、勝手な眞似は出來ない。私はその話を部長にスッカリ打明けた結果、先方と部長が知人であるのを幸ひ、直接會つて貰つた。九月から私は社の諒解を得て現職のまゝであとの會社の仕事も見ることになつた。私の忙しさに輪がかゝつたことは云ふまでもなかつた。

私はヘト〳〵になつて走り廻つた。その間川柳のこと、家庭のことの相談、オチ〳〵眠る閑ももたぬ身體になつた。隨分忙しい仕事に慣れてゐる私も遂々十一月の中旬に病臥した。かなりな神經衰弱に罹つてゐることを知つたので私は考へざるを得なかつた。家族は勿論私の健康を案じてゐる。私は七月から十月までに三度、アパートに移つて仕事の完成を期してゐたが、健康にはかへられない。川柳のためにも、家族のためにも、いゝ方法としては社の方を辭めるより仕方がなかつた。

苦しいことは世の中には幾らでもあるが、知遇に酬ゐられずに退くことも實に苦しかつた。これからと思つてゐる仕事を充分やりきらずに迷惑をかけたまゝで、僅々九ヶ月で辭めさして貰つた。

十二月からは、自由出勤の一社と「川柳雜誌」だけになつた。一寸閑人になつたような氣がしたがそれも束の間である。それはそれだけに仕事は殖えてゆく。十二月もキリ〳〵舞で暮らした。その後こどもたちも元氣だし二世としてのアートのヴァイオリンも本格的な勉強をじはめてゐるので、先輩や友人の好意の中に包まれて越年する今の私は有難い境涯だと云へる。

一年間に得た私の經驗、人間の心の美しさと醜くさをハッキリ書いて見たかつたが、時間を持たなかつたので他日機會のある毎に書きのこさうと思つてゐる。

新建の廿八日松正宗の一隅にて　（路郎）

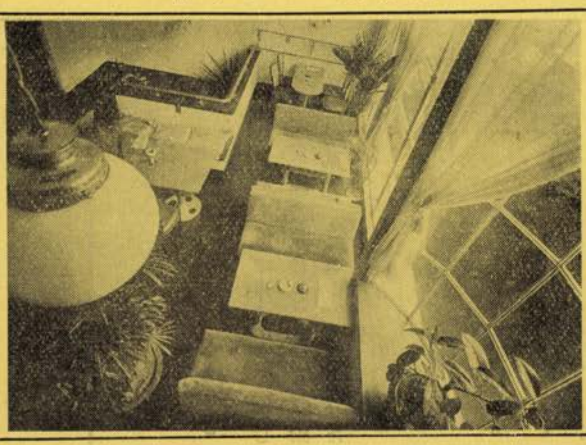
× × ×

くだものと果物の調理

賀正　平野屋果物店

パーラ部　戎橋電停北　電話南五七九七

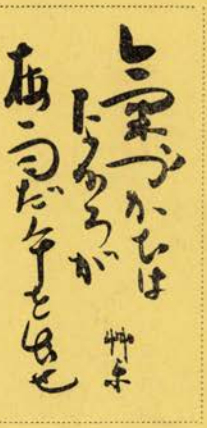
果物專賣部　難波驛前　電話戎六一六二



川柳マッチ　十二ヶ月（六）

氣づかひはなかろが梅雨だ傘を出せ

大阪　西田艸樂



る。それもその筈で小學校時代は唱歌はいつも丙だつたから。

×

私の酒は眠り酒である。殊に河豚のヒレ酒と來ては大の好物であるだけ、つい呑み過ごしては眠つて仕舞ふ、邊りがあらい靜かだと思つて眼を醒ますと連れの人達は何時の間にか引換げ、猫の子一匹居やしない。最初のうちはこの眠り癖せのため、何かの野心でもあるかの樣に誤解されたものだが、近來は僕の謹嚴さが漸く知られ、寃罪を蒙ることはなくなつた。

×

私の酒は凡て川柳である。晩酌でも、宴席でも、ポケットには常に川柳雜誌がひそみ、杯のまにまに浮んだ川柳はノートに殘される

酒の友、酒の席、酒の膳その凡てが私の川柳眼と川柳趣味の壺に入れられるので、私の酒はほんとうに美であり、雅であるのである。

×

私の酒は量より氣分である。看にしても一寸珍らしい突き出しとか、變つた刺身とかがよく、場所も風雅な酒亭や林間小鍋などが望ましい、殊に好きなは雨の日、雪の夕べ降りしきる音を聽きつゝ、淺酌、低唱が何よりである。

×

私の酒は陽氣である、一本も呑むとつい陽氣になつて唄の一つも唄ひたくなる。しかるに私の唄と來たら、調子外れのドラ聲といふ好條件なので、酒座の愛嬌としては最適であ

酒桶の書齋

古川柳研究家　**蛭子省二**

あ・ら・かるて

街に住めば

高橋かほる

お正月やさかいに三味線をはりかへさしたら、日本紙で澁の刷毛目にペルシヤ猫の繪の書いた三味線のどうを包む袋をくれました。……氣の利いたサービスですね。

田舍に住めば

竹内機見女

此處は土佐十景の一つ新田堤の畫すぎ、この日の空を映して鉛色の灣の水は、ほのかな磯の香をこめてさして來てゐた。銀杏もはぜも色づいたまゝ向ひの山は薄靄に包まれ、その麓を種崎に通ふバスが警笛を江一面に反響さしてゆく。土堤の近くに見上げる程大きな紅蜜柑の木があつて、枝一杯に實をつけてゐた。目もさめる樣な赤い色は一つひとつがつ

クラゲの粕漬を少し食べて醉つてしまつたのが私の歳末小景なのではあるが、醸造事業に關係をもつので酒に就て理窟を言はしむるならば相應持合はある、諸家の御高見を承てからがよからうか。

私は二十三石桶を二つ列べ移動式書齋を建てようと老妻相棒に設計はしてみたものゝ、やはり專門家が一枚加はつて貰はねばと魚鳴洞御主人に話した事がある。伊豫國に酒樽の茶室を構へて居らるゝ六々庵翁の寫眞を最近にみて世間には思ひを等しうする士のあるを欣快とし氣强くなつた。

私のも案外に贅澤な部屋となる計算が出る實現するや否やは私の生命問題になつつ居る

定量一一本

川柳みちのく主宰

小林不浪人

「煙草をやらないンですか」

「え、酒も煙草もやらないンです」

「ぢや、女、一方ですネ」

「いや貯める一方です」

まア、ざつと云つても、事ほど圖樣に眞面目な男。

それは私、即ち不浪人と云ふ男のプロフイルである。勿論、これは自畫自讃？に屬するのであるが、本當を云ふと、やつぱり「酒」だけはとてもやめられぬものゝ一つである。それどころか恐らくは柳壇きつての酒豪と目する柳友がたんとあるかと思ふ。

けれども、正眞正銘、定量タツタ二本きりで、ほろりと醉つてしまふ私である。而も、醉へば何處へでもころりと寢て直ぐ眠つてしまふことよい酒飲みである。

「一升瓶で二本カイ」なンてまぜ返したり、

川柳マツチ

十二ケ月（七）

七月も二十日を越せば人臭し

東京　前田雀郎

やゝかに輝やいてゐるやうな……突然枝がざわ〳〵と鳴つたのでよく見ると繁みの中に男の子がしつかと幹をふまえて立つてゐた。こゝにも美しい秋の詩がひとつ！「きれいですね」思はず少年に話しかけるともなき感歎詞！　すると人家から聲がして「健よ、お人が何か云ふてゐるぢやらう。」「……」やがて老母が私に近づいて來て「蜜柑がおいりとちがひますか。と愛想の笑さへ浮べた。私は急にさみしくなつてだまつて顔を振つた。雨が近いのか小魚がそこかしこではねてゐた。

川柳指導講座

講師　塚越正光氏

課題　「女性」一人一句

締切　一月十五日嚴守

發表誌三月號

投句　本社事務所宛

川柳マッチ　十二ケ月（八）

練習は外野の肩をほめてすみ

大阪　森東魚

練習は　外野の肩を　ほめてすみ

川柳十二ケ月

然し乍ら去ぬる年の夏、東京に於て一夜車上の人となり、寢鎭まつた大都市の深更から拂曉まで「涼み車」と洒落たのも酒―脫線の度びに禁酒を思ひたち―其時代の酒面白かつた只今のやうに、衞生的、經濟的の酒は理に陷ちて眠くなつていけない。―「晩酌の追加はお湯に浮き上り」―「生甲斐は盃を手に孫の藝」―「病むよりもよいと一升壜十日」―これではお酒もドムナラン。

禁酒修業

安川久流美

「酒と私」！　何だか自分に課されたかのやうにビンとはらわたへこたえました。事程左樣に酒とゐにしの深い私、思ひ出しても呆れ返るくせのよくない酒、いく度か禁酒を誓つてはツイ環境のため崩れてしまふ事再々、それでも滿一年位は全然アルコールに遠ざかつて「さとつたかこの寒いのサイダ拔く」といふやうな下戸くさい句も作らされたのだが、今度もまたいさゝか健康を害して昭和十年國調の日から「酒」氏へ離緣狀をぶちつけた。

「その狸寢がものだらう」なんて冷笑しツこなしである。ともかく、酒癖なら甲の上々であるから、酒では斷然失敗のない私である。柳友諸賢！「どうかと思ふ」なンて云はず之を疑ふべからずである。

涼み車

山梨日日新聞社　篠原春雨

所謂、寢酒―程度の一合上戸の今の私としては、餘り酒を說く資格に遠いかも知れない

田舍の話

尼綠之助

A

村でお正月を迎えるのも五年振りだ。

村内をグルリと廻つて歸れば、グデン〳〵に醉つぱらつて重り合つてゐることだらう。

霙がしと〳〵降つたら夜中に目を醒まして昭和十一年の新しい氣持にしんみりとひたることだ。

B

村役場に勤めてゐるとチョイ〳〵長男が遊びに來る。こんなにチョイ〳〵頭を出されたんでは困るんだが、滿更憎らしいことでもない。今迄ゐた町では曾てE町長は子供を連れて出勤し、机の上でおしつこをやつた話もある……などゝ辯解をしてみる。

C

町から村へ來て淋しからうと十人が十人言つてくれる。子供がガヤ〳〵ゐるので、その子供も四歲、三歲、一歲なんだから隨分な密生で、とても賑かなんだ。しんみりとする日

この新年號が出るまでに漸く百ケ日足らずの修業、今年の松の内は「四谷赤坂麴町」といふ古句そつくりの廻禮は省き、氣のぬけた顏をしてゐやう？我身ながらナゼ牧水の歌「しら玉の齒に透きとほる秋の夜の酒は靜かにのむべかりけり」いふ境地になつて盃をなめられないのかと思ふ（十二月十六日）

盃を重ね給へ

松陽新報社　米村あん馬

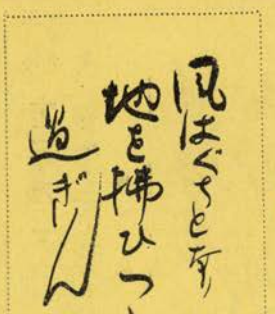
「酒なくて何のおのれが櫻かな」全くその通り、小生も夜毎晩酌に陶然としつゝある。不肖ながら上戸黨であります。私の如く年が年中目のまはるような忙しさを味つてゐるものには「酒」はホルモン以上の若返りグスリであり、長春不老の「靈藥」で要するに酒こそ眞に「天の美祿」である。すべからく樽の鏡をあけの春、屠蘇に年賀に盃の數を重ねて……あゝこの明朗この感興、大に醉ふて〳〵目出度い、しかも健康の春を壽かんかなデス

（十二月十五日）

川柳マッチ　十二ケ月（九）

風はぐちとなり地を拂ひつゝ過ぎん

大阪　山本雨迷



手酌に限る

都新聞社　前田雀郎

私はお酒が好きなのか、嫌ひなのか自分でもよく判りません。自分が亭主の時はいくら飲んでも醉はず、お客に廻ると他愛もなく醉つて仕舞ます。醉ふと云つても、もとは隨分馬鹿な眞似もしましたが、近頃はいゝ加減のところで横になつて仕舞ふ。だからまあいゝ酒なのかも知れません。

好みから云へば最初の一本は人肌がよく、二本目は少々熱燗がよろしい、お膳の上は賑やかなのがよく、と云つて箸まめではありまなんかまあ當分あるまいと思つてゐる。

愉快な話もある、ようやく土地に慣れぶらんこを拵え寄つてたかつて笑ふ書夕暮れのざわめきうちの子もゐるな

……一〇、一二、五……

イニシヤル判斷

不朽洞

汀柳君の全家族といつても增位安貞、勇多子、安平の三人であるが三人共、Y・Mである。

雨迷君は姓が山本、名が彌一郎、名論卓說をワイ〳〵やるのでY・Yが利いてゐる。

僕の假寓のスリッパにはAとA・Aと書かれてゐる。親の僕の姓の麻生がAで、二男アートがA・Aである。どうでもエーといふ意味でなくてエーエーと考えて欲しい。

ワイフの茂乃はY・Aである。ワイエー〳〵では自已的で面白くない。（ワイは自分の意味で關西語らしい。）

川柳マッチ

十二ケ月（十）

身だしなみさらりと秋の姿なる

松山　前田五健

せん。たゞ何となく淋しいのです、ゴテ〳〵した御馳走よりはあつさりした珍らしいお通しもので、それを樂しみながら頂くのが一番嬉しい。献酬は大嫌ひ、お酌されるのもあまり有難くありません、よき程に手酌でやるのがいゝ氣持です。晩酌は一本から一本半、日曜日に限り朝起きるとお膳の上に一本ついてゐますこれを頂いて、トロ〳〵と晝寢をするのがこの世での極樂です。

魂は天國へ

川柳研究主宰　川上三太郎

僕は酒を愛する。酒は洋酒よりも日本酒燗をしたのよりひやがよい。就中嚴寒夜色沈々たる午前二時頃、仕事を終つて氷のやうな寢床へ棒のやうに潜り込み、枕元に豫め用意して貰つた二つのコップになみ〳〵とある冷酒枕へ頭を乘つけて右手でそのコップ左手でマグロの鮪を頬張り、キューッ、〳〵とやると全身は冷凍魚みたいになつて、今にも凍死するのぢやないかと思ふ程の冷たさだ。その中身體の果の九州みたいな遠い邊がぽかりと溫かくなる。僕の魂はそれを追ふ。だん〳〵暖くなり、眠りに陷るのである。

一滴も嗜まず

熊本高等學校教授　田中辰二

中々に人とあらずば酒壺になりてしかも酒に樂みなむ（大伴旅人）

飲んだくれの旅人は萬葉集に有名な讃酒歌をものし候

大伴の旅人話せる男なり

と計りに

飲んだくれ、やれ記念日のめでたいの

と一に酒、二に酒で熟柿に似たる氣焔をあげ

古本は高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。
公立社書店
大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六二番

色紙・短冊
畫帳・表裝
大阪市南區心齋橋筋二丁目
（大丸一丁南辻東入ル南側）
和正堂
電話南（75）二七五一番
振替大阪　九一七五番

候も生來酒ぎらひの小生、一滴も酒と名のつくものは嗜まず「お神酒あがらぬ神はなし」の代りに「お餅あがらぬ神はなし」の句のなきを不思議に思ひ居候、さりとて食物は甘いものはきらひ、キリスト教にても無之、恐らく埋めしゐなの上を飲んだくれとクリスチャンが手を組んで最初に通つた事と存候　呵々

堅城が壞れる

間組大阪支店
森　東　魚

私が禁酒した事がある。「きんの字はどれだと禁酒なぶられる」など丶茶にされるかも知れないが、全く丸二年餘り禁酒した歴史がある。（歴史は大層だが）。其當時「あめりかの氣でゐる春の寒い事」「さゝれなくなつて禁酒も曲がなし」の年頭吟をものして、屠蘇さへ口にしなかつた。それが大震災に破れた家は先づ無事だつたが、禁酒の堅城が一旦にして壞れた。と云ふのは、草鞋ばきで見舞ひに歩き廻つてゐるうち、ある處で「水が乏しいので」と出されたビールを一杯やつたのが因である。――然しあの時のビールは全くうまかつたな。

酒禍二題

天滿宮社務所
藤里好古

酒の香氣を嗅いだゞけで、直ちに喘息が發作し、呼吸困難に陥入る僕には、ナンセンスな酒禍に遭遇すること一再ではない。新春の初笑ひの資として、其の二題を諸公に披露しやう。

――呪はしの御神酒――

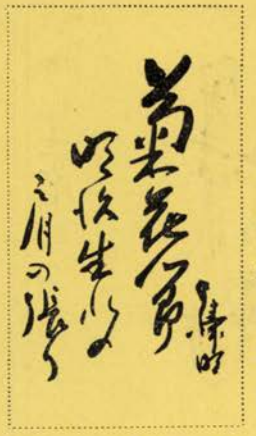
年末年始への活動が祟つて、初天神の寶永駕、節分の懸想文と諸計畫が一段落となつて

川柳マツチ

十二ケ月（十一）

菊花節明治生れの肩の張り

大連　大島濤明



賀正

今里新通
半吉
今里公園通り西角
電話天王寺二八一六番

純喫茶

心齋橋北詰北入西側但シ鹽町四丁目
バカイル

川柳マッチ

十二ケ月（十二）

十二月某日　猫の歩くを見

東京　川上三太郎

ホッとしたトタンに猛烈な發作を來し、病床に呻吟すること三週日、いつも一週日内外で離床するのが、廿日間を過ぎても依然として呼吸困難、そこで心配し出したのは母親、大の金光教崇拜ときてゐる。玉水教會へ日參しての御願ひだ、フ、ンと形而下の惱みを形而上の努力で癒そうとする矛盾を冷笑した。――母の慈愛に感泣するが――

然る處へ勤先の氏子總代Y氏が訪ねてくださつた。此人は金光教本部の重職に在る人だつたから、早速母親と共鳴して、枕頭で御祈念を行ひ、御本部の御神酒だと、首から胸、背へとブウ〳〵と吹き掛けられ、發作は一段と迫力を加へ呼吸困難はいよ〳〵激しく、眼を白黒するのみならず、身體はガタ〳〵振ひ冷汗は全身にびつしよりと濡らし、金光サンの御蔭を蒙つて癒る處か、十二時間苦しみ續けて、大變な御神酒の御蔭を頂いたことがあつた。

――デパートの食料品部で醉ふ――

昨春、新婚の彼女とアベックでT百貨店へ御年玉を仕入れに行つた品物は宣傳部のK君に託送方を一任し、父親への土產に酒の肴を物色すべくエスカレーターで食料品部へ降り漬物部の前を通つたら、店員が奈良漬を樽からセッセと列べてゐる。其の强烈な酒氣に當てられ、直ちに喘息は發作し、呼吸は困難、呼氣の内壓で喉がヒュウ〳〵と鳴り、額面は眞赤となり油汗さへ滲み出、身體を直立するを得ず、前屈みとなり、何も事情を知らず泡を喰つてゐる彼女の肩に支へられ、K君が呼んで呉れた車で逃げ歸つた。此事件以來交情は愈〻密で人も羨む仲で何一つ申分ないのであるが、彼女の最大好物が「粕汁」であるから毎冬期になると粕汁から、プンと發散する酒氣に、盡未來際惱まされることであらうことが、愛妻に對する僕の唯一の不滿である。

正賀

華黃王　藥傳家

主治効能（軟膏）
胃腸
神經痛
リヨウマチ
ぜんそく

藥價
三日分　一、四〇
七日分　二、八〇

發賣元
上瀧實行堂
大阪市旭區鴫野町九六五　電東三一一九

正賀

各種旗
七寶徽章
メダル
カップ

川柳雜誌社指定

加藤旗徽章店
大阪上本町六丁目西ノ辻角

新春川柳大會

お芽出度う御座います。川柳の社會化を主唱して創立されたわが川柳雜誌は茲に第十三年の新春を迎へました。この力强いわが社の初句會を左の通り盛大に催し度く存じます。川柳家の皆樣はもとより川柳を始めて作つてみやうと思ふ方々もお誘合せの上御出席を願ひます。

日　時　昭和十一年一月十二日（日曜）夜六時半

會　場　道頓堀倶樂部（電話南二七四八番）
大阪市南區日本橋南詰東入南側

兼　題　「鼠」　三句　麻生路郎氏選

講　演　何處へ行く　麻生路郎氏

路郎盃賞品　兼題天位賞として授與（出席者に限る）
兼題及び席題の天、地、人へ呈賞

川柳マツチ　出席者全部に（麻生路郎氏執筆）呈上

◇短冊交換◇

新春句會で短冊の交換を致します。御希望の方は御自筆の分を一葉以上御持參下さい。

▼川柳雜誌社スタンプは當日會場に備付てありますから御自由にお使ひ下さい。

會費三十錢

主催　**川柳雜誌社**

川柳雜誌社關係　新年句會案內

主催	日時	場所	兼題	會費	雜係
今治支部	二日夜七時	貯蓄支店 伊豫相互	袴橙割箸	十錢	宵明
伯耆支部	八日晝一時	伯耆會事務所 川柳祝	禮酒	十五錢	三光賞呈 美笑
御旅支部	十日夜六時半	道頓堀せきぐち	狗酌情婦	一圓半	みつる
天王寺支部	十一日夜七時	伶人町八居山四本葉光	塔鐘	十錢	葉光氏にたくさんおせあげて下さい 豆秋
今治支部	十七日夜七時	貯蓄支店 伊豫相互	氏神 雪馬	十錢	藤生選 文庫選 一風選
大阪朝報句會	十八日夜六時半	疊屋町カナメ	雜吟 花柳	二十錢	兼題、席題天位賞を呈す 與三郎
高知支部	廿一日	中島町ブラジル	雪		春水
道頓堀支部	廿三日夜六時半	相合橋東深川階上	半襟寢不足	汀柳選 秀山選	二十錢	おそばと福引を呈上	秀山

支部句會は必ず前月十日迄に決定して御報告願ひます。

日本名所名物川柳

（四國の巻）

前田五健選並畫

（三）室戸岬

植物の趣味は嬉しい室戸岬　大樓

室戸岬波のリズムとバスガール　葉光

颱風へ室戸岬の曉明り　同

バス搖れる視野一杯に室戸岬　木屢

心中も此所は見合す室戸岬　素泉

日本の意氣其のまゝの室戸岬　同

傷心は室戸岬の風にふれ　水客

よい風と云つて室戸を怖がらせ　宵明

陽があんなところにあつた室戸岬　曉童

酒呑んで室戸岬で叫んで見　都留逸

室戸岬太平洋を突き破り　文庫

室戸岬大師の徳は掌を合せ　世間音

室戸岬あんた大阪どこだすか　同

眞ッ晝の室戸岬はしぶきする　勝人

よい風で御座る室戸の大うねり　大樓

空想を大きくさせる室戸岬　素泉

室戸岬同行二人の笠で見る　宵明

土佐ッ子の氣性そのまゝ室戸岬　英賀夫

波々の果雲遠し室戸岬　五健

室戸岬鯨の嘘は伸び上り　同

「室戸岬」の概略

土佐にあり、太平洋に突出せる、斑糲岩の露出は灌木草木發生し背後一體の山（一八五米）頂上より稍下方に最御崎寺及燈臺等あり、岬端附近山腹一帶は常綠樹、濶葉樹の密林、林下植物密生、附近月見濱、目洗池、龍宮岩、鉦石、水掛地藏等弘法大師の修行舊跡あり、怪岩亂石、點綴に植物の景觀よく一望海天空濶の壯觀、日本八景の一也。

日本名所名物川柳を募る

四國の卷　選者　前田五健氏

(六) 屋島　〆切一月二十日

(七) 四國遍路　〆切二月二十日

宛先本社事務所　用紙ハガキに限る

川柳の動向と將來

山本雨迷

川柳界が一つの落着きを見せて川柳に就いての認識がある程度の地點に低迷しつゝあるかに思はれることは、昭和十年に於いて吾々は明確に知つた。

茲ではそうしたことの是非についての意見ではなく、將して川柳なるものが、その現實を何處まで持つて行くかといふことについて考へて見ようとしてゐるのである。

川柳が大衆のものであると稱へられ、又その分野に於いても詩としての眞價を基調とし把握しつゝある現狀を知るものには、斯うした低迷しつゝあることについて一座の吟味を試み川柳の再認識をすることは、決して無駄なことではない。

川柳が大衆詩であるといふが爲めには、依然として大衆的にといふ意味ではなのであるが、應々其の意味に加へて川柳を大衆に迎合させようとしたが爲めに、過去に於いても現在に於いてもその本質的な詩といふことから益々遠ざかりつゝあつたのである。そうした苦い經驗を持ちながらにも、口には川柳と詩を結びつけ、句には舊套を脱しきれない柳人の數多き存在が目下の柳界をより混迷させつゝある。

我々は、川柳人として、過去現在に於いて幾多の言葉から、川柳は詩であり、文藝であることを知つてゐる。されば川柳人であることは、詩を解する人として、敬愛すべき人々であると信じて居るのであるが、川柳の持つ、物の見方が惡い意味に精神化して、川柳人は詩人としての靜かさを惜しくも忘れてゐるかに見えるのである。

獨自の立場を持つてゐる川柳であるにしても、詩川柳としての重責を知るからには、我々はあくまでも詩川柳を扱ふものとしての矜持を深くしておくことは、川柳人としての重大な要素である。されば、川柳のしかあるべしと信ずる道は自から開かれ行くべきであつて、其處には何等の疑義をさしはさむべきところすらない。しかも強く眞面目に己れを知る者にして始めて、此の境地に遊ぶことが出來るとすれば、川柳人としての明朗性は川柳に胚胎する空氣によつて自から釀成されてゆくに違ひない。

敢えて奇を好み、變を望むのではなく、其の本然の姿を求めて、歩んで行けばよいのであるが、それすらもなし得ないで、己れを迄失はんとしてゐる數多き柳人を我々はよく知つてゐる。

昭和十年に於ける川柳界は平穩な柳界であつた。言葉を換へて云へば、川柳に明確な分野が築かれて古川柳派と新川柳派が對立的に各々の畑を大切にして來た。俗に觸らぬ神に祟りなし主義となり、實踐躬行を以つて唯一の武器として來た。之れを批判すれば、柳界に覇氣が缺けたと云へないこともない是れは何故かと云へば新興川柳の陣地が動搖してしまつたこと

に大きな素因があつた。之の意味から云へば、實踐的に古川柳派が優勢となつてゐる。

新興の陣地が動搖したといふ意味は、寧ろ皮想の觀察である。こゝでいふ動搖は表面化したものゝみを指してゐるに過ぎないのであるが、其の底流となつてゐる氣魄はあくまで見逃がせないものがある樣だ。一歩進んだ考察を試みるなれば、新興派は精神的には屈從はせぬけれど、經濟的に苦澁をなめてゐるのである。前年度に於いては一方の牙城「川柳人」が劍師なきあとに立てなくなつたことで、殘つてゐるものがあるとすれば、新興派といふよりも詩派川柳に指を屈せねばならぬ、それらは東では川柳研究、東北川柳、湯の村、川柳地帶、芥子粒、であり、西では、手、視野、川柳街、川柳雜誌などがそれである、個人的には相當分布されてはゐるが何れも「力」がないので徒らに脾肉を嘆じてゐるばかりである。然しながら之れらのうちから、所謂既成川柳をあくまで否定するものもあれば、しないのもある。そうした分野づけられたのが謂ふところの平穩なる柳界の醸成なのである。退川柳の動向も自から明確となつてくるのであるが、先づ川柳は詩なりとする言行一致の方向に向つてゐることは首肯できる。然しながらそうした動向もさして急激なものではなく、漸進的なものである

柳人筆蹟（二）

川柳雜誌社東京支社長　福田山雨樓

屈川柳は御免だといふ意味が徹底化してゐるのであるが、昭和十一年に於ける柳界が、將來に向つても此の儘の推移を許して置くだらうかと思ふのが本論である。

さて斯うした現狀を見てゐることで、此の點に於いて尙あきたらなさを感じるものもあるけれどそうした微溫的なのが嫌らひな人は大いに奮鬪して、川柳界に一紋を投じられることはないと思ふ、而かもそれが理論的にあくまで論じられることは柳界に於いても大いに歡迎すべきことだと信ずるからである。と同時に川柳界の所謂平穩さは、川柳をして益々沈泥せしめずには置かないのであるから昭和十一年度に於いては此の雰圍氣を打開しなければならぬと思ふのである。

波亂重疊のあるところに必らず進歩が伴ふのであるが、川柳界の現狀は餘りに平穩すぎるのであるから、自由な論陣を以つて、其の中から將來性を築き上げることが急務であらう。

尙此の一章は甚だ概念的であつたから、それだけ物足らなさがある。今一歩進んで具體的に物を見ることは本文を生かすであらうがペンを更めることにしたい。

一路集

募集句

松の内

麻生葭乃選

松の内困つたことに猫のめし　水客
呑むまでは標準語なり松の内　文庫
松の内だけなと寝たい職をもち　德
脱いだのをズラリと掛けて松の内　双亭
松の内噂の友がやつて來る　静波
松の内食べた蜜柑の數知れず　井乃蛙
酔ふて來て酔ふて歸へるも松の内　水煙
松の内だまつにて袴たゝむなり　つと夢
松の内ラヂオ體操忘れて居　都會人
松の内仕事一つも纒まらず　四塊
松の内せめて三ヶ日だけは酔ひ　綠水
松の内忙しいのほ妻ばかり　菊路
十九の厄も嬉しい松の内　公美
松の内よい演藝を聞きもらし　今雨
編みものをして松の内氣らくに居　觀月
松の内父も歌留多へ顔を出し　葉魚

松の内將棋は足らぬまゝでうち　曉童
寝るだけの事松の内片附かず　蘇堂
門松のゆがんだまゝの松の内　木履
松の内案外いける口と知り　正柳
灯のともる頃も嬉しい松の内　彩泡
おほびらに酔つて戻るも松の内　沐天
松の内母の氣苦勞知つて居る　堯子
松の内過ぐればもとの無一文　まさる
松の内家の酒だけ飲んで無事一風　
松の内同じ挨拶ばかりするいわを　
松の内久方振りの顔が見えやいち　
孫からも年賀をもらふ老夫婦　品子
キチ〳〵と靴磨けてる松の内　歌都路
松の内ほんのり朝の頬を染め　麗公
松の内酒の香りの町をゆくいの助　
松の内重ぬる年へ化粧もし　不二號

川柳家戸籍調（續）

（係）　綠雨

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者子供の有無（11）嫁ひなもの（21）川柳に手を染めた年月

（453）　葵德三

（1）青石武雄、（2）葵德三（匿名）、芙蓉峰（雅號）、（3）明治三十六年三月二日、（4）神戸市葺合區御幸通七丁目、（5）大阪市西成區出城通四丁目十二、（6）雑貨製造業者の外務員、（7）知つてるかアハヽと手品やめにする（紋太）、（8）重壓をおもふ雫の絶えぬ雨、（9）文藝と名のつくもの一般、投書癖、（10）妻あり子なし、（11）なし、（12）昭和八年十月神戸ふあうすとに投句したのが最初、九年一月ふあうすと句會に出席それより從來の各種文藝投書を廢めて專心作句九年四月仕事の都合上大阪へ轉住以後各地柳誌に投書今日に及ぶ。

（454）　橋本美奈子

松の内國旗を竿に卷いて寢る春光
黒星の運勢にゐる松の内嵩喜固蘊
松の内妻への賀狀五六枚喜由
まあ上がれ飲んでから行こ松の内柳夢
松の内酒の出さうなうちをよる章泉
儲ければならぬ軒店松の内葉光
(人)松の内タクシーだけの夜となり煙柳
(人)松の内郊外電車皆惠方ひとし
(人)松の内馴染の妓にも會へぬまゝいさむ
(地)松の内母にラヂオがあるばかり葉光
(地)松の内割木のやうなとゝを喰べ佐保蘭
(天)奉公に出して淋しい松の内禿山
(軸)松の内まだ一軒を飲み殘し葭乃

紋付

紋付の袂から出た黒の石曉童
箪笥へ色は褪せたり五つ紋葉魚
銘々に紋付を持つくらし向き菊路
紋付を押し戴いて質に入れ煙柳
紋付のせわしく動く金屏風木履
紋付の一團がゐて畫の汽車水客
紋付の喪主に見惚れる未亡人葉光
羽織だけ紋付にするおつき合ひ春巣
團長のでかさもでかい五つ紋佐保蘭
紋付へ母のおん手が伸びあがり正一
紋付で行く約束をして別れ歌都路
紋付で唯事ならぬ歩き振り水煙
紋付を着てつき添の母うれし觀月
紋付に職人の型つゝまれず章泉
紋付で出る日の男すきがなし今雨
世話好きと云ふ紋付の汗をかきいさむ
失戀を包む紋付鶴が舞ひ正祐

増位汀柳選

紋付の肩へ溶けるも春の雪双亭
君とこと同じ紋とは知らなんだ紫香
定紋と合はぬ其夜のかたい膝都會人
紋付を着れば祖先へ濟まぬこと
一度しか着ない紋付褪せてゐる勇多子
紋付を疊んで不思議まだ解けず靜波
紋付で馴染女給に逢ひにより德三
紋付のグットそり身を寫される文庫
紋付を着た日の妻と他人めき春光
紋付の政黨ゴロとより見えず一風
丸刈の紋付柔道部の主將彩泡
紋付を着る長男へ見とれたり與三郎
紋付で來た妹を客にせず春秋
紋付の堪忍してる袴の手禿山
紋付に甲種の肩の巾を見せ四塊
紋付は冷たく白い足袋をはき蕪人
紋付を着て詠申歌かいてゐる喜由

---

(1)橋本美那子、(2)美奈子、(5)大正四年七月二日、(4)石川縣金石町港町、(5)大阪市住吉區平野西之町八三、(6)なし、(7)のんでほし止めてもほしい酒をつぎ(葭乃)、一雫井戸一面にひゞくなり(綠雨)(8)なし、(9)生花、映畵、(10)有、(11)いばる人、(12)昭和十年四月

(455) 渡邊木履

(1)渡邊秀雄、(2)木履、(3)明治三十七年三月七日生、(4)神戸市、(5)神戸市湊區湊川町九丁目四番屋敷、(6)大阪鐵道局經理課、(7)酒とろり〳〵大空の心かも(路郎)、咳一つ聞へぬ中を天皇旗(劍花坊)(8)未だ御座いません、(9)寫眞術、讀書謠曲、(10)妻有り、子供一人、(11)威張る奴、(12)昭和九年五月

(456) 林秀太

(1)林秀雄、(2)秀太、(3)明治三十六年二月二十七日、(4)神戸市、(5)明石市太寺四丁目三一五三、(6)大阪鐵道局經理課(7)酒とろり〳〵大空の心かも、(8)盜人に離のばらが咲いてゐる、(9)花作り、(10)有妻一女、(11)ぬるぬるした食物、(12)昭和七年十一月

本社京阪神支部聯合主催

（谷町四キタムラ寫眞場撮影）

樂屋裏まで滿員の忘年川柳大會の情景

忘年川柳大會

川柳雜誌社
京阪神支部聯合

街行く人の足並も慌しい極月を、恒例の忘年大會々場日本橋倶樂部へ集つて來る人、人人。超滿員。爆發しさうな熱のかたまり。轉手古舞の幹事諸君の顏がのぼせた樣に赤い。與三郎君の司會、鮎美君の開會の辭によつて滿場百八十餘の魂が、柳心一體、もう十二月も正月もない忘我の境に誘はれ切る。各題締切後東京からわざ〳〵本大會の爲に下阪下さつた山雨樓氏の講演「柳樽の精神」何時も乍ら變らぬ熱心なお話あり、次に路郎先生が「歳晩の味」と題して獨特の講演を試みられる。選句披講に入つて、場内の空氣は正に沸騰點に達し、笑聲、歡聲、拍手の渦卷。記念撮影後九天の閉會の辭で、惜しくも散會。歳末を飾る未曾有の大句會は斯くして終つた。尙本年の優勝盃は最高點者岡田某人君の手に歸した。

（九天記）

出席者（出席順）

路郎先生、柳笑、艸樂、沒食子、禿山、汀柳、勇多子、よし江、呑行、丹車、木履、三四郎、つと夢、山雨樓、勝太郎、天風子、久米雄、緩勾配、初歩、蒼水、呑々子、嘲子、佐太郎、蝶の助、素月、世間音、角嵐、巨雷、樵歌、樫葉、綠雨、美奈子、柳坊、九葉、芳二、喜由、新水、源坊、九天、天秋、秋生、喜山、はるを、千春、不凡、朴堂、東郊、青竹、幹茶、道樂、文久、都會人、凡路、水客、十九緒、秋月、ライト、某人、洋々、羊之介、かほる、柏茂、詩與一、天國、鯛車、勝人、雨少、雄謙、いさむ、せいち、九厘坊、不角、靖弘、菊人、バンコン、天弓、溪花坊、鷄牛子、明暗子、方眠、坊茄子、鮎美、翠陽、靜波、觀月、遊歩、美津生、秀峯、冬扇、明鐘、朔風、曉星、光星、紫舟、悟堂、小宰相、鶴峰、新市街、鯛市、朱朗、小柳子、茶人、靜路、變人、よし美、桂三、双魚、半疊、靜城、明珠、木醉、秋無草、默平、柳狂、水郎、鈍魚、水咲、牧人、鐵心、曉兒、伸柳、十三男、獏、銀星、八歩、琴泉、玉芳、敏夫、品子、青兒、清彦、みつる、勇、邦典、德三、星湖、史呂、禮人、一六、日華、朗人、卜居、萬樂、紀太、小松園、開路、彩泡、正光、春光、蘇堂、春秋、幸捐、ひろし、ため、葉平、柳次、いわを、豆秋、朱椀坊、與三郎、青踏、滿潮、雀蹈子、夕鐘、夢裡、背高、紫石、白楊、里十九、安平、靜江、友帆、義呂、多郎、亂耽、翠夢、雪嶺

席題　街　立　夢　裡　選

街立をゆすつただけの小競合　木醉

街立に影がある夜の愁ひごと　角嵐

街立へ何か書きたい坊やがゐ　星湖

街立の火の用心が時代めき　艸樂

忘年川柳大會席上にて同人及び支部幹事の記念撮影

（列前）夕鶴・閑路・雨緑・水新・世間音・ほか・るを・路露・子金浸・平安・生先・郎太・人某・郎三男（列中）人會・秋豆・秋春・太紀・揖幸・呂史・光春・由喜・江雪・子奈美（列後）禮夢・なをわい・江しよ・子多勇・呂義・美貼・樂神・巣山・樓南山・珠明・夢翠・山秀

柳汀

衢立の向ふは別にある話　朔風
衢立に下女には惜しい聲を出し　呑々子
衢立のこつちは獨身不味い酒　世間音
衢立を楯に近藤勇の眼　溪花坊
栖鳳と聞いて衢立見直され　世間音
衢立へどか〳〵と出る子澤山　山雨樓
衢立の向ふも酔つた聲となり　雀踊子
衢立の内で斷る聲低し　青兒
御馴染へ女給衢立工風あり　朴堂
衢立へすつとかくれるつけぼくろ　秋無草
（十）衢立の下で悲しく取り卷かれ　柳笑
國寶の衢立を見る京の寺　靜路
打ちあけるつもり衢立引寄せる　十九緒
千圓といふ衢立に人が寄り　蒼水
衢立の影にうはさの嫁の事　双魚
猥談と知る衢立の向ふ側　亂耽
衢立を洩れる激論着くゐる　朱朗
待たされてゐる衢立の銀の色　豆秋
似顔繪の衢立が有る芝居茶屋　茶人
衢立のあちら給仕の戀があり　九天
（五）衢立に影はうれしく折れてゐる　ト居
衢立をへだて人生觀を聞く　水咲
衢立の波おごそかなお元日　紫石
うろたへて立てば衢立まで動き　新水
衢立のかげから小姓出そうなり　樵歌
（人）衢立へ次男個性を殘したり　三四郎
（地）衢立の古さと別にピアノ鳴る　鶏牛子
（天）衢立の色童貞を捨てた夜　都會人

席題　雪　明珠選

運命に悲しく辿る雪の道　柳笑
雪よ降れ降れ父うさんと遊べます　綬勾配
親のない子供へやはり雪が降り　聞路
紙の雪責の笞に降り募り　半疊
初雪へうれしさむく子はかへり　朗人
大阪の雪はいきなり寫される　萬樂
雪倦ひスキーに蠟をひいて寢る　汀柳
病室の溫度も雪の夜話のうち　亂耽
雪の日に僕の歌を編んでゐてくれる　新水
雪よ降れ子は滿洲で死にました　佐太郎
屋豪から足だけが見え雪が降る　九厘坊
雪の日の夜泣の愚痴を聽いてやり　詩與一
雪のあるとこ迄スキー負ふてゆき　漠
お隣りも湯豆腐らしい雪の夜　巨雷
大阪の雪贅澤な物に見え　素月
構想の雪へかまへたカメラマン　鯛車
酒好きの主任へ雪が降つてくる　柳坊
更生を誓つて立つた雪の朝　靜波
つくつた雪だるまがだん〳〵とける　九袁安
悪友が呼びに來そうな雪の夜　平桂三
屋上へ上る都會の雪景色　都會人
くせ直しした湯を捨てる雪の夜　朔風
雪景色百姓はみな懐手　山雨樓
小鳥一羽淋しくとんだ雪の原　曉星
（十）せめてもの姑の墓の雪をはき　靖弘
雪野原鳥は何處へとんでゆく　九天
雪降りに昨日の犬がついて來る　はるを
雪の夜馬舍はコトリともさせず　綬勾配
初雪の驛に並んだ人力車　幸捐
この雪へ子守は故郷を想ふらし　凡路
雪の朝働く人の靴の音　雀踊子

正月の番鮭の尾になでられる　萬樂
級長の辯當箱に鮭が見え　同
一ぴきの鮭を子供の數に切り　豆秋
辨當箱鮭のにほひの消えぬなり　翠陽
傘の禮鮭一切へ溢れてゐ　凡路
杉箸ではさむと鮭は下卑たもの　溪花坊
鮭燒いてやる子へ今朝の强い霜　小幸相
居候鮭のカロリー聞かされる　品子
木枯しをゐろりで聞きつ鮭を燒き　筑雨少
鮭に茶をかけて家賃を出しに立ち　溪花坊
アパートの今日も何處かで鮭を燒く　蘇堂
紅鮭の魅惑切り身に觸れて見る　都會人
(十)手紙添へ鮭が蘆屋へ屆けられ　詩與一
晝の鮭給仕にお茶を運ばせる　羊の介
口紅が鮭に馴れてる實社會　源坊
鮭の繩惣師の庭でほどかれる　よし美
一切の鮭に親子の箸がつき　かほる
水くさい鮭へバセリが添へてあり　徳三
鮭一疋出世の蔓へ贈られる　青踏
湯をかけてみるとさびしい鮭の色　桂三
到來の鮭へ今夜も飲まされる　せいち
天井へ吊した鮭の二週間　文久
(五)貧しさにあらず昨日と同じ鮭　不角
事務所では鮭を汚いものに見る　夕鐘
鮭はそもプロレタリヤのものなるぞ　孤舟
珍客へ鮭をすゝめて山の色　九天
鮭燒けば俺の生活の音がする　彩泡
(人)手を引いた兒と同じなる鮭の丈　明珠
(地)家計簿に僞りもなく鮭を買ふ　某人
(天)鮭ずらり日本は冬の色となり

(軸)天秤棒賣れぬ鮭とはなりにけり　新水

兼題　獨樂　綠雨選

破れ障子獨樂淋しく見つめられ　星湖
旅に來て珍らしき獨樂買ひ添へる　翠陽
獨樂廻し子供にかへる面白さ　夕鐘
ふところは獨樂で膨れて綴り方　亂耽
一錢を握つて獨樂を卷きなほし　天國
童心を映して獨樂のよく廻り　明暗子
人生のよろめき獨樂に似て淋し　青兒
だらしなく獨樂が止つた面白さ　閑路
寄席の獨樂舞臺一面なりひゞき　茶人
獨樂一つ据りのわるい玩具箱　溪花坊
(十)お彼岸の大阪辯は獨樂を賣り　はるを
獨樂廻す藝に生計を支へられ　悟堂
勉强を呼び出しにくる獨樂の連れ　春秋
獨樂の紐器用に子供卷いて見せ　呑々子
トラックに獨樂の壽命を奪はれて　正光
竹獨樂は夕餉の膳におどらせる　溪花坊
ゆるめては又引戻す寄席の獨樂　巨雷
春を待つこゝろに獨樂の影を見る　青踏
獨樂一つ廻すお寺のにぎやかさ　靖弘
人垣の中に竹獨樂うなつてゐ　坊茄子
(五)緣日のこゝから續く獨樂の音　鯛車
左利の子の獨樂見事舞ひ終り　山雨樓
コンクリのとこに集る獨樂廻し　秋無草
石一つ獨樂の姿勢を亂したり　鷄牛子
獨樂一つ雨の路地に忘れられ　正光
(人)捜索は獨樂を殘して引上げる　素月
(地)泣かされた子の獨樂があるアスフワルト　蝶の助
(天)言ひつけを獨樂に忘れて叱られる　佐太郎

兼題　煙　路郎選

軒店の煙は風が持つて行き　新水
煙幕の空に大阪さかえゆく　美奈子
わらばひの中で煙はまだのこり　靜江
人間史今日のけむりも空に消え　春秋
ぼくのゆめですたばこのけむりです　同
香煙の前に去就を決し兼ね　夢裡
好きな人の煙草のけむりこそばゆし　勝太郎
七三の煙出孫を怖がらせ　半疊
おゝ煙煙わたしは失業者　綴勾配
誰か居たらしく烟のまだ殘り　凡路
平和村時勢遲れの煙を上げ　綴勾配
氣輕さは煙のやうな話に來　坊茄子
けむりの中にでてるゆえんが黑い　安平
空ををふ煙の下で食ひはぐれ　鐵心
煙突の高さが淋し秋の空　春秋
生活の煙男の子が產れ　鮎美
弱いものいぢめをしてる煙也　同
煙るだけ煙らせてゐる共隊ぎ　柳次
叱られた顏とは見えぬ煙草なり　小松園
資本家を肥やす煙へくたびれる　綴勾配
(十)煙よ消えるな僕もさびしい　一六
親方へばかり焚火の煙流れ　正光
母つゝむけむもうれしい故郷の風呂　勝太郎
巡禮二人夕餉の煙見てゐたり　鐵心
煙草吸ひながら喫茶の審美學　亂耽
煙都大阪で裏切られてばかり　同
焚火して凡人共のけむたがり　九天
どう見ても赤字と見えぬ煙吐き　夕鐘
變屈が一人火鉢へ煙を立て　閑路

六甲も雪と元氣に誘はれる　萬樂
雪落ちを聞く人生の裏長屋　新市街
初雪や歌も詩もなしルンペンの　不角
(五)信心の母の姿へ今朝の雪　春秋
すぐやんだ雪がつめたい紀元節　九葉
童心が傘斷つた雪の街　桂三
海鼠賣る廓の暮を牡丹雪　默平
雪の朝母が小さく見へるなり　鮎美
(人)ひるからの雪を淋しく社につどめ　九葉
(地)十錢の酒にひたつた雪模樣　鯛車
(天)月給は昇らぬまゝへ雪だより　つと夢

席題　掛取　夕鐘選

返品の嵩が掛取りたぢろがせ　春光
愚痴られて掛取負けぬ愚痴となり　艸樂
勘定は勘定掛取り茶ものまず　不凡
掛取りは納得をした顏で立ち　東郊
無いものは無いと掛取嫌がらせ　呑行
掛取のゆるい鼻緒で十二月　小松園
笑ひ聲やんで掛取不安なり　水咲
掛取のまたセパードを賞め忘れ　角嵐
掛取の女將に褒める事多く　琴泉
掛取追拂ひ　秋月
集金の歸りは小僧いたはられ　紀太
オーバーで來た掛取は通される　蝶の助
掛を取る身をつくづくと考へる　嘲子
掛取へこの家にして金がなし　萬樂
マッチ借ることも掛取り心得る　九天
掛取りへ要らない恥もぶちまける　蘇堂
掛取へ凹んだ硯つきつける　木醉
掛取りに他所の景氣を聞かされる　靜路
掛取へ百圓札の十二月　艸樂
同病の話掛取膝をすえ　亂耽
掛取の敢て急がぬ好い儲け　明暗子
掛取りの十七の娘の無口なり　かほる
掛取りのめつそうもない顏を見る　鯛車
人情にふれて掛取取りそこね　八歩
(十)再三の掛取りどうやら地聲なり　十九緒
掛取りの來る日わざ〳〵宅に居る　鶴峯
あてがありそうに集金斷られ　源坊
掛取の嫌がる犬を飼ひ馴らし　伸柳
親の目にあまる掛取待たされる　新水
掛取は返事もかるくつりを出し　靜城
掛取へ掛取が聞く十二月　小宰相
掛取の暫時言譯聞きほれて　水咲
掛取へ小癪に猫の鈴が鳴り　角嵐
掛取へ九官鳥のだましよう　鮎美
(五)掛取の喜悅不渡りとは知らず　溪花坊
弱點を見せぬ掛取怖くなり　新水
掛取のまだ氣懸りな二三軒　悟堂
掛取になれてのうれんもらふなり　禮人
掛取がほろりと見せた人間味　久米雄
(人)よい年を迎へなはれと掛がより　日華
(地)掛取りは貰ふた聲になつて去に　變人
(天)掛取に薄茶を出してまごつかせ　青踏
(軸)掛取へ疲れた金を攤へたり　夕鐘

席題　丹前　翠夢選

丹前の膝が汚れる子煩惱　緩勾配
丹前で醉へば女房に甘へられ　同
丹前にふと隨員の間違はれ　鶴峯
丹前の膝を叩いて仲居にげ　變人
丹前へ妓がついてくる霧の夜　史呂
丹前になつて博士の女性觀　卜居
親方と言はれ丹前重く立ち　朗人
丹前をきて大臣の薪を割る　觀月
丹前を召せば社長もよい親父　紫石
丹前を着ても嚴めし髭なりき　秋月
丹前の兵隊風呂でよくめだち　坊茄子
丹前の袖にバットがあるばかり　喜山
丹前で來る朝風呂の儲けて居　朱朗
丹前で診る日曜の急患者　ひろし
(十)丹前よさらば日本をはなれる日　蝶の助
丹前で歩く夫を信じきり　朔風
丹前へあんたまかせの膝を寄せ　夕鐘
丹前の眞綿ちぎつて叱られる　木履
本膝を据えて丹前勝ち續け　明暗子
丹前の柄を女に見てもらひ　滿潮
兵たいがたんぜんをきるとよくにあう　九安
丹前になると旦那は笑ひ出し　平里十九
ニッポンの情緒、丹前短かすぎ　豆秋
丹前の袂にのぞいた五圓札　洋々
(五)丹前で女はすつぽな型になり　都會人
丹前を着て口錢に不服な夜　亂耽
白粉の拔けない丹前嗅いでみる　九厘坊
丹前で出た夜の酒を淋しがり　九葉
丹前の父球審をたのまれる　彩泡
(人)その口に乘つて丹前着てしまひ　春光
(地)獸心をかくす丹前ふと寒し　嘲子
(天)丹前着男心に隙が出來　某人

席題　鮭　新水選

御歲暮の鮭を市電に邪魔がられ　いさむ

氣のきいた煙、煙突からは出す　豆秋
(五)一人位使つて臭れそな煙吐き　凡路
三疊と二疊煙にしてしまひ　萬樂
月に見れば風呂屋の煙がほの白し　山雨樓
大阪の煙野心を捨てぬなり　九天
重患を見舞ふてくれば煙る河　亂耽
(人)片つぽの心は煙みつめてゐ　八歩
(地)輪に吹けば風の姿となつて散る　溪花坊
(天)五十年一抹の煙あげただけ　某人

會場の渦巻

忘年川柳大會席上

◇日本橋倶樂部下足係のオッサンの曰く「ウチの倶樂部が初まつて以來の大入だんが、座るとこがもうあれしまへんやらう、川柳てえらいもんだなあー」と、この超滿員に本家が驚嘆してゐた。

◇會場にはとても座れないので、同人、支部幹事は皆んな舞臺裏や樂屋に押しこまれた。この樂屋にも何んと五十人がつめられ、ここでも句會が出來そうな……。

◇三百七十餘の熱心な瞳をうけて、路郎先生は久濶に講演のやり甲斐を感じられたか、熱辯快辯のほとばしり出でて滿堂の拍手は急霰のごと……。

◇ものに動じない綠雨さんも寄贈の用意の端書が足りないので買增、買增、で、スタンプ押捺で手が痛くなるやら、スタンプの柄が折れるやら、それでもこの忙しさの嬉しさに滿面はほころびててんてこ舞ひ。

◇天地人、五客、十秀に賞品を出すのだから大變だ、里十九親分は舞臺の賞品の山に陣取つての總指揮はいよ〳〵出て大親分の貫錄が躍如……。

◇定刻までは賞品係りをやつてゐた與三郎君も、愈々開會を宣してより、嚴として司會者の椅子に坐り眼をかがやかしてその重任を果したのは天晴れ〳〵。

◇全沒や一句組に落ちたのは相當の數であるのに、汀柳君の長男安平君は九才の初陣、五句出句したのが俄然三句を拔かれ、十秀の賞品までも貰つたので大人連の自慢の鼻がペシヤンコになつた。

◇御免〳〵と人、人、人の中を丸々と重たい身體で泳ぎ廻つてゐる禿山はんの顏、額、頭はさても〳〵眞夏の樣に汗びつしより……。

忘年川柳大會賞品寄贈者芳名

●果卵の遊び五册、大川端二册、紙入一個、路郎師●優勝カップ、汀柳●短册十枚七組、便箋、道頓堀支部●金三圓、十三支部●短册掛五個、梅田支部●私製ハガキ七百五十枚、里十九●ネクタイ、八歩●朝日、十個、かほる●金二圓、京都支部●タヲル箱入一個、春光●齒ブラシ三打、大鐵支部●茶川柳半斤拾個、御池橋支部●蕭仙紙ハガキ五十枚二包、新水●川柳スタンプ、與三郎●文鎭二十五個萬よし●額二個、茉氏●鏡柱掛一個、今里支部●石鹼、三ケ入六箱、艸樂●鉛筆二百本、禿山●石鹼半打入八個、鶴町支部●花瓶、天王寺支部●ブドウ酒、九三會●バット五十個亂耽●官製ハガキ二百枚、綠雨●茶五包、時計一個、神戸支部●短册箱一個、年賀ハガキ五組、短册四組、玉造支部

(略敬稱、到着順)

各地柳壇

いのちあるかぎり創れ

理整・樂艸・柳汀・郎路

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月末日とす
五、投稿先は本社事務所

川柳雑誌社 市岡句會（大阪）

十一月十一日盟友静太の死を聞く、哀しみに絶えず過ぐる日を思ひ静太を悼む晩秋の雨も天地と共に泣くか。　與三郎報

十一月十五日夜　於カナメ食堂

静太追悼吟

席題　雀　　共選　史呂　選

コスモスの花へ　雀が腹を見せ　並木
落葉する朝が淋し兒と雀　角嵐
親しめば雀の世界忙しい　蝶の助
惚れられてゐる娘が雀見てゐます　與三郎
せめてもの雀に話しかける窓　汀柳
君の死の今朝へ雀が下りてゐる　春秋
さびしさは雀の來ない庭となり　徳三
一羽二羽雀へひろい空の色　同
軒に來る雀静太の影となり　春光
雀一羽告別式に遠く居る　三四郎
（軸）雀ら、わたしに父がありませぬ　史呂

席題　雀　　共選　與三郎　選

雀、雀、今日は何所やら雨の音　一六
せめてもの雀に話しかける窓　汀柳
雀一羽告別式に遠く居る　三四郎
戀に生き雀の樣子なつかしみ　並木
さびしさは雀のこない庭となり　徳三
君の死の今朝へ雀が下りてゐる　春秋
雀又今日を悲んでか鳴かず　艸樂
やかましく雀の世界に何かあり　同
出養生雀を追はず陽にひたる　蝶之助
（軸）雀等の世界に自殺はなかりける　與三郎

席題　鏡臺　　春秋　選

市場行きにも姿見のいる女　不風
母親の使う鏡臺　時代物　奇兵
鏡臺も風呂敷で來た二た昔　禿山
デパートの賣場で鏡臺見直され　一六
鏡臺へ無事な顔がひげを剃り　玉虫
鏡臺へ尼僧女の顔をする　蝶の助
鏡臺は妻のきげんを直すとこ　角嵐
（人）鏡臺がずらり旦那の噂する　汀柳
（同）鏡臺へほゝゑむ心ゆたかなり　角嵐
（地）鏡臺が椽先にあり子が二人　かほる
（天）湯歸りへすぐ鏡掛けはねられる　史呂
（軸）鏡臺の中が淋しい未亡人　春秋

席題　前夜　　かほる　選

戀もよし希望をかけてその前夜　並木
明日歸る息子へ叔父が宿りがけ　蝶の助
一直線に前夜のネオンを見て通り　三四郎

仲裁は前夜の事に觸れさせず　汀柳
結婚の前夜うつかり風邪をひき　史呂
歸郷して前夜の續きせがまれる　禿山
番臺へ休みの前夜だけの客　春光

兼題　度胸　汀柳選

人一人殺した度胸をもてあまし　艸樂
幼な兒の度胸に破れるシャボン玉　角嵐
女から怖く度胸をきかされる　德三
ピンとキリ、度胸ある奴ない男　與三郎
小男の度胸殺氣の中にみて　春秋
米屋への妻の度胸を奥で聽き　春光
片肌をぬいだ度胸が風邪を引き　與三郎
醉ざめへケチな度胸がくづれかけ　德三
强盜へはつきり坐る長襦袢　春秋
あの時の度胸が惜しい相場表　蝶の助

兼題　泣聲　春光選

家の子の泣聲妻は聞きわける　一六
事の譯聞かれて泣聲高くなり　星湖
見つめてる碁盤へ泣き聲聞えて來　里十九
泣聲を聞かしてラヂオドラマすみ　德三
一錢をせしめる自信派手に泣き　蝶の助
子が泣いて立見席からどなられる　艸樂
泣き聲へくるりと廻るチンドン屋　角嵐
泣聲を子守は强くゆすり上げ　春秋

席題　星　五選

星一つ三つ明日を喜ばせ　艸樂
星ほめて愛の言葉が切り出せず　同
ルンペンが生欠伸する星の下　史呂
星一ぱい寫して分壞地の水たまり　三四郎
北斗星奇蹟を少年信じきり　與三郎
冷える夜の星がきれいなコップ酒　德三
絶壁の道を曲れば星明り　汀柳

川柳雜誌社　**今治句會**（愛媛）

十月二十四日　於　貯蓄銀行

窪田而笑子追悼會

兼題　柘榴　曉童選

繩飛へ柘榴は落ちて來そうなり　宵明
まゝごとへ柘榴のご飯出來てくる　紫朗
訪れる人もまばらに柘榴うれ　虹乃麿
柘榴先づ鬼子母神へと祖母が云ひ　柳石
しもた家が續き柘榴が熟れてゐる　宵明
校庭の柘榴誘惑する如し　一風
天高し柘榴大きく口をあけ　心府
柘榴一ツ机の上に靜かなり　同
（軸）柘榴は熟れた稻ははらんだ　曉童

兼題　反感　小樓選

反感はみんな及ばぬ事ばかり　文庫
反感の眼へ土瓶あちらむき　柳石
反感をみんな並べてコップ酒　一風
かまきりの反感を買ふ日向ぼこ　紫陽
（佳）反感も日記へ書けば奇麗なり　曉童
〃）反感を女は斜に座るなり　同
〃）反感がある白足袋は裏をみせ　同
〃）反感へ一役買つた下駄の音　柳石
〃）母の無い子の反感は父が知り　紫朗
（軸）反感之今夜は星もみえぬなり　山樓

兼題　爛ざめ　一風選

かんざめへ新郎新婦見當らず　宵明
爛ざめを數へて歸る阿呆らしさ　同
爛ざめへ口說の庭敷掌を鳴らし　虹の麿
（佳）爛ざめを末席勿體なくうける　文庫
（佳）爛ざめになつたを運ぶ使丁部屋　宵明
（佳）女房の智惠で爛ざめ使はれる　虹の麿
（佳）爛ざめのはけ口馴れた口が來る　柳石
（佳）爛ざめへ世話女房の型になり　曉童
（軸）爛ざめへあきらめ切つた妓が坐り　一風

兼題　追悼句　文金　宵明選

文金が乘つて車中の眼を奪ひ　一風
うつむいて文金男を信じ切り　紫朗
とされて暮せ文金高島田　虹の麿
文金の船に車に疲れはて　曉童
文金が恥しくゐるポッポ船　山樓
（五）諦めて結ふた文金とは見えず　心府
（五）文金の吾は女と生れたり　虹の麿
（五）文金へ大輪の菊咲きほこり　心府
（五）文金の欲はぐつすり寢たいだけ　曉童
（五）文金の炬燵の布團燃えてゐる　柳石
（人）文金はあらまあ〳〵と見直され　心府
（地）東海の國文金の三ヶ日　柳石
（天）諦めて嫁く文金のすばらしさ　一風
（軸）文金のうち御馳走はあごで喰ひ　宵明

席題　風船　心府選

燃え上る火のようにゐる風船屋　紫陽
遊廓の眞晝風船鳴つてゐる　虹の麿
風船屋故郷の秋をふと思ひ　一風
風船の破けた音なり秋祭り　紫陽
（佳）風船屋ます晴〳〵れる空へ賣る　曉童

(佳)風船はお寺の屋根を越えました　虹の麿
(軸)風船に子供の夢は空を飛び心府

席題　煉　炭　　石崎柳石選

煉炭でつけるタバコの鼻が燃え　宵明
煉炭の穴を懐したもの思ひ　紫陽
(人)亮香の火箸煉炭突き通ほし　一風
(地)煉炭へ戀のざんげの夜が深い　曉童
(天)逢えぬ夜の煉炭むごくくすれはて　宵明
(軸)煉炭の熱を知つてる穴の數　石

松江市公會堂句會（島根）

於　なにわ館　　山川兒報

兼題　角　力　　比呂志選

村角力地主の次男また負けた　天痴人
沸騰へいとスローモーションの土俵入　山川兒
やせたのが行司になつて草角力　笑鬼
櫓太鼓に褌堅くしめ直し　祥月
農民は盲目ですよ、花角力　勁一郎

兼題　寶　　巷二選

家寶を納めた藏の鍵錆びる　比呂志
千鳥城國寶となり、秋近し　幸明
寶石へ令嬢の瞳が負けてゐる　庄介
はした金持つて寶石部をのぞき　登美也
太陽のとゞかぬとこにある國寶　庄介
國寶の神祕を包む杉並木　柳人
ダイヤモンド三面記事にぬすまれる　祥月

席題　ガール　　夢迷選

エアガール下界に戀の棄てどころ　天痴人
ハイヒールこれもガールと呼ぶ一人　巷二

席題　影　　柳人選

邪心ふと己の影におのののきぬ　莞路
憂き日なり心に影の多かりき　同
二人の影を亂して蛙飛び　笑鬼
悲しい僕に影がついて來る　讓二
影長く〳〵求職つかれ果て　巷二
貨車の影は仲仕のオアシス　勁一郎

席題　欠　伸　　天痴人選

キャンピング空を仰いで欠伸する　祥月
すや〳〵と寢て看病欠伸が出　登美也
欠伸噛みころして客を醉はせてる　比呂志
勁一郎選

席題　灰

憂きものに灰のくづるゝ音がする　莞路
流れ星灰になる日を考へる　山川兒
灰皿が綺麗で今日も客がない　登美也
待たされてゐる灰皿が白すぎる　巷二
灰皿に僕の思想が變つて來　同

席題　失　戀　　互選

失戀を嗤つて行かうスクラムで　山川兒
戀やぶれ花瓶の花の枯れてあり　庄介
失戀の男は足を曲げて寢る　巷二
失戀は今日の家庭にしてしまひ　淞南
戀の解消はウオッカと眠る　勁一郎

川柳雜誌社

御池橋例會（大阪）

席題　素　見　　互選

素見は夜店のしまひ見て戻り　青兒
素見が行つて植木屋水をまき　巨雷
素見もよし退屈な雨の店舗　德三
醉醒めたとこで素見歸るなり　史呂
小糟雨素見客が吸込まれ　同
素見がたどんくずしてかへるなり　角嵐
素見が娘の年も聞いて出る　同

兼題　制　度　　かほる選

資本家の制度煙突へ登らせる　品子
重役は制度だからとおさへつけ　浩林
一札を入れて制度の念を押し　夢裡
寄宿舍の制度若さを無視される　星湖
煙突の上で制度を變へといひ　同
生醉にチップ制度をとがめられ　角嵐

席題　速　度　　みつる選

急テンポゆがめた戀の道行よ　夢裡
地下鐵の速度が怖い故郷の母　角嵐
衝突の豫感ひらめく急速度　興三郎
スピードの風に揉まれて牛を引き　青兒
モータアの速度へ女工の指が合ひ　かほる
御堂筋速度のにぶい乳母車　史呂
(佳)スピードへ富士は變らぬ雪を積み　興三郎
(同)急カーブ速度苦るしい音を立て　巨雷
(同)フキルムの速度ホクロが又寫り　かほる

席題　家　風　　興三郎選

(佳)御寮樓淺黄紋付連れて出る　青兒
(同)お目見得は家風を寒むく聞かされる　角嵐
(人)白足袋を履けば家風も嬉しくて　かほる
(地)父死んで家風にそむくピヤノなど　角嵐
(天)旅をして家風と同じ箸を持ち　かほる

川柳雜誌社
大鐵支部

畔柳社大會（大阪）

十月十日　於　大鐵倶樂部大廣間

句作の秋の夜の空、いよ〳〵高く澄み切つて、川柳への思慕ます〳〵募るわが畔柳社秋季大會の幕はいとも盛大に切つて落された。本社より路郎師・編輯長汀柳氏をはじめ、同人數氏の御出席あり、各方面の珍しき顏觸れも交じつてまさに當社近來の豪華版。路郎師の御講演に同じ職業關係にある人々のこうした趣味の集ひに依つて釀し出される雰圍氣こそは實に川柳の賜である。川柳の持つ獨特の美しい狀景である。と高調せられ、柳道精進により一層力强き御激勵を御與へ下すつた。九天の閉會の辭に、十時。名殘惜くも散會。

（久米雄記）

兼題　信　用　　路郎選

信用で借るにお世辭が長すぎる　久米雄
信用があるか無口でよくはやり　美濃路
これ程の金に連帶者を並べ　喜山
やま張らぬ男田舍の娘を買ひ　艸樂
信用は親父の名前それだけか　秀太
品質と別にマークの持つ魅力　一峰
信用されて會計係とは淋しみつる
信用が大阪の店京の店　綠雨
むつつりが意外に信用されてゐる　天秋
信用へすまぬ道樂おぼへたり　琴泉
株式の募集名士を書きつらね　明坊
麻雀で信用さつぱりわやになり　與三郎
色さめたのれんが店を持つてゐる　英夫
親の名で信用させて金を借り　呑行
信用を失くして二人幸福に　角嵐
信用をされる頃から禿げはじめ　史呂
荒天へ船長の腕信じ切り　一峰
信用はしてる〳〵で斷はられ　杏林
（人）店は子に委せて伊豆の除夜を　某人
（同）信用は過渡期格子を變へて見よ　木履
（同）鉛筆は薄く判取すまされる　琴泉
（地）一センの客に信用されてゐる　牧人
（同）此の店の繁昌振りは店の品　美濃路
（天）信用をつなぐ電話があるばかり　水客
（軸）信用のおけぬ男に誰がした　路郎

兼題　名　案　　汀柳選

名案をあたまで否決する主人　みつる
、そりや名案だが五十年先のこと　琴泉
名案があり碁敵の庭をほめ　九天
名案が浮かばず幹事委される　呑行
名案を寢床の中へ置き忘れ　英夫
いゝ思案うかんで猪口を持ちかへる　水客
親方の圖星女房の智惠まじり　與三郎
名案やなと課長はうなづけり　綠雨
いつも屋を名案のないまゝに出る　某人
名案へ思索の秋の煙草盆　木履
名案は美しい妓にのみこませ　艸樂
名案のいま法律に觸れんとす　角嵐
呑む話だけは名案よく浮び　秋生
（五）名案がふつと浮んだ秋の雲　久米雄
（同）名案をしぼる露臺に風があり　木履
（同）名案を越す名案を持ち出され　天秋
（同）名案は空き瓶賣つて呑むはなし　角嵐
（同）名案が浮いて冷めたい茶をすゝり　同
（人）名案に乾杯！紳士マダム達　鮎美
（地）名案は結局嘘をつくと決め　天秋
（天）鶴のこえはい名案でございます　英夫
（軸）名案に一座はほつと息をつき　汀柳

兼題　省　電　　艸樂選

省電の横に機關車熟くゐる　牧人
省電を芦屋で降りたハイヒール　呑行
電化した省線澄んだ風を切り　牧人
皆を巢へ返す省電陽に染まり　某人
省電の風こゝろよく趣味雜誌　亂耽
（人）働きに行く身へ省電氣持好し　呑行
（地）省電の戀は明石の渚ふむ　琴泉
（天）牌の疲れへ省電を待つ夜　亂耽
（軸）省電は汽車の煙を浴びて着き　艸樂

席題　屆け先　　綠雨選

屆け先皆まで聞かず子は走り　呑行
屆け先丁度花嫁ついたとこ　紫香
呼鈴をやつと見付けた屆け先　史呂
屆け先女名前を小さく云ひ　一峰
屆け先いよ〳〵夕闇せまるなり　木履
屆け先ハツキリと云ふ女事務　喜山
屆け先幹事のみこみ顏でゐる　九天
煙草屋を目じるしにする屆け先　秀太
（佳）屆け先きつちりさめ押してくれ　鮎美
（同）セパードが二疋も寢てる屆け先　角嵐
（同）屆け先ふつと昔の名をおもひ　水客
（同）屆け先判をさがすにひまが要り　牧人
（同）屆け先子に書かしてるうす暗さ　美濃路

席題　足　許　　亂　耽　選

女學校を出た足許も春のもの　九天
足許へ紙屑秋も末と知れ　某人
待呆うけ足許からの秋の風　水客
足　許に女女の誇あり　久米雄
足許をスポットライト追ひかける　艸樂
足許を見るひまがなし交叉點　牧人
足許の機嫌明日は日曜日　木履
歩き出す子へ七輪を除けて置き　美濃路
足許が暗い船場の十二月　角嵐

席題　三　人　　鮎　美　選

呑みに出る三人の影おもしろい　與三郎
三人が三人寢てゝ盗られてる　紫香
寶塚三人並ぶ席がなく　史呂
三人の子の父であり詫びてゐる　美濃路
ついてくる月へ三人影があり　史呂
(佳)三人の氣持おかみは知つてをり　一峰

友　人　出　產

(同)今日からは三人で吸ふ風を入れ　久米雄
(同)天然の美へ三人の氣が揃ひ　史呂
(軸)三人の自由を奪ふ秋の雲　鮎美
(同)三人へお尻をむけた雨蛙　同

席題　目　配　せ　　與三郎選

目配せをして賣り出しの店を出る　美濃路
目配せを無視して夫醉ふて來る　某人
目配せへ女給のお世辭變つて來　琴泉
目配せへ氣付かぬ風で靴を穿き　水客
戀人が來た目配せも君と僕　九天
(人)目配せをして親分は懷手　呑行
(地)目配せへ本家が來てるなと思ひ　史呂
(天)目配せで三々九度も無事に濟み　木履
(軸)目配せのおじけた色を感じられ　與三郎

席題　借　電　話　　九天選

憤滿の捨場が悪い借電話　天秋
借電話下駄を飛ばして上るなり　艸樂
借電話飯がこげてるなと思ひ　某人
面會の上で決めます借電話　琴泉
好きな妓がきて借電話してくれる　鮎美
犬の子の毛色をほめる借電話　久米雄
借電話お客らしいも見てかへり　牧人
借電話儲け話を聞かされる　美濃路
坊つちやんの頭をなでゝ借電話　史呂
(佳)借電話丁稚の用も云ふておき　鮎美
(同)借電話二錢の釣をおいて來る　みつる
(同)借電話序に下駄を直して出　某人
(同)借電話裏子の顏を見て戻り　與三郎

席題　末　席　　某人選

末席でゆつくり話す姉藝者　水客
此處からは末席といふ敷居越　與三郎
末席で殘つた綠茶意識する　木履
末席は直くに使はれそうに居り　艸樂
(人)末席は襖の銀に映えてゐる　鮎美
(地)醉ひそうになつて末席考へる　角嵐
(天)末席にカオール少し所望され　同
(軸)ふと雨が聞こえ末席まだ醉へず　某人

川柳雜誌社　**鶴町句會**　(大阪)

十月十六日　於　變人居　加藤ライト報

席題　埋立地、道、景良、ケーキ

子に凧の糸を持たした埋立地　ライト
埋立地朝鮮小屋が二つ三つ　よし美
埋立地酎のつれたを語るなり　變人
腕白の野球に暮れる埋立地　同
埋立地朝鮮人の物想ひ　同
大阪の話がつゞく埋立地　岩石
逢引へたゞ廣々と埋立地　同
驛からの道は親子の久しぶり　變人
歸り道鎭守の森が見えはじめ　よし美
ハイキング道案内も醉ふてゐる　白峯
近道を指して嬉しいアクセント　同
たそがれが今來た道を追つて來る　岩石
失業をしても矢張り佳い景色　白峯
もずの聲松もたわゝの雪景色　よし美
景色だけ變らぬまゝに迎へられ　同
この景色こゝらで本心きくと決め　變人
霧が有りまだほめたらぬ峠茶屋　岩石
喫茶店ケーキの賣れるリーグ戰　變人
家出した話ケーキへもつれてゐ　白峯

阪大川柳會例會　(大阪)

丸島利生報路郎選

その當座畫は淋しい箸をとり　左柳
攝河泉一畔に畫の飯を食ひ　正甫
巡禮が畫をとつてる花の土堤　若女
畫飯が出來て坊やを下女がとり　淺女
畫飯が三時になつた美紐院　栞
ネクタイ屋ランチタイムをねらつて來　同

新婚のやじられてゐる畫の菜　柳秀
石一つ入れて庭師は畫にする　同芳一
(人)十數年アルミ辨當の覇氣もなし　千秋
(地)紹介狀畫飯だけで追はれたり　芳一
(天)土の手で平和な畫の輪に座り

兼題　退院　路郎選

退院を喜こんでくれ泣いてくれ　柳秀
退院を報らす白銅渡される氷炭　芳一
退院といふことにして醫者をかへ　芳一
退院へ母は着物の柄を選り若女
退院へ隣りのアーチ腹立たず方正
見違へる化粧で退院禮に來る洗塵
夢のやうだと退院くり返し栞
チョコナンと退院の子が座つてゐる路生
退院の足袋はけば皺よつてゐる同
退院へ婦長はうまい世辭を云ひ柳秀
退院へ又イラッシャイとも言へず芳一
退院の櫛に手ごたいないを知り利生
(人)退院の昔はものを思はざり栞
(地)退院を樂しみながら死んじまひ洗塵
(天)退院を白衣の一人よろこばず同

雜吟　路郎選

信じられない父の死へ手を合はせ　千秋
幹ひに人が病むので醫者が喰へ　柳秀
手のふるへ思へば長くわずらへり　若女
君とも暇かと肩書ない男たけを
サイナアと云ふ金談はまとまらず　路生
こいさんにない〳〵惚れて早く起き　同
(秀)默つて聞けば自慢のまだつゞき　若女

席題　垢　路郎選

垢ぬけがしてると餘興たのまれる　湧三
耳垢を取るのが好きな二號なり　橙舍
お手垢が懷しいとかたみ貰ひに來　洗塵
垢のついた枕が二つ並んでゐ　路生
垢にまみれて地下へ潛行し　同
退院の垢を嬉しい手で流し　たけを
首筋の垢に先生如才なし　同
首筋の垢を戀人見付けられ　同
(人)水垢を喰らつて鮎の尊けれ　青一路
(地)襟垢に乙女の春を感じけり　橙舍
(天)おちよやんの襟を女將は叱つゞき　柳秀
(軸)襟垢をためて戀でもあるまいか　路郎

川柳雜誌社松江支部 五周年記念川柳大會

（島根）

十一月三日　於　松江市公會堂

菊花妍を競ひて壽ぐ明治節の佳き日！松江支部には五年目の誕生日である。會場には中央に日の丸の國旗を吊して佳節を新調せる支部盃毅然として輝く。出席者四十五名といふ松江柳界新記錄を作り將來への飛躍の礎石成る支部盃は巷二君獲得。

記念募集　日本　路郎選

日本に歸化する愛の美しさ　葉光
日本の育ち柳の下で逢ひ　山川兒
日本にゐて恥を知る事多き　京斗
日本晴一直線に天皇旗　大朗
感激を日本人は酒にする　柳人
日本の南の果に鍬を持ち　祥月
君ヶ代に今日日本の旗日なり　二本松
落下傘日本の國は山ばかり　淞南
日本を故郷にしての隊する　比呂志
居留地の櫻日本は春なりき　莞路
療養所こゝも日本の陽が當り　同
錆ついた日本刀と思ふなよ　庄介
肉彈へ日本人は見直され　同
號外は戰爭菊が匂つてる　同
(秀)ミス日本浮世繪の髮で撮り　巷二

記念募集　松　あん馬選

夕燒へ松は自然の色を投げ　祥月
ふるさとを伸で通る松並木　葉光
松葉焚く匂ひが泌みたトラピスト　莞路
松の芽の伸たを知つた病上り　靜二
霧晴れて松の青さにぶつゝかり　梟人
白雲をのせて松籟靜かなり　同
(人)植木屋は松の個性を考へず　柳人
(地)キャンプ村寢る頃松が騷ぐなり　二本松
(天)松並木長く續いて里歸り　笑朗

記念募集　手　田中都之介選

(五)開札に手と手の動き錢の音　三吉樓
(同)手管とは知らず心は輕氣球　鐵扇
(同)胸深く手を組み戀は云へぬもの　朴泉
(同)サービスに手相を見せる狹い椅子　葉光
(同)朝の淋しき天窓に手をのべる　讓二
(人)百圓になる手五十錢になる手　巷二
(地)光り來ぬ部屋で手相見てゐる　夢迷
(天)世の中を話す男の手が荒れて　巷二

兼題　嵐　　天痴人選

嵐の夜火鉢かこんで靜かなり　雨舟
嵐の夜女の眉の美しく　玉葉女
農民へ二百十日のタイラント　笑鬼
對伊宣言嵐の中の媚　梟人
嵐そも土龍に子守唄なるぞ　夢迷
(人)眞劍な顏で嵐へ戻つて來　大鳥居
(地)嵐が逃げてから人間の虛勢　夢迷
(天)四捨五入しろと嵐が吼ゆるなり　都之介

兼題　ゴールイン　　巷二選

熱狂の秋風押してゴールイン　好郎
人生のゴールイン白髮と皺と　天痴人
世の中は裏表があるゴールイン　莞路
影みんな流線型でゴールイン　專太郎
倫落の女が辿るゴールイン　順風
(人)愛のゴールイン長女が生れ　天痴人
(地)テープの觸覺青空へ双手を擧げる　星斗
(天)棺桶に乘り生活のゴールイン　天痴人

兼題　流れ　　美笑選

別れともない瞳と合へり流れ星　巷二
いさかひを流せば心臟が疲れ　比呂志
雲は靜かに流れる俺の身を想ふ　專太郎
濁流の心の醉が醒めかゝり　莞路
(人)大根洗ふ音へ流れが寒く暮れ　淞南
(地)世の中の流れを語る總入歯　山川兒
(天)流れ〳〵て人氣ある女給　大鳥

席題　三味線　　莞路選

(人)撥の傷やつと勸進帖が彈け　梟人
(地)丈よりも長い三味なり習初め　天界
(天)三味線は金の流れる音がする　巷二

席題　花形　　山川兒選

(人)シーズンも終り花形ホットする　朴泉
(同)菊五郎なぐられそうな人氣なり　讓二
(地)影一つない花形のタキシード　巷二
(天)花形にされサラリーが不足する　天痴人

席題　狼狽　　朴泉選

狼狽をすかさず新聞記者は突き　巷二
コップの水が溢れてこぼれた　庄介
醉客へ女あわてゝ逃げまどひ　凡愚
(秀)狼狽た瞳に青空が阿呆らしい　星斗

席題　眼鏡　　二本松選

(人)特徵をくつきり見せて鼻眼鏡　凡愚
(地)眼鏡越し今の言葉に異議があり　靜二
(天)溫かき好意が眼鏡曇らせる　星斗

席題　マッチ　　大鳥選

(秀)マッチ箱女房の口が過ぎるなり　蛟河
(同)興もなくマッチの光眼に泌みる　節夫
(同)後悔の袂に朝のマッチ箱　玉葉女

席題　裏面　　蛟河選

(人)その裏面金の力が押へたり　天痴人
(地)同情の樣に裏面が探られる　節夫
(天)贈賄を凝乎見て居る蜘蛛一匹　宵路

川柳雜誌社大鐵支部

畔柳社吟行句會（大阪）

十一月三日、菊薫る明治節の拜賀式を終へた一行、天王寺驛に帥樂、豆秋兩氏を加へて十二名。颯爽として秋の陽の中へ溶け込んで二上山吟行ハイキングの途に上る。

趣味と健康との二重奏を到る處で謳歌すれば、澄み切つた秋の大氣の中を、程よく色づいた紅葉・柿、黃金色の稻等々が氣持よく汗ばんだ柳人の眼に映り變つて行く。

十粁のコースを難なく終へて大鐵喜志驛着午後五時。意義ある一日の行程を終つた。

（久米雄記）

兼題　信心　　帥樂選

黑燒も獸目神さまへ手を合はし　豆秋
手を合はす刹那神秘の人となり　久出雄
額けば社殿は秋の風の中　水客
信心のきざはじからの汗をふき　九天
(人)信心の眞正面へ旭が昇り　喜山
(地)手は合はす下で鳴きやむ秋の虫　久米雄
(天)柏手の空にしみいる朝を起き　水客
(軸)信心の道にコスモスこけかゝり　帥樂

席題　ハイキング雜感　　豆秋選

ハイキング牛車が通る道を開け　久米雄
父と子のリュックサックの鈴が鳴り　水客
葛城が迫る二上山の晴れ　久米雄
玉砂利の音が大きい御陵道　喜山
山高く高田の町の小さく見え　一峰
赤松の坂が續いて陽がかげる　水客
赤松の林に三味の一、二ちよう　同
水筒はまた〳〵重いハイキング　久米雄
ハイキング御陵の印を賴まれる　喜山
山彥で友の聲知るハイキング　久米雄

トラックは三荷積んでる大安日　喜山
(佳)砂茸が出そうに繩が古びてゐ　同
(同)頂上で村の國旗の目にとまり　久米雄
(同)ハイキング清水に湧り続すなり　蚺樂
(同)辨當を開けば池の水蒼し　水客
(同)ハイキング一家總出をうらやゐる　九天
(同)子を連れたハイクへ石の多い道　一峰
(同)甘酒の接待に蔦わをかいて　水客
(軸)二三河いつてつりがね草は捨て　豆秋

川柳雜誌社
梅田支部　**觀菊句莚會**（大阪）

十一月五日　於　增元翠陽居

本社より蚺樂かほる兩氏の御來援ありて、花薫る居主のよろこびは言ふまでもなく柳味にひたる席上「歌の心」と題されて蚺樂氏のまごゝろのみゆる講演あり「植物學より見たる菊」の獨特なる御說講演ありたり。兼題席題の披講ののち御存知かほるさんの夕暮れ、支部同人の自己宣傳などありてすき燒に秋雨の夜を美酒に醉ひて十一時散會せり。（鮎）

席題　鏡　互　選

小使と櫛と鏡とあるポケッ　かほる
變裝してからも一度見る　大嶽
鏡丸髷でニット鏡に笑ふて見　靜波
花嫁の鏡にうつる灯にうつる　鮎美
鏡を拭いて晝の娼婦の小原節　觀月

席題　子守　觀月選

風呂歸り子守ちよつぴりぬつてゐる　鮎美
花道へ子守がはいり太棹が鳴り　かほる
夕燒けを背いつぱいに子守去ぬ　卜居
流行歌上手に夫子をあやし　靜波
秋風に子守の顏がさびしそう　朔風
せかまれて子守一錢たけはずみ　蚺樂
(佳)結婚といふのが子守に解つてき　かほる
(同)橋越へて子守が買ふた風車　鮎美
(人)子守ふと母があつたらなと思ひ　靜波
(地)子を抱げば目につくものが唄になり　蚺樂
(天)片親の子守へ月がまんまるい　鮎美
(軸)子守連男のとこへやつて來る　觀月

兼題　る止めの句　鮎美選

沈默の二人は空を見つめてる　翠陽
交叉點髭と髭とが叱られる　明鐘
折角のプランに雨が降つてゐる　正風
味噌汁へみんな遂者な顏でゐる　白菊
子が出來て人生觀が變つてる　朔風

忠犬ハチ公

御主人は死んだと知らず待つてゐる　大嶽
賣ひ風呂辛抱しながらきばつてる　同
初詣りひつきりなしに鈴が鳴る　觀月
伊右衞門の樣な姿で釣りに出る　かほる
金屏風ひろげ淋しい心なる　同
(人)金がないのを眞面目だなんてほめられる　靜波
(地)老の影淋しく蓮の亂れける　美津生
(天)面會の嫁の話しもして歸る　翠陽
(軸)にんげんの閻殿る蹴る生き伸びる　鮎美

兼題　頬かむり　かほる選

村長へ揃うてとつた頬かむり　朔風
頬かむりところ〳〵に朝となり　白菊
見越の松の下なる頬かむり　遊歩
頬かむりしたまゝ煙草の火をかりる　美津生
頬かむりみんなが知つてゐる科　白菊
頬かむり君かいなと覗かれる　蚺樂
(人)ほうかむり萩咲く庭を廻るなり　鮎美
(地)一匹も釣れずに歸る頬かむり　白菊
(天)二度目には咲呵るきつたほうかむり　遊歩

兼題　菊　蚺樂選

菊咲いて吾に平和な日が續き　正風
菊折つた子を叱つてる夕まぐれ　明鐘
道樂を菊に移して平和なり　美津生
投げいれの菊蒼白し未亡人　翠陽
園藝の趣味ケンガイの置きどころ　白菊
仲人が來る日の床に菊を活け　遊歩
寒菊に息が通ふた四疊半　朔風
水害の荒地に咲いた殘り菊　同
日本の領土こゝにも菊の花　靜波
菊買ふて夜店まつすぐ歸るなり　同
(人)一鉢は貰つてゆく氣の菊をほめ　同
(地)結納の袱紗の菊のまつさかり　卜居
(天)矢絣の女中を待たす菊の庭　鮎美
(軸)菊咲いてお勝手ずつと通される　蚺樂

川柳雜誌社　**今治句會**（愛媛）

十一月七日　於　伊豫相互支店樓上宵明報

兼題　立話　文庫選

立話バス二三臺舞やり過し　宵明
おでん屋へ續き持ち込む立話　曉童
立話早い話が飲む話　同

立話子供に袂ひつぱられ紫朗
立話落ち合ふ先は例のとこ曉童
行く人の横眼をうけて立話心府
立話女のはなしまだつきず同
夕燒を背に氣忙しい立話藤生
立話背の子二三度ゆすぶられ宵明
立話君だけと云ふ癖が出る柳石
立話宣傳ビラを握らされ宵明
(軸)自轉車に顏覗かれる立話文庫

兼題 慈善鍋 心府選

慈善鍋
慈善鍋子供も一錢入れて行き浪聲
強要のやうに据えてる慈善鍋文庫
懷手流し目に見る慈善鍋文庫
慈善鍋舞妓は赤い財布から宵明
(佳)惠む身にどうやら成つた慈善鍋藤生
(同)慈善鍋一層冬を寒くさせ宵明
(同)慈善鍋醉ふてる唄へしまいかけ曉童

兼題 金槌 一風選

金槌へもう打つとこはないかいな宵明
轉宅へさて金槌はどこへいた心府
金槌の柄を叩き込み叩き込み仙海
建設は金槌にある新世帶虻の磨
棺と打つこの金槌に咎はなし同
(佳)金槌のもう諦めた釘のそれ柳石
(同)金槌にまだ用のある大掃除紫朗
(同)金槌を持つて家主がやつて來る宵明
(感)金槌の先で屆かぬ油虫曉童

席題 代表 藤生選

代表はノーネクタイの面え文庫
人のいゝのが代表におされたり心府
熱誠の渦に代表小さくみ柳石
代表の顏が見えない旗の數同
代表は悲壯な顏で寫される一風
代表といふに案外やさ男宵明
代表と云ふ肩巾でやつてくる同
代表はコーヒー飲もうともしない藤生
祖國今代表の聲枯れてくる柳石
代表へ電波は海を山を越え心府
代表の髮は伸ばせるだけ伸ばし宵明
代表の中の一人は松葉杖同
社長は敷島代表はバット同
(軸)今日と云ふ日の代表の身の光り藤生

席題 伽噺「桃太郎」 曉童選

桃太郎その後の話聞かぬなり心府
雉猿も團子一つでつり出され歩人
鬼ヶ嶋今は平和な遊覽地浪聲
桃太郎披露の宴に猿芝居宵明
鬼の首積んで車が狹くなり紫朗
桃太郎桃を喰ふなと猿に云ひ虻の磨
(人)桃太郎勝利の悲哀ふと感じ柳石
(地)桃太郎夕燒空へ母を繞ひ同
(天)桃太郎お乳の味をフト思ひ同
(軸)桃太郎勝つと俄かに腹が減り曉童

席題 濕布 宵明選

濕布して欠勤をした理由なり浪聲
女事務いつも濕布をしてるなり一風
聲變り濕布を變な目でみられ柳石
濕布して女は逢ひに來てくれる曉童
(佳)名醫唯濕布をしろと云つたきり虻の磨
(同)咽喉卷いて窓の硝子をぬぐひけり心府
(軸)濕布して女とことんまで落ちる宵明

席題 小切手 柳石選

内入と云ふ小切手を小さく折り曉童
小切手へ代表の眼はおさまらず宵明
小切手に貞操料とは書いてなし心府
小切手へ秘書あの口と心得る宵明
小切手の印が少さい女戸主曉童
(軸)小切手を切る手の白さ凝視され柳石

川柳雜誌社 **玉造句會** (大阪)

十一月十日 於 不動院 清水友帆報

席題 坂 互選

朗かなあだ名をつけて坂を下り かほる
ヤレ〳〵と坂を上つた母の腰みつる
三輪車電車の通る坂を除け角嵐
坂道が長い途中の地藏尊八歩

席題 艶 かほる選

額椽の艶電燈に光つてゐ羊之介
看護婦を笑わせてゐる顏の艶滿潮
ハイキング皆健康な頰の艶五黃子
艶ふきん律氣な母と二人きり友帆

席題 見本 八歩選

日本の旗が旗屋の見本なり小松園
見本品それはおすしの蠟細工艸樂
染物屋見本の色に念押され みつる

見本市國產品で埋めてゐ　洋々
見本ぎれ潤めて子供の店が出來　角嵐

席題　聲明　友帆選

聲明を出して内閣疵がつき　龍紅
ムッソリニーの顔まで入れた聲明書　みつる
聲明書迷を解くにはちと足らず　艸樂
聲明へ新聞記者は固くなり　艸樂
聲明書出して工場は靜かなり　滿潮

席題　みかん　白柳子選

酒臭い息でみかんの皮をむき　艸樂
みかんから心が解けて汽車の旅　八歩
みかんの皮母は大事にしまふなり　みつる
寢正月みかんの箱を一つおき　同
(佳)童顔の兄はみかんの皮を積み　かほる
(同)春三日みかに染みた爪となり　角嵐

兼題　個性　小松園選

その個性世に出る運を又にがし　彩泡
子が出來て母の個性は無視される　滿潮
良い夫婦結ろひ合ふてゐる個性　龍紅
(佳)一人子の個性へかまひ手が多く　艸樂
(同)階級にふれて個性のゆがみきり　八歩
(同)深窓に育ち個性を輕く見る　滿潮
(軸)吸殼へ個性を見せる長みじか　小松園

兼題　机　艸樂選

親しさは机の横へ座らされ　かほる
名案に机はきつく叩かれる　みつる
ストーブのそばの机は支配人　同
頬杖をついた机へ雨の音　洋々
獨身の机スターの寫眞など　彩泡
失戀の机の花も散りかゝり　昇鯉
泣いてゐる譯は机の下にあり　小松園
(人)失戀の机はなれぬ日が續き　八歩
(地)風呂にゆきますと机に書いておき　彩泡
(天)復習の机に熱い〳〵　芋村句藏
(軸)小机もお針も十六燭へより　艸樂

川柳雜誌社
簸川第二支部
高松吟社句會（島根）

十一月十二日夜　於後藤松鶴堂　大朗報

兼題　甘言　大朗選

甘言に旦那チップをはずんだり　朴泉
大阪はよいとこだつせと周旋屋　同

兼題　名案　茂都子選

名案にぐつと呑みこむお茶が冷え　笑朗

席題　秋　好郎選

せゝらぎへ秋わ小さくゆれている　凡愚
未忘人ゆく秋へ身を浸し　京二

兼題　盃　朴泉選

盃の冷へたまんまの腕を組み　好郎
盃を女同志はゆずりあひ　笑郎

川柳雜誌社
簸川支部
大地吟社句會（島根）

十一月十五日夜　新宅　綠之助居

秋雨けぶる夜高松村に轉宅せる綠之助氏新宅に於て轉宅披露並びに新同人披露例會をかねてなげやかな一夜をあかす雨の爲か新同人の顔が見へなかつたのは殘念であつた。

（凡愚報）

兼題　新人　綠之助選

新人の夢は情熱の詩となりて　傳重
初舞臺踏んだ其の夜の寢つかれず　朴泉
新人も何やら嬉しく座に直り　凡愚
新人はビールを二本さげてくる　章泉
新人に妻のある事知らずして　朴泉
新人の頭に浮ぶ母の顔　祥月
新人へ人氣の雨とアンコール　同

兼題　轉宅　凡愚選

轉宅へみどりの村は迎へてゐ　笑朗
綠之助の轉宅地
明け暮れもはろばろひらく新天地　大朗
轉宅の青き疊で身へ泌みる　好郎
轉宅に名譽を捨てゝ菊いぢり　章泉
轉宅へ晴れた心と青い空　祥月
轉宅の日暮れて子等の聲淋し　傳重
蛛蜘の巢を殘して淋しかしや　札樗柿
轉宅へ呑み友達は呑みに來る　綠之助
轉宅に長屋だけなる人情味　章泉
轉宅の朝子の靴素直にならべられ　大朗
(軸)轉宅のやつとすんだ灯のあかし　凡愚

席題　約束　大朗選

約束はしたけど自轉車向ひ風　笑朗
ゆくすへながし約束したものゝ　好郎
約束へ女のひとみわ泣いてゐた　凡愚
約束を守る娘の無口がち　朴泉
爽竹桃咲けば指切りました思ひ出よ　好郎

約束を果さず平凡な父となる傳重　約束は確かに屆く目の動く　紋之助

席題　物色　好郎選

物色へ女給逃げ込む樣に行き笑朗　懷手堀出しものを狙つてゐる紋之助　うさんな男よ、何を探して夜の街凡愚　五十錢堀出物は更になし朴泉

川柳雜誌社　**神戸支部小集**（神戸）

十一月十六日　於明珠居　竹楓報

貸家　互選

貸家札意地惡るそうな近所の眼吉左右　若夫婦貸家を探す日曜日幸捐　はらんでる女房と貸家見に歩るき明珠　北風にきりきり廻はる貸家札同　冬近し貸家の札を張りかへる竹楓　貸家から出ると隣りの目と出會ひ同

癖　互選

大臣の癖ゴシップにされてゐる幸捐　灰皿へ癖を拾つて居る刑事吉左右　思ひ出は癖など話し夜を更かし明珠　其の人の癖を話して待つてゐる同　頭かく癖先生として叱かり同　女秘書社長の癖をみな覺へ竹楓　爪を噛む癖が良緣取り逃がし同　戀人の癖を知つてる戀仇同

詩　互選

男性の心は之れぞ詩を吟じ竹楓　想ひ出の詩吟露營に聲もなし同　詩吟朗々眼下の敵をのんで居る吉左右　詩吟いま神州男子こゝにあり幸捐　律義者醉へば詩吟をやるといふ明珠　ほろ醉ひの足で大きく詩を吟じ同

心中　互選

心中の相手と知らず犬がぢやれ明珠　年頃の心中沙汰へ論を持ち吉左右　ガス心中借金取りに見つけられ幸捐　死に行く二人と知らずからかわれ竹楓

川柳雜誌社大鐵支部　**畔柳社動物園句會**（大阪）

十一月十六日　於天王寺動物園

兼題　猿　九天選

猿の尻上向けて寢る日本晴秀太　絨毯の厚さ仔猿を飼つてゐる水客　猿芝居いやしいとこも見せられる木履　手を水につけて餌がある猿ケ島久米雄　凡人をづらり集めて猿喰べる某人　猿の檻晦日を逃げた人もゐて同　（軸）猿廻しお茶をよばれた廻し樣九天

席題　熊　某人選

白熊は北極の景色にされてゐる木履　北極の積りで熊は欠伸する久米雄　熊ぢつとホームシークのかたちなり天秋　沈思默考月の輪熊は穴を出る九天　（人）熊の背を大きく越へた芋のへた木履　（地）ルナパーク北極熊へ陽がかげり水客　（天）巨大さに默つて熊を見て通り天秋　（軸）十二月熊もなか〳〵氣忙しい某人

席題　あじか　杏林選

待呆けあしかの聲が聞えます水客　痩せた人あしかの蔦に氣壓される某人　空腹のあしかへ閉館ベルが鳴り久米雄　あしか鳴く動物園の冬近く一蜂　（軸）一尾の鰯爭ふあしかにて杏林

川柳雜誌社　**伯耆句會**（鳥取）

三鴨美笑報

十一月十六日　於伯耆川柳會事務所

兼題　番犬　美笑選

凄い顏した番犬はよく馴れてけんじ　こざかしき小僧番犬なづかせる秀峰　番犬を飼ふ身となつて金を貸し鷄石　刑事とは知らぬ番犬ほえるなり小判　番犬を叱つて受取る紅封筒秀峰

兼題　涙　秀峰選

母親の涙を偲び入營し起人　親のない子供涙にもろいなり美笑　法律も涙があつてありがたし同　旅稼ぎ涙にうつる同じ月小判

兼題　人聲　鷄石選

あの聲はやつぱり知つた人であり小判　年老の人聲聞きて手を休め柳里　人聲のする濱邊は霧の朝けんじ　アナウンサーでもない人聲聞こえて來秀峰

席題　手袋、自惚　互選

勞働が勞働ですと手袋を　柳里
自惚はすゞしい顏でうたい出し　小判
ポケットの中で手袋にぎりしめ　蘭鐘
若妻の炊事手袋買つてやり　同
自惚の女の顏のまんまるい　起人
この子えと自惚て居る父の顏　同
油じむ父の手袋ありがたし　同
おもむろに手袋はずゝ巡査なり　秀峰
手袋をくわへたまゝでつりを取り　同
自惚の顏ゆがんでいる昇給日　同
自惚へ女給すかさず惚て見せ　美笑
自惚て通ふ男を犬が嗅ぎ　同

川柳雜誌社　**高知句會**（高知）

十一月廿一日　於　ブラジル　春水報

席題　産婆　機見女選

よく出來る家と産婆も思つて居　春水
兒を賞めて産婆はうぶ湯加減する　翠川
初産の産婆が遲い郊外地　珍榮
間に合はぬ産婆の下駄の裏返り　泉流
（軸）やう〳〵と産婆の去んだ聲さなり　機見女

席題　三人　翠川選

三人の保證の判に揉めてゐる　泉流
ジャンケンで決めた三色のソーダ水　機見女
麻雀へ一人缺げてるお晝すぎ　夢二
（佳）三人で醉ふ嬉しさも關東煮　春水
（同）三人の友が三つの癖で醉ひ　濁水
（軸）三人の父となる日の髭が伸び　翠川

席題　牛　春水選

起重機へ賣られる牛の素直なり　翠川
雨乞ひの百姓やせた牛をひき　泉流
踏切で牛の尻尾を可笑がり　夢二
秋の日も牛の歩みは變らない　松翠
（佳）賣買が決つた牛の無表情　寛道
（人）仔をつれた牛へ小春の陽がやほう　翠川
（地）牛の尻ばかり叩いて增す白髮　濁水
（天）悔やむ心に牛の瞳を思ひ　機見女

兼題　机　濁水選

（秀）榮轉の人を待つてる社の机　翠川
（同）戀に泣く机となりて二十一　機見女
（人）昇給の机うれしいペンを執り　春水
（地）成功を夢見る机古びてる　松翠
（天）晩學の机きちんとわびしまれ　機見女
（軸）秀才と机を母は案じられ　濁水

川柳雜誌今治支部　**靜太追悼句會**（愛媛）

十一月廿三日　於貯蓄銀行支店　宵明報

秋深く突然靜太氏の訃る聞く同志集ひてこの悲しみを共にす西蓮寺住職の回向今は亡き靜太の寫眞と二枚の短册へ燒香をする。

追悼句（靜太氏の句より）

秋のさみしさまた一葉散る　藤生
笹舟をかえす風あり南無靜太　宵明
靜かなる窓に肺脈はたと止み　鶴聲
やがて橇地平線に消えむ　曉童
生命を一句一句にわけたるか　文庫
句の命人の心へ生きてゐる　同
川柳へ永く生命を殘しとき　同
笹舟を二ッ並べて秋深き　一風

兼題　トロッコ　原田一風選

トロッコの盡きる處の假事務所　都留逸
トロッコへ葉書一枚ことずける　同
トロッコへ山の娘の戀を乘せ　同
トロッコの中でルンペン虫をきゝ　柳石
トロッコの女の乳は脇へ出し　宵明
文身もありトロッコを押す女　同
トロッコへ此處から沙婆の風が吹く　同
決裂へトロッコ脫線したるまゝ　同
廢坑のまゝトロッコの腐りかけ　同
さすらいの當分こゝでトロを押し　心府
（軸）トロッコが通ふ小さな平和境　一風

兼題　前借　曾我部宵明選

前借をしてタクシーで急ぐなり　曉童
前借ほ孝行すると云ふて借り　同
前借へ女將は横を向いたまゝ　心府
前借へ散る氣の娘村を出る　一風
前借へ未だ三味線ほひかれない　柳石
前借をさせて親方不安なり　鶴聲
前借のたかが十圓札二枚　都留逸
前借があつてサービス拔目なし　一風
（佳）前借の錦紗へ酒を酌ぎこぼし　心府
（同）前借を言ふべく晝を拔いて待ち　曉童
（軸）前借りの顏を會計心得る　宵明

兼題　宿帳　平井藤生選

宿帳へ道中師とは書かなんだ　心府
宿帳へ戀の名二ッ竝べられ　宵明

番頭の世辭で宿帳たゝまれる　同
宿帳へ父娘にしてはと疑はれ　柳石
宿帳の歳へ見直す顏があり　同
宿帳へ名を考へる逃避行　文庫
(佳)宿帳は帳場が書いて指定宿　都留逸
(同)宿帳へ明日の天氣を考へる　柳石
(軸)特等は新婚ですと帳場から　藤生

席題　走り書　長野文庫選

走り書封筒の糊付いていず　曉童
借金のことはりを最く走りがき　三郎
走り書後二三字で芯が折れ　曉童
鉛筆がこゝで折れてる走り書　宵明
走り書一寸急所へふれておき　同
小使が屆けてくれた走り書　鶴聲
走り書自分も讀めぬ眉をよせ　曉童
戀人の手に渡された走り書　藤生
走り書此の字はこうと言ひきかせ　曉童

席題　伽噺「浦島」　渡邊曉童選

龜の背で太郎しびれを切らしてる　一風
ふるさとで浮氣するなと玉手箱　同
(佳)三文とつけて浦島龜を買ひ　宵明
(同)眞つ白になつたら龜は海へ逃げ　同
(軸)浦島は潮が來るまで考へる　曉童

川柳雜誌社　十三支部例會（大阪）

十一月廿三日　於　神津青年團集會所

選評者、猿、靜路、琴泉、源太、德三、帆船、角嵐、牧人。出席者二十六名（牧人報）

秋雨へ空虛をかこつ空地なり　やすを
三男も反抗をする齡となり　かはず
順番は望みの薄い長い列　南星
嫁く日の娘にすまぬ借り衣裳　とみを
反抗の瞳がぢつと見据えたり　銀星
嫁ぐ日の調度はほゝえましく並び　伸柳
凡人の神信心もあてがあり　奇平
御守りも上下があつて金をとり　同
凡人の集るところ喫茶店　星湖
宴會の席上下無きかくし藝　同
順番へバットもみ消し立ち上る　玉芳
新社員話題の主にされてゐる　同
反抗は身の爲でなし平社員　せつを
腕組みへ時計の音が氣にかゝり　柳京
嫁ぐ日の自働車派手に圍まれる　同
順番は三女が嫁ぐ番となり　帆船
話題ふと不實な女の事に觸れ　同
寄席が立つ噂のまゝの空地なり　同
夜の空地に救世車の聲寒し　同
算盤を前に腕組してるなり　同
話題にもならぬ事件を素通りし　同
嫁づいた日から悲運がつきまとひ　同
世辭輕るふ仲居は順に酌いでゆき　曉兒
話題から〳〵へ女四人ゐる　同
嫁ぐ日の夢を見てゐた雨の朝　同
順番へうしろの方はよく怒鳴り　琴泉
嫁ぐ日は近し雜誌に讀むところ　同
如才なき男話題を讀んで出る　同
話題には疎くバットを吸ひ續け　同
嫁ぐ日へ母は女として訓し　猿
いぢらしい反抗石を持つて追ひ　同
反抗の氣勢を示す肩の線　同
失敗へ亦凡人の愚痴となり　同
忍從の空地の隅の日向ぼこ　源太
故郷の空地そのまゝあるもよし　同
反抗の口笛吹いて出て仕舞ひ　同
反抗の扉の音を聞いて置く　同
腕を組む事も淋しき癖となる　靜路
醉ふた目に光る空地の水たまり　同
火葬場こゝも上下の差別あり　同
興奮も競馬戻りの人らしい　同
凡人のマッチを貯めてみたりして　晴夫
腕組の父の姿へ夜が冷え　同
傷心の空地に佇てば畫の月　同
風のある空地白痴の子が一人　同
興奮のそのまゝ月と歩くなり　同
醉ひそうになつて席順考へる　角嵐
反抗を母の優しい瞳が抑へ　同
資本家へ反抗と書く赤インク　同
サーカスがまた來る空地草が崩え　同
興奮の若さがふいと怖くなり　德三
興奮を女嘲けるやうに立ち　同
腕組みへ師走十日の下駄が冴え　同
泣いてゐる女を前に腕を組み　同
凡人の惱み相談關が聽き　牧人
夕飯を空地へ親は呼びに來る　同
反抗へ社長大きく涕をかみ　同
反抗の理由を巡査聽き入れず　同
反抗のある日の妻の美を見たり　同
海山の恩へ手をつく嫁づく日　同

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

【大阪】▲佐々木三福君(大連)は十二月二十六日不朽洞を訪問されたので、路郎主幹が汀柳君と共に同行新大阪ホテルで柳談、夜は與三郎君を加えて痛飲さる。▲本社御池橋支部では十二月十四日創立五週記年念句會を催し創立より現在迄の指導の任に擔當された高橋かほる氏に記念品を贈呈さる。▲橋本綠雨君(本社同人)は十二月十八日妙見寺に遊ばれた。▲新見世間晉君(本社同人)は「なんぼの市場」日刊紙に柳壇を新設、擔當をさる二月號課題「市場」「發展」各五句締切一月十五日、呈賞。▲增位汀柳君(本社輯編長)は十二月五日私用で名古屋に行かれ、同人吉田水車君と寸暇懇談さる。尙一月四日五日東京麻生校で開催の全國學校の卓球大會に役員として東上される筈。▲平井與三郎君(本社同人)は二十五日京へ、「クリスマス京へ來てまで醉拂ひ」。▲尾崎方正君(阪大川柳會同人)は阪大醫學部耳鼻咽喉科同窓會「三九會誌」の漫錄欄へ「再び私の緣談に就て」及文藝欄へ「自畫自賛」と題して所感に自句を配した讀物を執筆されてゐる。▲天野卜居君(梅田支部同人)は十一月十五日女兒御安產郁子と名づけらる。▲平井節子さんは聖バルナバ病院より發行の「聖母講座」二卷一號に川柳を發表▲脇田梅子さんは弟さんの結婚式參列の爲夫君同伴にて上京さる。▲サロミン嘉實商事會社内の家庭生活研究會發行の「明るい家庭」新年號の新春よみもの欄へ麻生路郎主幹が「川柳張交ぜ屏風」を執筆される。▲番傘川柳社では小田夢路君編纂に係る昭和九年度の「番傘自選句集」を刊行された。▲磯野いさむ君の姉なか女は十一月二十四日永眠せらる。▲加藤八白君は大惠と改號。

【臺灣】▲宮内耕朗君(臺中)は一月上旬に來阪本社を訪問される由。

【北海道】▲函館川柳社では昭和十一年を以て創立滿二十周年を迎へるので、其記念事業として一月中旬函館市丸井デパートにて「川柳趣味展覽會」を盛大に擧行される出品は一月八日迄に到着する樣希望さてゐれる。▲富士野鞍馬氏(東京)十二月二十四日より北海道より「入港の汽笛嬉しい音になり」、一句送らる。

【大連】▲大連市埠頭ビル内に花嫁吟社創立さるる由。

【福島】▲「火柱」創刊さる。福島師範寄宿舍同發行所。

【石川】▲高松三々浪君(柳人街同人)は金澤市水車町二四へ轉居。▲加能川柳社の投稿所は金澤市博勞町二七西田方移へる。

【京都】▲市川新升丈(元歌舞伎俳優)は西田天香師の下に洛東山科の一燈園で懺悔の生活を送つてゐられたが十二月二十二日夜九時半同園内客寮で狹心症のため五十一才で逝去された、丈は川柳に造詣あつた方だけに哀悼の感更に深いものがある。

【神奈川】▲横濱貿易川柳會では十二日九日、七澤温泉吟行會を催さる。

【靜岡】▲榎田珍竹林氏(靜岡川柳

主宰）は三島に高僧を訪ねらる。「高僧と居る庭園の水の音」

【島根】▲福田山雨樓君（本社東京支社長）「みなかみ」に句會雜感と題して執筆された。▲「みなかみ」松江市寺町みなかみ發行所より創刊。

【鳥取】▲富士野鞍馬氏（東京）は山陰旅行に出られ、鳥取で鐵脇君に會ひ、大社參拜、國造溫泉、關の五本松へ「きくならく松江藝者の安來節」「國造大社歸りの大一座」

【愛知】▲鈴木可香、神谷其船、長谷川鮮山の三君の共編で「なごや名所紫のおもひで」を刊行された

【山口】▲三原狂路君山口縣豐浦郡黑井村へ移轉。

【滋賀】▲川上日車氏（近江）は十二月二日今治に旅行、吉岡旅館に二泊、今治柳人と懇談された。「大阪を雨の晴れ間に渡り來しに四國の土はいまだ乾かず」

【愛媛】▲渡邊曉童君（今治支部同人）は十二月二日大每今治販賣所へ入所さる。尙目下「川柳七人集」を編輯中と。▲在間小樓君（今治支部同人）は今治市驛前二葉支店内へ轉居。▲本社今治支部では十一月二十三日支部例會を兼ね石森靜太追悼會十二月八日忘年句會を催さる。▲川柳みすか（今治）は十二月號を窪田而笑子追悼號として發刊された。

【兵庫】▲食滿南北氏（本社客員）は十二月一日頸に瘍ができて阪大病院南二階八號室に入院された。全快を祈る。▲喜多春秋君（本社同人）ふあすとに「投句」と題して執筆された。▲山崎邦雄君は神戸市須磨區兼廣町六五へ轉居。

【東京】▲淺田一博士（本社賛助員）は舊蠟より病臥されてゐるが切に御全快を祈る。▲木村新蟬君（川柳むさしの主宰）の懇話會は十一月二十八日夕新宿安田本店にて開かれ東都柳壇の巨星が出席された▲井上信子さんを勵さるゝ會は十二月二十六日夕會場新宿白十字堂にて催さる。▲川柳「蒼空」は井上信子さん主宰十二月創刊號が發行された。▲川柳久良伎全集十卷が刊行される事になり、豫約申込を募つてゐる。▲三浦太郎丸君の句集が三月上旬、川柳おもひで吟社より刊行される由。▲田中庸好君は東京市大森區入新井一ノ一七四地へ轉居▲三越川柳會より來春早々年四回の豫定にて「川柳富士」發行さるゝ由。▲品川區南品川町四丁目川柳天馬吟社より「川柳天馬」發行さる。▲謄寫刷誌「神明川柳」花夢樓の肝入りで發行さる。▲宮尾しげを君（漫畫家）華燭の典を擧げられる、御慶び申上げる。▲懸賞川柳募集、題「江戸時代の刊罰」十句、選者、三太郎、鬼佛氏賞十秀迄、明治天皇御製句、〆切一月十日、投句所、東京市赤阪青山南町四ノ二二、植木鬼佛宛。▼村田周魚氏（川柳きやり主幹）は腎臟疾患にて信州方面の溫泉へ療養さる。▼川村花菱氏（本社賛助員）は「食通」十二月號に「たべもの漫談」を執筆された。▼梅本塵山氏（本誌當世不通漫談執筆者）は近來胃腸病に惱まれ日々半起半臥であるが、小康の時には執筆をされてゐる。切に全快を祈る。

社告

◎本社新公認選者を左の通り昇格並に推薦された。

個人選者

姫田　夕鐘　　山本　丹路

市場沒食子

共選組選者

村松　夢裡　　妹尾　變人

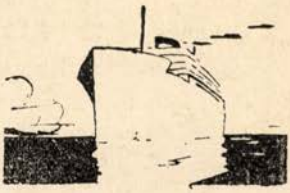
奥野　禿山

支部選者

江戸みつる　　岡田　某人

西　いわを　　松下小柳子

大鶴　喜由　　曾我部宵町



編輯の窓

新年お芽出度う。

×

▼慌しい師走の裡に漸く新年號の編輯を完了して、迎春の心地よいテンポに和する事が出來たのは、全く諸氏の御援助に依るものと深く感謝をしてゐる。

▼丙子柳壇を迎ふるに當り、使命と責務の重且つ大なるを痛感し、わが社は第十三卷を世に送り出して躍進又躍進の足跡を印し諸兄姉の御愛顧に報ゆる覺悟である。

層一層の御援助を祈つて俟まない。

▼本號より色ページを增設して新年特輯篇として本社、賛助員客員の方々に「酒と私」に就いての回答を頂いた好讀物を滿載した。尙ア・ラ・カルテ其他を包含して斷然色ページのやはら本號を飾られなかつたのは殘念であるが、啞三味、雨迷兩君の論評に、柳石、艸樂兩君の文苑濤明氏の承德見物記などを得て其の償ひを出來たのは講辭を頂けるものと信じてゐる。

▼毎年新春號に大好評を博してか味を作り擧げた。

▼路郎主幹は多忙の爲め卷頭言の代りに「金色蝙蝠」と題して隨感を書かれたがこの欄により今後身邊雜記風に毎月執筆をして頂く事となつた。

▼山雨樓氏の原稿が業務繁多でゐる「日本柳壇百人撰」は全國の有名作家を一堂に蒐めたもの勿論一粒撰りの寶石篇として觀賞玩味すべき殿堂であろう。

▼色ページに挿入した川柳マッチは本社例會の出席者に呈上した1935年の所產である。今後も毎月續けて呈上する事となつてゐるので、全部揃えられる樣にお奬めする。尙このマッチは梨夢君の寄贈によるもので茲に謝意を表す。

▼舊蠟本社支部聯合主催に忘年川柳會は前掲の通り、未曾有の盛觀を呈した事は昭和十一年度に拓けゆくわが社の前途に光明が輝いた。

▼月評及び二十日會記事は休載となつてゐるが次號より復活、併せて川柳指導講座の講師交代で休んだのも、新擔當の塚越正光氏の講評が二月號より連載されるので皆樣の待望が充される事と思ふ。

▼本號表紙畫は富本憲吉畫伯の揮毫されたもの、路郎主幹の秘藏されてゐるのを拜借した。味はつて頂き度い。

—汀柳—

賀正

丙子元旦

麻生路郎

麻生葭乃

川柳雜誌社關係の人々

（類にろい）

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　國枝史郎　松本研作　藤本卯之助　顆原退藏　赤井清一　淺田司

客員

末弘嚴太郎　伊藤彦造　鳥山一歩　大谷五花村　大鳥濤明　大西長三郎　岡田三面子　小川龜武　井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　窪田銀波樓　安川久流美　前田雀郎　前田五健

同人

食満南北丘　柴谷宰二郎　篠原春雨　岡田某　吉田水車　川啞人　立井登美坊　竹内機見女　中西おさむ　中澤濁水　村松夢紅　岩崎柳路　森東魚　小林不浪人　藤里好古　蛭子省二　長谷川わを　西村山月　西村明珠　新見世間音　大鶴喜由　大西八歩　奥野禿山　眞田幸捐　青木史呂　明石柳次　阿形一杉　江戸みつる　後藤青兒　近藤新水　朝田鶴峰　福田石柳　原石風　石崎柳史　石曾根民郎　石場沒食子　熊谷紅　松下小柳子　中澤濁水　西おさむ　平井春光　平井蒼太　水谷鮎美　宮岡白峰　高橋かほる　永田里十九　北山悟郎　喜多春秋　春元紀太　生田翠夢　日野華水　姬田夕鐘　平井與三郎　東谷聞路　山本雨迷　西田艸樂　橋本綠雨　廣田六浦　廣原都會人　毛利九波　妹尾變人　關本雅岡　須崎豆秋　首藤竹楓

編輯局（同人）

庄萬よし　麻生路郎　主幹　福田山雨樓　支社長

道頓堀支部（大阪市）幹事　奥野禿山
九三會支部（大阪市）幹事　北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事　首藤竹楓
函館支部（函館市）幹事　龜井晟修
高知支部（高知市）幹事　國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事　水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事　米田まさる
田邊支部（和歌山）幹事　辻左馬
簾川支部（島根縣）幹事　尾綠之助
京都支部（京都市）幹事　明石柳次
鳥取支部（鳥取縣）幹事　中島鐵州
松山支部（松山市）幹事　石丸晴朗
御旅支部（大阪市）幹事　生田翠夢
天王寺支部（大阪市）幹事　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）幹事　西いわを
松江支部（松江市）幹事　奈良井柳人
塗青支部（大阪市）幹事　熊谷紅
大鐵局支部（大阪市）幹事　植山九天
西條支部（愛媛縣）幹事　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）幹事　增位勇多子
今里支部（大阪市）幹事　市場沒食子
玉造支部（大阪市）幹事　清水友帆
今治支部（今治市）幹事　曾我部宵明
光笑會（大阪市）幹事　永田里十九
新居濱支部（愛媛縣）幹事　木村默紅
伯耆支部（鳥取縣）幹事　三鴨美笑
竹原支部（廣島縣）幹事　町田承春
簾川第二支部（島根縣）幹事　後藤大朗
市岡支部（大阪市）幹事　平井春光
十三支部（大阪市）幹事　淺野牧人

投稿規定

▲投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は同人に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問答はすべて返信料封入の事。

募集

第十三卷第三號課題

一月五日締切

（各題十句以內）

▼春風　山本雨迷選

▼卒業　山本丹路選

第十三卷第四號課題

二月五日締切

（各題十句以內）

▼辛抱　橋本綠雨選

▼物干　須崎豆秋選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切は事務所宛

價定

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▲御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます▲送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも預ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▲御注文には何月號よりと御指示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▲川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十年十二月廿五日印刷
昭和十一年一月一日發行

第十三卷　第一號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　電話天下茶屋二五七九番

事務所　川柳雜誌社　大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地　電話南六四四番　振替大阪七五〇五〇番

支社　東京市蒲田區女塚町一三七　川柳雜誌東京支社

禁無斷轉載

賣捌書店

（大阪）大賣捌大賣社書店—明文堂　其他　市內各書店—（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店　玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田、寶文館（函館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

川柳雜誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）改號、移轉、句會案内、柳書廣告、その他

路郎先生執筆

路郎先生筆春掛用、掛軸、横額小物、短册を川柳家に限り左の通りで頒布致します。

軸箱入　貳拾圓・額　拾圓
小　物五　圓・短册　參圓

御申込は前金で本社事務所へ

川柳手拭

麻生路郎先生執筆

路郎先生最近執筆の新調です左の通りでお頒ち申上ます。

一　枚　金　貳　拾　錢
（送料二錢）

御申込は本社事務所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第二卷より第十卷まで。

各一卷　金壹圓五拾錢
第十一卷及第十二卷　金參圓
送料大阪市内　一册六錢
市外　一册廿四錢

御申込は前金で本社事務所へ

投句用箋

川柳雜誌投句用箋の昭和十一年度新製が出來ました。投句には本社正規の此用箋を御使用下さい。

五十枚綴　二册　金拾貳錢
（送料共）

御申込は本社事務所へ
＝切手代用も可＝

殘本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます。

第二卷より第三卷迄　一册　十五錢
第四卷より第十一卷迄　一册　十錢
第十二卷　一册　二十錢
（送料一册一錢）

御申込は前金で本社事務所へ

同人・支部規定

本社同人入社の規定及び支部設置の規定は別に定めてありますので、御希望の方は本社事務所宛お申越下さらば、熟議の上決定致す事となつてゐます。

句會案内

本社句會案内御希望の方は左記へ御申越下されば、其の都度お知らせ申上ます。

大阪市住吉區住吉町一六四
宛先　會報係　奥野禿山へ
（電話南八六七番）
（南五花街事務所）

川柳家名鑑

全國川柳家名鑑の作成に取掛つてゐます。左の通り御記載の上ハガキにて御報らせ下さる樣お願ひ申上ます。

姓名・雅號・生年月日・
現住所・職業・簡單な柳歷

宛先　本社事務所内
係　增位汀柳へ

懸賞川柳

課題「頬紅」〆切一月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
賞品は秀逸數句に薄謝を呈す

選者　麻生路郎氏
宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

朝報柳壇

雜吟を募る　用紙ハガキ
川柳家の雜筆を散迎する
選者　增位汀柳氏
宛先　大阪市天王寺區上汐町一丁目
大阪朝報社柳壇へ

大夕柳壇

雜吟を募る　用紙ハガキ
選者　川柳雜誌社同人擔當
宛先　本社事務所内
大阪夕刊新聞社柳壇へ

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八
（取次所）川柳雜誌社事務所
川上三太郎主宰
（毎月一回發行）

川柳研究

一册金廿錢
半年金一圓
一年金二圓

異色ある本誌の創作欄と初心者への入門欄をアナタは絶對に見逃してはいけません

見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ
東京市王子區上十條町八五〇
發行所　川柳研究社

謹・賀・新・春

池澤樂居
大阪府高石町北六二六

大阪帝國大學醫學部
長崎柳秀

前田五健
松山市眞砂町二一

富士野鞍馬
東京市杉並區高圓寺
六ノ六八五

福田山雨棲
勤務 東京鐵道省工務局人事
住所 横濱市保土ヶ谷三三三

西田艸樂
大阪市東區元伊勢町
昭和園

山本雨迷
大阪市東淀川區中津濱通
一丁目一〇二
電話北三八〇五番

增位汀柳
大阪市天王寺區上汐町一
電話南六四四番

高橋かほる
大阪市南區北炭屋町二〇一
電話南五九六番

山本丹路
大阪市住吉區帝塚山中二ノ三八
電話櫻川五二四五番

須崎豆秋
大阪市住吉區旭町三ノ一四
電話天王寺一〇一五番内藤

中澤濁水
高知市本與力町

謹・賀・新・春

小川百雷
大阪市住吉區天下茶屋二丁目十一

植山九天
兵庫縣川邊郡小田村潮江堂後一四

岡田某人
神戸市須磨區飛松町五丁目二十二番屋敷

金泉萬樂
尼崎市東櫻木町四二

吉田水車
名古屋市東區南大津町一共濟ビル山武商會
電話中四三三五番

大鶴喜由
大阪市東成區大今里町四三二

廣原都會人
大阪市南區南桃谷町一五
電話南一一一六番

森立名
大阪府吹田町一三五〇

加賀佳汀
大阪市天王寺區寺田町九番地

石崎柳石
今治市城山通り

相場の聞きたい人はお越し下さい
安井ひろし
自宅 兵庫縣武庫郡魚崎町六〇六
中央經濟 大阪市東區唐物町四丁目三〇（御堂筋大廣路東側）電話船場五二八八番

忌中に付き年末年始の禮御遠慮申上候
市場波食子
大阪市東成區大今里町三九五

謹・賀・新・春

川柳雜誌社竹原支部
町田承春
廣島縣竹原町

川柳雜誌社西條支部
荒井英賀夫
愛媛縣西條町新町

川柳雜誌社伯耆支部
三鴨美笑
鳥取縣西伯郡手間村

川柳雜誌社簸川支部
大地吟社
尼綠之助
島根縣簸川郡高松村

川柳雜誌社簸川第二支部
高松吟社同人
杉原朴泉
尾添好郎

函館川柳社
函館市青柳町

川柳雜誌社御池橋支部

西區四ッ橋南日本樂器會社內
村松夢裡

住吉區住吉町一七二七
後藤青兒

東成區生野ヶ丘
西いわを

東成區生野ヶ丘

川柳雜誌社神戸支部

西村明珠
林田區七番町四五

八薙刀郎
神戸區中山手通七丁目一七七

小原吉左右
湊區湊川町五丁目廿三〇

喜多春秋
兵庫區三川口町三丁目一〇八

眞田幸捐
神戸區再度筋町九五

首藤竹楓
葺合區野崎通二丁目三九(事務所)

日野華水
神戸區中山手通七丁目五四三

川柳雜誌社市岡支部
平井與三郎
大阪市東田中町四丁目

謹・賀・新・春

高島玉兎朗

東京市日本橋區蠣殼町四ノ一

大島濤明

大連市西公園川柳居平洞
電話 自宅 三七一三番
振替口座大連二五六六番

食滿南北

あしや鉢の木十四

住田亂耽

うおざき五九八ノ二

大阪市南區疊屋町六番地

喫茶
洋食
支那料理

カナメ

店主 永田賢次

號 里十九

謹・賀・新・春

大阪市住吉區平野西之町八三
橋本緑雨
橋本美奈子

大阪市東成區深江町九八九
西村山月

大阪市天王寺區北河堀町六九
福田鶴峯

大阪市大正區鶴濱通り一丁目一ノ二
加藤ライト

大阪市大正區三軒家西二ノ六
松下小柳子

大阪府南河内郡柏原町本郷八
宮岡白峯
宮岡公子

大阪府豊能郡箕面喜樂園
妹尾變人

大阪市住吉區北田邊町九九七
關本雅幽

川柳雜誌社

御旅吟社

大阪市東區粉川町一六
電話東七五一五番

生田翠夢
大阪市東區粉川町一六

春元紀太
大阪府中河内郡
意岐部村字御厨三五ノ二

松田多郎
松田齒科醫院
大阪市東區十二軒町十二

近藤勇
大阪市東區粉川町拾六番地

江戸みつる
大阪市東區粉川町拾六番地

謹・賀・新・春

川柳雜誌社

梅田支部

長橋渡
中辻冬扇
山下秀峰
姫田夕鐘
天野卜居
林朔風
本橋坊茄子
神田美津生
前川正風
東明鐘
横田方眠
藤澤白菊
辻遊歩
宮脇大嶽
都藤古木
永田里十九

支部幹事

松枝靜波
川村觀月
增元翠陽
水谷鮎美

川柳雜誌社

道頓堀支部

奥野禿山
大阪市住吉區住吉町一六四
電話南八六七番
南地五花街

青木史呂
大阪市西成區鶴見橋通五丁目四番地

新見世間音
大阪市浪速區元町四ノ二三五

川柳雜誌社

今治支部

今治市西門通 原田一風
今治市大坪通二 渡邊曉童
今治市神明町 長野文庫
今治市中濱町三 古川鶴聲
今治市驛前二葉内 在間小樓
今治市南堀通松久内 平井藤生

喪中ニ付年賀缺禮仕リ候

川柳雜誌社今治支部
今治市米屋町伊豫貯蓄内 谷心府
愛媛縣櫻井町 曾我部宵明

謹・賀・新・春

遙かに見ゆる長城の彼方北支の工作を期待しつゝ日夜現業に精勵いたしてゐます
平素の御無音をお詫びし皆樣の御健吟を遠國より心からお祈申上ます

尙今般弊店は舊(小西街)より南大街へ擴張移轉しました倍舊の御引立を願上ます

康德三年正月一日

滿洲帝國熱河省凌源南大街

カフヱーモダン

岩崎柳路

岩崎松代

(電話一二六番)

川柳月刊「番傘」

菊版 九十六頁
定價 金二十錢

番傘川柳社

大阪市北區堂島北町一六
振替大阪七六九四四番

せんりう社

東京市向島區寺島町五丁目
電話墨田六〇七番

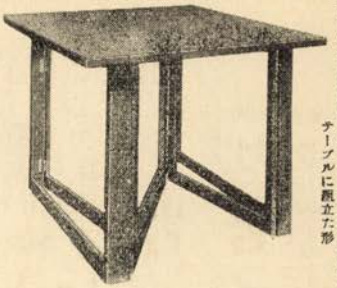
竹田花川洞
小竹りん也
武田玄六
神谷ち呂利
大野琴莊
高島玉兎朗
前田雀郎

日本最小最廉誌(年五十錢) 湯の村發行所

信州湯田中

柳風會

折たゝんだ形



テーブルに組立た形

萬能オリタ、ミ卓球臺

家庭型

日本卓球會理事
卓球タイムス社長

增位安貞氏御推賞品

增位安貞氏御主宰の卓球タイムス社のモットーに曰く「人生に缺くべからざるものはスポーツなり。終生續け得られるスポーツは卓球なり」と、老幼男女を不問ず室内にて樂しみ得るスポーツは卓球で、卓球こそは寒暑をいとはぬ室内スポーツの王座を占むるものであります。卓球の普及發達は各御家庭で、一家揃つて卓球に親しんで頂く事でその要求を御滿足せしむる卓球臺として六疊敷の御座敷らか出來る家庭型の御愛用を御願ひ申します手輕く出來て取扱ひ良くボールのバウンドは卓球ルールにかなつた秀逸品であります。

——◇——

萬能卓球臺はテーブルに組替へれば廣く左の通り用出來ます。

事務机、製圖臺、食卓、勉强札、麻雀臺、トランプ臺等々御家庭毎に一臺と萬能卓球臺の普及を念願として居ます。

增位安貞氏御推賞卓球臺家族で樂しむ家庭型

テーブル寸法（長 六、〇尺　巾 三、〇尺　高 二、二尺）

特價　十八圓也

實用新案第一二一〇七號

大阪そごう百貨店運動部にて賣出してゐます

卓球タイムス社代理部にてもお取次いたします

（テーブル寸法）　長サ　巾　高サ

家庭・小學生用　六尺三　尺二・二尺　價　セット付　**二十三圓**

公認選手練習用　九尺　四・五尺　二・四五尺　價　セット無　**三十五圓**

公認正規桂製　九尺　四・五尺　二・四五尺　價　セット無　**六十圓**

製造元　**マルセル工作所**

工場　大阪兵庫縣尼崎市戎町字津國甲子園三ノ三〇七番
電話　一〇七八四

發賣元　**八木松運動具店**

大阪市南區上大和橋西詰
電話　南　四一一七番

胃腸障碍を排除して生活を明に……

錠劑サロミンは食慾不振や氣鬱ぎ胃痛、腹痛、常習便秘に欠くことの出來ない胃腸强壯、消化と榮養の高級藥です。お試めし下さい！

西崎藥學博士指導創製

錠劑

サロミン

錠劑サロミンの適應症

慢性胃腸　榮養障碍
消化不良　虚弱兒童
常習便秘　病後產後

藥價
一〇〇錠　五五錠
三〇〇錠　一・五〇錠

發賣元　大阪市西區阿波堀通り一丁目一〇番地
出張所　東京市京橋區銀座西三丁目（正宗ビル內）

嘉寶商事株式會社藥品部

代理店　大阪・名古屋　小林大藥房新藥部

モリカワ グルコーゼ

固形葡萄糖

モリカワグルコーゼは日常茶菓同様に攝取出來る内服的の優秀榮養劑であります御承知の通り葡萄糖は人體にとつて生命の綱とも云ふべき重要な榮養素であつて從來醫家の手に依つて注射をして居たのでありますがこれが簡單に口より攝取出來る樣になつたのであります。

藥價 2.00 / 1.50 / .50

○健康增進、小兒老人・虛弱者

○營養補給、病後・產前產後・疲勞恢復・病中・ハイキング等の心身・スポーツ・登山

健康の創造への第一歩！

大阪市住吉區北田邊町一七六　電話天王寺四二七九　振替口座大阪五二三九　林道藥品部

藥品店にても販賣して居りますがハガキにて『川柳雜誌』に依る旨御記入御申込になれば早速代金引換にて御送り申上ます。

美しい手の保護に

専賣特許

タネムの

防水 防寒

炊事(すい じ)手袋(ぶくろ)

裏スヤリメいか暖

糠味噌へ炊事手袋
いさぎよし

つい派手に炊事手
袋米を研ぎ

臺所炊事手袋から
の冬

賀正

宗田(むねた)新商店
大阪市道修町二丁目
各藥店百貨店ニアリ

HARDLITE & GEARLITE

Gosei Kagaku Kogyosho

OSAKA JAPAN

特性

絶縁強力
耐熱耐酸
光澤美麗
耐酸

材質強靱

ハードライト
ギヤーライト
製

紡績用部分品
ジョツキープーリー
各種メタル
人絹用耐酸器具
高速度無音齒車

東洋紡績株式會社
鐘ケ淵紡績株式會社 御用

正賀

實用新案特許
GKジョツキープーリ

株式會社 合成化學工業所

本社 大阪市東淀川長柄中通二丁目一〇番地
電話堀川㉟一二八七番
研究室 大阪市北區扇町工業研究所内
電話北四九〇一番

取締役社長 淺海治平
專務取締役 鳥山隆夫 地平 一歩
監査役 山本彌一郎 雨迷

四國の深山の靈木から採ります

幽玄にして神秘

神仙 猗(イ) 蘭(ラン) 茶

原始人がお茶を飲んで羽化登仙の佳境に無病長壽であつたとの傳說から採り得たものでありまして今も尙矢神の功德嚴かに秘藏されてゐます即ち召上られますと

頭腦明晰・精力絕倫・病魔退散

其の大願が先天の偉業として成就せられてあります

萬人の嗜好に適しその近代的の味覺！

御家庭の必需品！

コーヒも紅茶もあきて猗蘭茶
猗蘭茶の湯氣へ一家の氣が揃ひ
猗蘭茶謝する心にしてかへし

價 一圓半 二圓半 五圓 (文獻進呈)

販賣元 猗蘭莊 高知市農人町 野村合名會社

電話一八七番 (振替大阪五三七五九番)

森戸辰男述

中小商工業者は何處へ行く

十錢

目次

はしがき
一、動搖する中間階級……（一）
二、フアシズムの出現……（六）
三、背腹の敵……（一二）
四、窮乏の由つて來るところ……（一三）
五、フアシズムの誘惑……（一五）
六、無産大衆と共に……（一九）
附資料
A、産業上の地位別人口……（二四）
B、職業別人口の産業上の地位……（二七）

發行所　大阪都民新聞社
販賣所　市内各書店

著者のはしがき

本册子は昭和八年二月二十日南區精華小學校講堂における大阪市都民新聞社主催の講演會で同名の題でした私の講演の速記であります。爾來三年になりますが、その中に取扱はれた問題はいまだ解決されないどころか、却つて深刻化したとさへ思はれます。だが、他方において我國の非常時も數ケ年續いたあげく、漸く國民は冷靜な判斷を回復して、フアシズムの正體に對して正しい批判を加へうる下地が出來てきました。初め、この講演を聞かれて半信半疑であつた人たちも、三年の後、その間の色々の出來事と併せ考へて、もう一度この小册子を讀まれゝばなるほどうなづかれる節も多いと思つて居ります。中産階級の窮乏は資本主義發展の必然の結果にほかならないのですから、資本主義の改廢のほかに根本的な方途はありません。ですから、獨占主義を强化するにほかならない統制經濟主義は中産階級を救ふどころかつ却て之を窮乏のどん底に突き落すものでありフアシヨ的全體主義は諸君に色々な中産階級的幻覺を與へながら廻り路をして結局同じところへつれて行くものにすぎません。統制經濟は獨占資本主義の「わな」であり、全體主義はその誘惑であります。之に反して資本主義の超克者であるところの無産階級の社會主義こそが中間階級にとつても眞實の救ひの道なのであります。それ故にかやうな旗印の下に闘ふ無産階級の運動はまた中間階級の眞實の味方でもあるのであります。

森戸辰男

勤勞市民の參考書として五十部以上入用の向きは特に割引す
大阪市南區難波新地二番丁二七
電話南(75)五八八〇番
庄　万よし

清酒

白鶴禮讃

白鶴が縁とはなりぬ君と僕
よろこびに添へて白鶴届けとき
白鶴の方に幹事は極めちまひ
母親も白鶴ならと一つ受け
白鶴をいつもきらさぬくらしむき

賀正

攝津灘

嘉納合名會社釀

謹賀新年

安産のために
ワダカルシユーム錠

楢林医学博士推奨
片瀬医学博士監査

片瀬医学博士述「安産のために」進呈

發売元
大阪 道修町 和田助商店

野間清治著

世間雑話

三十錢

—送料六錢—

一人でも多くの人に御覧頂き度い、犠牲的奉仕廉價！

出版界未曾有の大賣行

全國會社銀行學校各種諸團體より怒濤の如き大量注文諸名士愛讀者悉く激賞讃嘆！感謝！

又々大量大增刷

面白い〳〵トテモ面白くて爲になる。誰方もゼヒお早く御覽下さい。

右諸名士の肖像は拔萃せしもの（順序不同）

德富猪一郎先生

…始めから終りまで悉くみな野間社長の實踐躬行、體得身驗の内より得來りたるものたることを認め、如何にも敬服に堪へなかつた。之は客觀的に云へば世間に對する教訓であり、主觀的に云へば野間社長の自傳の付録であるとも云はれないことはあるまい。從來の『婦人よもやま話』は、正に現代の女大學と云ふべきものであらう。

文藝家 加藤武雄先生

…一字一句に皆含蓄があり、滋味があり、用語に悉く正格、直ちにとりて諸學校の教科書とするに足りる。會軒のそれに似て更に流暢。これを文章道から見ても優に一方の光彩たるを失はない。

海軍大將 山屋他人先生

…言上錄の跋に、道の微なる聲なく臭なく、言の能く靈くすところに非ずと云ふ意味のことが書いてある。然るに野間氏は『世間雑話』に於ていとも易々とこれを說かれ、しかも說いて微せざるところなく、所謂道は近きにありのことを深うせしむるものがある。君の此著は風教に益するところ頗る大なるものがあり、しかも社會の各階級を通じて德教上最も普遍的なる意義すべき名著である。

修養團主幹 蓮沼門三先生

…神に歸り、神を崇ばせ奉る時は盲人でも聾者でも、平安の生活と至上の歡喜と永遠の生命とを與へらるゝ事實を見る私は、神に歸る手引として書かれた『世間雑話』を衷心から兄弟姉妹に推薦する。

出世、成功を志す會社員望まる、青年男女諸君！

行員諸君、世に出んとする、もゝ、君、良緣を賣繁昌事業繁榮を望む、

非御覽下さい

全國書店にあり◎發行所東京 石川大日本雄辯會講談社（振替東京一〇〇三九）

恵方詣

初詣

住吉神社

金銀の小判が當る

大福引付切符發賣（十日より十三日迄）

四日福餅神事　七日白馬節會

十日初卯祭　十一日初辰祭

大鳥神社・方違神社

御陵めぐり（仁德・反正・履中及後村上帝御陵）

初旅

南紀樂園

白濱・湯崎溫泉（毎日難波より直通運轉）

新和歌浦・紀三井寺

龍神溫泉・椿溫泉

加太・熊野めぐり

高野山（難波より往復割引二圓半）**天見溫泉**

南海電車

水顔美びきにとり

うせまりとを物出吹びきに

うせまりなに麗綺らか地生

▲最も信用あるニキビ薬・美容劑！現代紳士淑女の愛物です！

▲蚊などに刺された時にも非常によし！

定價
.30
.50
1.00

本舗 株式會社 桃谷順天館